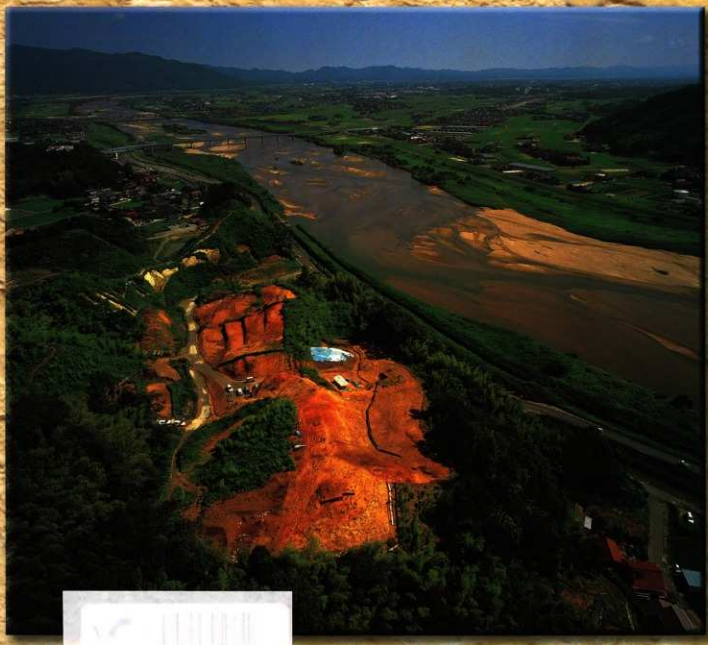
長廻遺跡 Vol.2 • 権現山古墳

斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅻ



2003年3月

国土交通省出雲工事事務所
島根県教育委員会

長廻遺跡（Vol. 2）・権現山古墳

斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書XVIII

2003年3月

国土交通省出雲工事事務所
島 根 県 教 育 委 員 会

序

国土交通省出雲工事事務所では、斐伊川・神戸川流域の抜本的な治水対策として斐伊川放水路事業を推進しています。

事業の実施に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分に留意しつつ関係諸機関と協議しながら進めていますが、避けることができない埋蔵文化財については、事業者の負担により必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当事務所では、放水路の早期完成を目指して、島根県教育委員会の御協力のもとに、平成3年度から12年間にわたり発掘調査を行ってまいりましたが、今年度の本報告書の作成をもちまして終了することとなりました。この間には、数多くの貴重な遺跡や遺物が発見され、先人の技術の高さや努力の跡を目の当たりにすることができました。これらの調査成果が、郷土の歴史教育や地域活動などに広く活用されることを願うと共に、埋蔵文化財に対するより一層の関心と御理解を得るための資料としてお役立てていただければ幸いに思います。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、御指導・御協力いただきました島根県教育委員会ならびに関係各位に対し心から御礼申し上げます。

平成15年3月

国土交通省中国地方整備局出雲工事事務所

所長　船橋昇治

序

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局（現　国土交通省中国地方整備局）からの委託を受け、平成3年度から斐伊川放水路建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査を実施してまいりましたが、今年度の調査報告書の刊行をもって終了する運びとなりました。本書は、このうちの平成12～13年度に発掘調査を行った長廻遺跡、権現山古墳の成果をまとめたものです。

斐伊川・神戸川の二大河川が流れる出雲市周辺は、古くから栄えた地域であり、数多くの歴史的文化遺産が残っています。今回の調査では、長廻遺跡において古墳時代初頭の竪穴住居跡や古墳時代後期の土坑・柱穴群、横穴墓などを発見したほか、古墳時代前期のものと考えられる権現山古墳を確認することができました。これらの調査成果は、この地域の歴史を解明していく上で貴重な資料になるものと思われます。本書が地域の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高めるための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び本書の刊行にあたり御協力いただきました地元の皆様、国土交通省出雲工事事務所、出雲市教育委員会をはじめ、関係の方々に対して心からお礼申し上げます。

平成15年3月

島根県教育委員会

教育長　広沢卓嗣

例　言

1　本書は国土交通省中国地方整備局及び同出雲工事事務所の委託を受けて、島根県教育委員会が平成12・13年度に実施した斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2　本書で扱う遺跡は次のとおりである。

島根県出雲市大津町字三谷3,428－3　外　　長廻遺跡・権現山古墳

3　調査組織は次のとおりである。

(1)　調査主体　島根県教育委員会（教育長　広沢卓嗣）

(2)　事務局　島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（所長　宍道正年）

(3)　調査担当

〔平成12年度〕内田律雄（調査課第三係主幹）、萩　雅人（同文化財保護主事）、石倉康民（同教諭(兼)文化財保護主事）、岩崎裕介（同調査補助員）

〔平成13年度〕萩　雅人（調査第二課第六係長）、淺野　哲（同教諭(兼)主事）、福田市子（同調査補助員）

〔平成14年度〕萩　雅人（調査第二課第六係主幹）、福田市子（同調査補助員）

4　現地調査及び報告書の作成にあたり、下記の方々から御指導・御助言・御協力をいただいた（敬称略）。

大谷晃二（島根県立松江北高等学校教諭）、田中義昭（島根県文化財保護審議会委員）、中村唯史（三瓶自然館指導員）、村上恭通（愛媛大学法文学部助教授）、出雲市教育委員会

5　発掘作業（発掘作業員雇用、用具調達等）については、委託者・島根県教育委員会・社団法人中国建設弘済会の三者協定に基づき、島根県教育委員会から社団法人中国建設弘済会へ作業委託した。

6　挿図の北は測量法による第３座標系Ｘ軸方向を指し、平面直角座標系ＸＹ座標は日本測地系による。また、レベル高は海抜高を示す。

7　本書に掲載した図版のうち、第２図には国土交通省国土地理院発行の1/25,000図を、第３図には出雲市土木課発行の1/1,000出雲市管内図を、第４図・第５図・第８図には㈱古川コンサルタントが作成した平板地形測量図をそれぞれ使用した。

8　本書に使用した写真のうち、写真図版２は国際航業㈱が平成12年度調査区と平成13年度調査区の写真合成を行ったものを使用した。

9　本書の編集は萩が行い、各章の執筆担当は目次に記したとおりである。

10　本書に掲載した遺跡出土遺物及び実測図、写真などの資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33番地）で保管している。

凡　例

1　本書で使用した遺構記号は下記のとおりである。

SI：竪穴住居　SD：溝　SK：土坑　SX：性格不明遺構

2　土器実測図のうち、アミかけしたものは赤色顔料塗布を示す。

3　本文、挿図及び写真図版の遺物番号は一致する。

4　本書で用いた土器の分類及び編年観は基本的には下記の各論文・報告書等に依拠している。

(1)　弥生土器

弥生土器には松本岩雄氏の編年を用いたが、松本編年のV－4様式については当該期を3分する鹿島町南講武草田遺跡編年の4・5・6期を用いた。

松本岩雄「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年　－山陰・山陰編－』木耳社　1992

鹿島町教育委員会『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5　南講武草田遺跡』1992

(2)　古墳時代の土師器

古墳時代前期から中期にかけては、草田編年と松山智弘氏の編年を用いた。また、後期の土師器については供伴する須恵器の年代に拠った。

前掲　『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5　南講武草田遺跡』

松山智弘「出雲における古墳時代前半期の土器の様相　－大東式の再検討－」『島根考古学会誌』第8集　島根考古学会　1991

松山智弘「小谷式の再検討　出雲平野における新資料から　」『島根考古学会誌』第17集　島根考古学会　2000

松山智弘「土器から見た出雲における前期古墳」『第30回山陰考古学研究集会資料集』山陰考古学研究集会　2002

(3)　須恵器

須恵器編年は大谷晃二氏の編年に拠るが、8世紀以降の年代観については、柳浦俊一氏の編年、安来市荒広遺跡編年、松江市出雲国庁跡編年を参考とした。また、畿内の須恵器編年と対比するため、6世紀代までは田辺昭三氏の陶邑古窯址群の編年を、7世紀代は飛鳥・藤原地域の土器編年を参考とした。

大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集　島根考古学会　1994

大谷晃二「出雲地方の須恵器編年表Ⅰ」『第7回山陰横穴墓研究集会検討会　出雲の横穴墓　－その型式・変遷・地域性－』出雲横穴墓研究会　1997

柳浦俊一「出雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」『松江考古』第3号　松江考古学談話会　1980

島根県教育委員会『荒広遺跡発掘調査報告書　和田団地造成工事に伴う発掘調査－』1984

松江市教育委員会『出雲国庁跡発掘調査概報』1971

田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981

松村恵司「近畿地方の7世紀前半の土器」「近畿地方の7世紀後半の土器」『日本土器事典』雄山閣　1996

(4)　中世土師質土器

土師質土器は、出雲平野の当該期の遺跡である出雲市蔵小路西遺跡と出雲市古志本郷遺跡の編年を参考とした。

島根県教育委員会『蔵小路西遺跡　一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2』1999

島根県教育委員会『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ　古志本郷遺跡Ⅰ』1999

目　　次

第1章　調査に至る経緯　（萩　雅人）　1
第2章　位置と環境　（淺野　哲）　2
第3章　遺跡の概要　（萩　雅人）　7
第4章　調査の成果　（萩　雅人）　10
　第1節　Ⅰ区の調査　10
　第2節　トレンチT205～T208の調査　12
　第3節　Ⅱ区の調査　14
　第4節　Ⅲ区の調査　60
　第5節　Ⅳ区の調査　76
　第6節　権現山古墳の調査　96
第5章　小　結　（萩　雅人）　102
（遺物観察表）　114

挿図目次

第1図　調査対象位置図　1
第2図　周辺の遺跡　4
第3図　長廻遺跡・権現山古墳位置図　8
第4図　調査区配置図　9
第5図　T202柱穴実測図　10
第6図　Ⅰ区トレンチ(T201～T204)配置図　10
第7図　Ⅰ区トレンチ(T201～T204)土層図　11
第8図　トレンチT205～T208配置図　12
第9図　トレンチT205～T208土層図　13
第10図　Ⅱ区遺構配置図　15
第11図　Ⅱ区SI01～SI03周辺図　17
第12図　Ⅱ区東西土層図　18
第13図　SI01実測図　19
第14図　SI01遺物出土状況　20
第15図　SI01出土遺物実測図　20
第16図　SI02実測図　21
第17図　SI02－2実測図　22
第18図　SI02出土遺物実測図　23
第19図　SI03実測図　24
第20図　加工段1実測図　25
第21図　加工段2実測図　26
第22図　加工段1・加工段2出土遺物実測図　27
第23図　加工段3・SK11・SK13実測図　28
第24図　加工段3・SK13出土遺物実測図　29
第25図　加工段4実測図　31
第26図　加工段4出土遺物実測図　32
第27図　SD01・SD02実測図　33
第28図　SD03実測図　33
第29図　SD04実測図　33
第30図　SD05実測図　34
第31図　SD06実測図　35
第32図　SD07実測図　35
第33図　SD08実測図　36
第34図　SD09実測図　36
第35図　SD10実測図　37
第36図　SD04・05・08・09・10出土遺物実測図　38
第37図　SD11実測図　39
第38図　SD12実測図　39
第39図　SD13・SD16実測図　39
第40図　SD14・SD15実測図　40

第41図　ＳＫ01～05、07～10、12実測図 …… 42
第42図　ＳＫ06実測図　ＳＫ06出土遺物実測図 … 43
第43図　ＳＫ14～24実測図 …… 46
第44図　ＳＫ25～41実測図 …… 49
第45図　ＳＫ42～54実測図 …… 54
第46図　Ⅱ区その他のＳＫ出土遺物実測図 …… 57
第47図　ＳＸ01実測図 …… 58
第48図　ＳＸ03実測図 …… 59
第49図　Ⅲ区遺構配置図 …… 61
第50図　Ⅲ区南北土層図 …… 62
第51図　加工段5実測図 …… 64
第52図　加工段5出土遺物実測図1 …… 66
第53図　加工段5出土遺物実測図2 …… 67
第54図　ＳＤ17実測図 …… 68
第55図　ＳＤ19実測図 …… 69
第56図　ＳＤ18・ＳＤ20実測図 …… 70
第57図　ＳＤ18～20出土遺物実測図 …… 71
第58図　ＳＫ55実測図　ＳＫ55出土遺物実測図 … 72
第59図　Ⅲ区その他のＳＫ実測図 出土遺物実測図 … 73
第60図　ＳＸ02実測図　ＳＸ02出土遺物実測図 … 75
第61図　Ⅳ区遺構配置図 …… 77
第62図　Ⅳ区西側斜面土層図 …… 79
第63図　Ⅳ区東側斜面土層図 …… 80
第64図　横穴墓実測図 …… 81
第65図　横穴墓遺物出土状況 …… 82
第66図　横穴墓出土遺物実測図 …… 83
第67図　ＳＤ21実測図 …… 85
第68図　ＳＤ22・ＳＤ23実測図 …… 87
第69図　ＳＤ24実測図 …… 88
第70図　Ⅳ区ＳＤ出土遺物実測図1 …… 89
第71図　Ⅳ区ＳＤ出土遺物実測図2 …… 90
第72図　ＳＫ59実測図　ＳＫ59出土遺物実測図 91
第73図　ＳＫ60～66、焼土坑1・2実測図 …… 93
第74図　ＳＫ67実測図　ＳＫ67出土遺物実測図 … 94
第75図　Ⅳ区ＳＫ・焼土坑出土遺物実測図 …… 94
第76図　ＳＸ04実測図 …… 95
第77図　権現山古墳墳丘測量図 …… 97
第78図　権現山古墳墳丘土層図 …… 98
第79図　権現山古墳主体部実測図 …… 99
第80図　出雲平野の主要遺跡分布状況 ……103

表　目　次

第１表　周辺の遺跡一覧 …… 5
第２表　長廻遺跡出土遺物観察表（土器類） …… 114
第３表　長廻遺跡出土遺物観察表（石・土・金属製品ほか） …… 116

写真図版目次

図版１　Ⅱ区調査前風景（西より）
Ⅲ区調査前風景（北より）
Ⅳ区・権現山古墳調査前風景（北より）
図版２　長廻遺跡・権現山古墳完掘状況
図版３　１区トレンチＴ201～Ｔ204調査状況
トレンチＴ205～Ｔ208調査状況
図版４　SI02・SI03周辺完掘状況
加工段3周辺完掘状況
図版５　SI01上面ピット検出状況
SI01遺物出土状況
SI01完掘状況
図版６　SI02遺物出土状況
SI02甕形土器出土状況
SI02完掘状況
図版７　SI03完掘状況
加工段1完掘状況
加工段2完掘状況
図版８　加工段3遺物出土状況（西から）

加工段3遺物出土状況（南から）
加工段3完掘状況
図版9　加工段4完掘状況（南から）
加工段4完掘状況（西から）
図版10　SD01・SD02付近完掘状況
SD03・SD05・SK08～SK10付近完掘状況
図版11　SD03完掘状況
SD04完掘状況
SD06完掘状況（左）　遺物出土状況（右）
図版12　SD07完掘状況
SD09遺物出土状況
SD08・SD09完掘状況
図版13　SD08～SD10付近完掘状況
SD11・SD13～SD16付近完掘状況
図版14　SK06遺物出土状況（左）　完掘状況（右）
SK12遺物出土状況
SK13遺物出土状況
図版15　SX01・SX03周辺完掘状況
SX01完掘状況
SX03石列検出状況
図版16　Ⅲ区完掘状況（東から）
加工段5検出状況（西から）
加工段5完掘状況（西から）
図版17　SD17完掘状況
SD19遺物出土状況
SD19完掘状況
図版18　SD18・SD20検出状況
SD18・SD20完掘状況
SD18・SD20土層堆積状況
図版19　SK55遺物出土状況
SK56遺物出土状況
SX02完掘状況
図版20　Ⅳ区SD23周辺完掘状況
Ⅳ区横穴墓・権現山古墳周辺完掘状況
図版21　横穴墓検出状況
横穴墓玄門入口遺物出土状況
横穴墓玄門入口土層堆積状況
図版22　横穴墓玄室内部状況
横穴墓玄室内遺物出土状況
横穴墓完掘状況
図版23　SD22完掘状況
SD23完掘状況
図版24　SK59遺物出土状況
SK67遺物出土状況
図版25　権現山古墳調査前全景（南西から）
権現山古墳調査前全景（北から）
図版26　墳頂部土層堆積状況
主体部北端標石検出状況
図版27　墳丘完掘状況（西から）
墳丘完掘状況（北から）
図版28　主体部完掘状況（北から）
主体部完掘状況（南東から）
図版29　SI01・SI02出土遺物
図版30　SI02出土遺物
図版31　加工段1・加工段2・加工段3出土遺物
図版32　加工段3・加工段4出土遺物
図版33　加工段4出土遺物
図版34　SD05・SD09・SD10出土遺物
図版35　SK06・Ⅱ区その他のSK出土遺物
図版36　Ⅱ区その他のSK出土遺物
図版37　加工段5出土遺物
図版38　加工段5出土遺物
図版39　SD18・SD19・SD20出土遺物
図版40　SD20・SK55出土遺物
図版41　SK55・SK56出土遺物
図版42　横穴墓出土遺物
図版43　SD22・SD23出土遺物
図版44　SD22・SD23・SK59出土遺物
図版45　SK67・Ⅳ区その他のSK・焼土坑出土遺物

第1章　調査に至る経緯

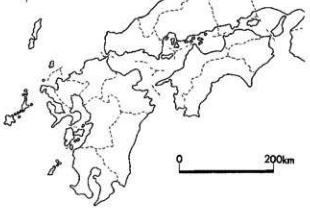
斐伊川は、かつて出雲平野を西流し神門水海（現在の神西湖はその名残）を通じて大社湾へと注いでいたが、江戸時代の2度の洪水によって流れを東へ変え、宍道湖へと注ぐようになった。この東流以後、松江をはじめ宍道湖沿岸は度々洪水に悩まされるようになり、とりわけ昭和47年の豪雨では斐伊川・神戸川の両河川が破堤寸前に陥り、また、宍道湖の増水により宍道湖沿岸約70haが1週間にわたり浸水するという被害を被った。このため、斐伊川・神戸川の抜本的な治水対策として、上流では志津見ダム・尾原ダムの建設、中流では斐伊川放水路建設と河川改修、下流域では大橋川改修と湖岸堤整備をするなど、流域が一帯となって取り組む「3点セット」と呼ばれる治水計画が策定された。

このうちの斐伊川放水路建設事業は、斐伊川の計画高水流量の一部を中流左岸の出雲市大津町来原付近から新たに放水路を開削して分流し、出雲市上塩冶町半分付近で神戸川に合流させるもので、これに伴い神戸川下流域でも、神戸川の自己流量と斐伊川からの分流量をあわせた計画水流量に対応するため、川幅を拡幅する掘削・築堤工事を実施するものである。その規模は、全長13.1km（開削部4.1km、拡幅部9.0km）にも及ぶ。

この計画は、斐伊川流水の一部を早く、しかも安全に日本海へと流すことを目的としており、島根県が昭和44年に「斐伊川・神戸川の治水及び関係地域の開発に関する基本構想」を発表した後、同50年に「斐伊川・神戸川の治水に関する基本計画」を策定し、翌51年に建設省が「斐伊川水系工事実施基本計画」を告示して、県は工事計画の認可を得た。ルートは同54年に最終決定された。

こうした事業計画の推移・決定のなか、島根県教育委員会は昭和50年度に島根県企画部からの依頼を受けて分流地域の遺跡分布調査を実施し、昭和51年3月に『斐伊川放水路建設予定地域埋蔵文化財分布調査報告』をまとめた。また、昭和53・54年度には、建設省出雲工事事務所から委託を受けて、上塩冶町を中心とする出雲市全域と簸川郡大社町の遺跡を対象に、一部発掘調査を含めた分布調査を実施し、昭和55年3月に『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』を刊行した。

その後、事業予定地内の用地買収が進む一方で、平成元年度から建設省出雲工事事務所、島根県斐伊川神戸川対策課及び島根県教育庁文化課の三者で遺跡調査にかかる協議が進められ、平成3年1月に文化課が事業予定地内の遺跡分布調査を再度実施した。この調査結果を受けて、同年3月に建設省出雲工事事務所と文化課の間で協議文書が交わされ、事前に事業予定地内にある埋蔵文化財の発掘調査を行うことを決定した。発掘調査は平成3年度から実施され、平成8年からは出雲市教育委員会も調査を担当することとなった。発掘調査では数多くの遺跡や遺物を発見し、地域の歴史を解明していく上で貴重な資料を提供することができた。なお、平成13年度をもって全ての現地調査を終了した。



第1図　調査対象位置図（S＝1/8,000,000）

第2章　位置と環境

長廻遺跡及び権現山古墳は島根県出雲市大津町に所在し、出雲平野の南側丘陵に位置する。遺跡のすぐ東には「素戔嗚尊の八岐大蛇退治神話」で有名な斐伊川が北に向かって流れており、遺跡の北500mにはJR山陰本線が東西に通っている。

出雲市を中心とする出雲西部地域は、東は宍道湖、西は大社湾、そして北と南は緩やかな山塊に囲まれながら、その中央に沖積平野である出雲平野が位置している。もっとも出雲平野が現在のような地形に定着したのは、それまで西進して大社湾に注いでいた斐伊川が宍道湖に東流するようになった江戸時代以降のことであり、出雲平野一帯をめぐる長い歴史の中にあってはかなり新しい段階のことといえる。

また、斐伊川・神戸川の2大河川の堆積作用によって形成された平野の微高地形の存在も、人々の居住空間の推移と深く関係しており、地理的な環境要因の一つとしても見逃せないものがある。以下、出雲平野中央部及び周辺部の遺跡を概観しておく。

縄文時代

縄文時代早期末～前期、いわゆる「縄文海進」で平野部のほとんどが海域となったため[1]、この時期の遺跡は出雲平野の縁辺部に存在する。平野の西北には、繊維土器が出土した前期の菱根遺跡（64）が、西には同じく繊維土器が出土した上長浜貝塚（99）、東には中期の土器を出土した上ケ谷遺跡（40）が存在する。

後期～晩期になると、海退がすすみ[2]、北縁には原山遺跡（66）や出雲大社境内遺跡（70）、南縁には土偶や丸木舟、堅果の貯蔵穴が見つかった三田谷Ⅰ遺跡（9）や三田谷Ⅲ遺跡（26）、後谷遺跡（43）、さらに平野中央部に矢野遺跡（75）や姫原西遺跡（76）、蔵小路西遺跡（77）がでてくるなど、平野中心部への居住もみられるようになった。

弥生時代

前期の遺跡は縄文晩期から引き続くものが多く、上記の三田谷Ⅰ遺跡、矢野遺跡、後谷遺跡などから少量の遺物が見つかっている。同じく縄文晩期から続く原山遺跡では、配石墓や北部九州系の弥生土器が見つかっている。

中期になると、神戸川の河口に近い自然堤防上に、古志本郷遺跡（13）、天神遺跡（85）、四絡遺跡群[3]など、環濠と思われる大溝をもつ大規模集落が形成される。この時代、他地域との盛んな交流が図られたのか、白枝荒神遺跡（80）、下古志遺跡（105）、四絡遺跡群の矢野遺跡などでは吉備系の土器が出土している。また、大社町命主神社や斐川町荒神谷遺跡からは、銅戈や銅剣、銅矛、銅鐸などの青銅器が発見されている。

後期には山持川川岸遺跡（59）、石土手遺跡（82）、斐伊川鉄橋遺跡（81）など多くの遺跡が発見され、平野部の開発がかなり進んだものと考えられる。同じ頃、斐伊川を望む丘陵上に四隅突出型墳丘墓を中心とした西谷墳墓群（33）も登場する[4]。

また、三田谷Ⅰ遺跡では県内唯一の事例である後期中頃の方形周溝墓が、中野美保遺跡（72）では後期後葉の四隅突出型墳丘墓が確認されている。

古墳時代

古墳時代になると、斐伊川水系の山持川川岸遺跡、石土手遺跡、斐伊川鉄橋遺跡などは継続するが、天神遺跡、古志本郷遺跡等の神戸川水系の遺跡は衰退する。また、四隅突出型墳丘墓を有する西谷墳墓群に続く王墓は突然築造されなくなり、出雲平野に最古級の古墳と認められるものは現在のところ存在しない。

出雲平野の前期古墳としては、全長約52mの前方後円墳である大寺古墳（53）や、径24mの円墳で筒型銅器や鏡が出土した山地古墳（115）、方形周溝墓の可能性を残す三田谷１遺跡２号墓[9]がこれまでに知られており、今回の調査により権現山古墳（1）もこれに加わるものと思われる。

中期になると北光寺古墳や長持形石棺を有する軍原古墳、舟形石棺を有する神庭岩舟古墳等の前方後円墳が築造され、これらの大型古墳に加え平野の縁辺部に小規模古墳からなる古墳群が散見される。

後期になると、北山南麓に上島古墳が築造された後、大型古墳は神戸川流域の丘陵地帯に限られるようになる。神戸川右岸には、横穴式石室を内部主体とする全長92mの前方後円墳の今市大念寺古墳（83）や上塩冶築山古墳（94）、地蔵山古墳（95）が造営される。

一方、７世紀になると古墳の分布に重なり合うように横穴墓が台頭するようになり、神戸川左岸に地蔵堂横穴墓群（110）や神門横穴墓群（116）、右岸に上塩冶横穴墓群（31）などの大規模な横穴墓群が形成される。また、斐伊川流域でも、左岸に長廻横穴墓群（2）や権現山横穴墓群（32）が、右岸に剣先横穴墓群（50）や海の平横穴墓群（51）、岩海横穴墓群（52）などが形成されるようになる。

奈良・平安時代

出雲平野に古代の行政区画をあてはめると、神門郡と出雲郡の一部になる。当時の官衙関連の遺跡としては、腰帯金具・円面硯・墨書土器が出土した古志本郷遺跡や、木簡・緑釉陶器・墨書土器が出土した三田谷Ⅰ遺跡、緑釉陶器・墨書土器が出土した天神遺跡、礎石建物跡が検出された後谷遺跡などがある。なかでも古志本郷遺跡では規格的に配置された大規模な掘立柱建物跡が発見され、神門郡家の政庁の一部と考えられる[10]。また、古代寺院としては神門寺境内廃寺（87）や長者原廃寺（93）が知られる。

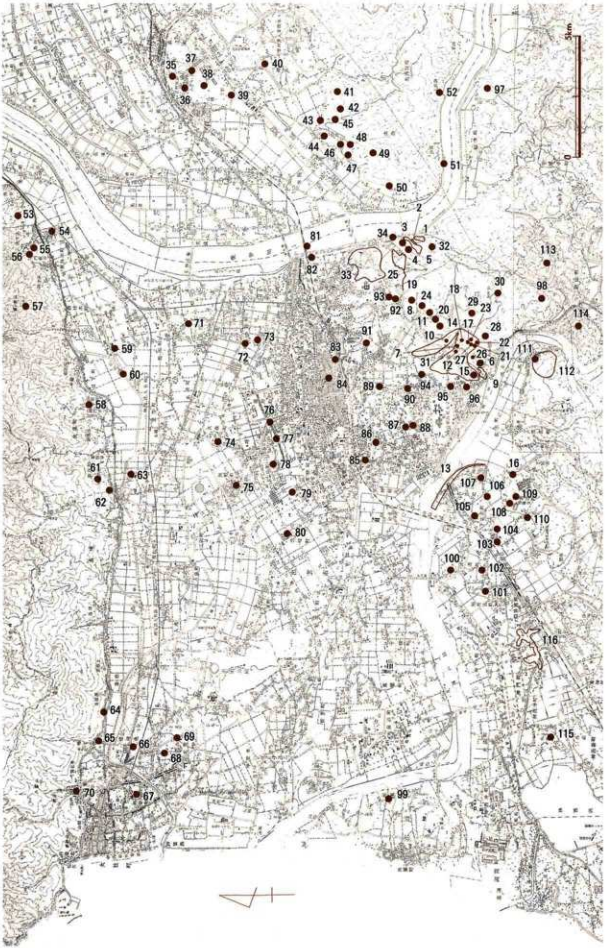
その他、初期火葬に関するものとして小坂古墳（111）、浅山古墓、光明寺３号墓（28）、菅沢古墓（92）などの石櫃があり、出雲地方に火葬の風習が伝わっていたことを示している。

中・近世

出雲一宮の出雲大社とその別当寺である鰐淵寺の存在や、出雲守護職の佐々木氏が出雲地方東部から出雲平野の中央部の塩冶郷に守護所を移すなど、鎌倉時代後半の一時期、政治の中心地となる。この時代の遺跡としては、平安時代末から室町時代にかけての掘立柱建物跡を検出した青木遺跡（54）や鎌倉時代の掘立柱建物跡が見つかった渡橋沖遺跡（79）、居館跡と推定される蔵小路西遺跡[11]などがある。

戦国時代には尼子氏と毛利氏の争いなどもあり、鳶ケ巣城跡（57）や唐墨城跡（113）、大井谷城跡（10）、権現山城跡（15）など数多くの山城が平野を見下ろす丘陵地に点在する。

近世になると、松江藩が財政基盤の拡大を図って農業開発に力を入れ、治水・灌漑事業や新田開発を盛んに行った。中でも高瀬川、差海川、十間川の普請が広く知られている。



第２図　周辺の遺跡（S＝1/62,500）

第１表　周辺の遺跡一覧

地図番号	遺　跡　名	地図番号	遺　跡　名	地図番号	遺　跡　名
1	長廻遺跡・権現山古墳	41	外ケ市古墳	81	斐伊川鉄橋遺跡
2	長廻横穴墓群	42	長者原古墳群	82	石土手遺跡
3	三谷遺跡	43	後谷遺跡	83	今市大念寺古墳
4	藤廻遺跡	44	沢田横穴墓群	84	塚山古墳
5	灘谷山城跡	45	後谷丘陵古墳群	85	天神遺跡
6	三田谷Ⅱ遺跡	46	八幡宮横横穴墓群	86	高西遺跡
7	大井谷石切場跡	47	出西小丸１号墳	87	神門寺境内廃寺
8	上沢Ⅰ遺跡	48	出西小丸２号墳（正楽寺山古墳）	88	神門寺付近遺跡
9	三田谷Ⅰ遺跡	49	山ノ奥横穴墓	89	角田遺跡
10	大井谷城跡	50	剣先横穴墓群	90	宮松遺跡
11	上沢Ⅱ遺跡	51	海の平横穴墓群	91	下沢遺跡
12	白石谷遺跡	52	岩海横穴墓群	92	菅沢古墓
13	古志本郷遺跡	53	大寺古墳群	93	長者原廃寺
14	狐廻谷古墳	54	青木遺跡	94	上塩冶築山古墳
15	権現山城跡・権現山石切場	55	膳棚山古墳群	95	地蔵山古墳
16	放れ山遺跡	56	平林寺山古墳群	96	半分古墳
17	谷Ⅰ区	57	寨ケ巣城跡	97	菅原横穴墓群
18	谷２区	58	矢尾横穴墓群	98	大坊古墓
19	只谷間府	59	山持川川岸遺跡	99	上長浜貝塚
20	蟹谷遺跡	60	里方別所遺跡	100	極楽寺付近遺跡
21	三田谷三号墓	61	大前古墳	101	知井宮多聞院遺跡
22	石切場跡１	62	石臼古墳	102	東原遺跡
23	石切場跡２	63	里方八石原遺跡	103	天神原古墳
24	上沢Ⅲ遺跡	64	菱根遺跡	104	宝塚古墳
25	止屋淵	65	修理免本郷遺跡	105	下古志遺跡
26	三田谷Ⅲ遺跡	66	原山遺跡	106	田畑遺跡
27	大井谷Ⅲ遺跡	67	鹿蔵山遺跡	107	大梶古墳
28	光明寺古墳群	68	南腹貝塚	108	妙蓮寺古墳
29	大井谷Ⅰ遺跡	69	中分貝塚	109	浄土山城跡
30	大井谷Ⅱ遺跡	70	出雲大社境内遺跡	110	地蔵堂横穴墓群
31	上塩冶横穴墓群	71	荻杼古墓	111	小坂古墳
32	権現山横穴墓群	72	中野美保遺跡	112	刈山古墳
33	西谷墳墓群	73	太歳遺跡	113	唐墨城跡
34	来原岩棺	74	大塚遺跡	114	舳山城跡
35	岩野原古墳群	75	矢野遺跡	115	山地古墳
36	岩野原横穴墓群	76	姫原西遺跡	116	神門横穴墓群
37	平野横穴墓群	77	蔵小路西遺跡		
38	コモゴ山横穴墓群	78	小山遺跡		
39	亀穴横穴群	79	渡橋神遺跡		
40	上ケ谷遺跡	80	白枝荒神遺跡		

1～31は放水路予定地内の遺跡

第2章　註

（1）中村唯史ほか　「島根県東部の完新世環境変遷と低湿地遺跡」『ＬＡＧＵＮＡ．No.３』 1996

（2）前掲　註(1)と同じ

（3）矢野遺跡を中心に隣接する小山遺跡、大塚遺跡、姫原西遺跡、蔵小路西遺跡を総称して四路遺跡群と呼ぶ

（4）出雲市教育委員会　『西谷墳墓群　－平成10年度発掘調査報告書一』 2000

（5）島根県教育委員会　『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ』 1999

（6）島根県教育委員会　『斐伊川放水路発掘物語　ＰＡＲＴ５』 1999

（7）島根県教育委員会　『一般国道９号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書２』 1999

参考文献

島根県教育委員会　『島根県遺跡地図Ⅰ（出雲・隠岐編）』 1993

島根県教育委員会　『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』 1997

島根県教育委員会　『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』 1998

島根県教育委員会　『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ』 2001

島根県教育委員会　『一般国道９号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書１』 1999

島根県教育委員会　『一般国道９号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書３』 1999

出雲市教育委員会　『出雲市遺跡地図』 1993

出雲市教育委員会　『遺跡が語る古代の出雲』 1997

出雲市教育委員会　『上長浜貝塚』 1996

出雲市教育委員会　『山持川川岸遺跡』 1996

斐川町教育委員会　『後谷Ｖ遺跡』 1996

大社町　『大社町史　上巻』 1991

大社町　『大社町史　下巻』 1995

第３章　遺跡の概要

長廻遺跡・権現山古墳は、出雲市大津町字三谷・字長廻に所在し、標高約30m～70mの丘陵斜面及び尾根上に立地する遺跡である。谷を隔てた西側の丘陵には、長廻横穴墓群や瀧谷山城跡などが存在し、長廻遺跡のある丘陵の南側山頂付近には３支群からなる権現山横穴墓群が知られている。

調査前の地形は、尾根西側斜面の一部が階段状に削平されており、ここで畑が営まれていたことがわかる。また、尾根東側の北向き緩斜面も段状に加工され、段の法面には簡素な石垣が組まれていた箇所もあったことから、人為的な造成が行われていたようである。このほか、西側斜面の所々に近世～現代まで使われていた墓跡が認められた。

長廻遺跡については、昭和53・54年度に実施した埋蔵文化財調査により土師器や須恵器の散布が確認され、古墳時代後半の集落跡と推定された。また、権現山古墳は直径17m、高さ約２mの円墳で、墳丘上に葺石と思われる礫が散在すると報告されている[1]。

平成11年度には、長廻遺跡の範囲を調べるためのトレンチ調査が行われ、尾根の東側まで遺跡が広がることが確認された。また、トレンチ調査と併行しながら、西側斜面の一部分と谷部の大岩周辺の全面調査が実施され、斜面では弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての竪穴住居跡や弥生時代中期末～後期初頭及び古墳時代後期の加工段などが、谷部では近世の土師質土器や大岩をめぐる石組み・木組み・杭列などが検出された[2]。

今回の調査対象地は、平成11年度のトレンチ調査の成果を受けて設定した調査区で、平成12年度と平成13年度の２か年をかけて順次全面調査を実施した。

平成12年度は、４月17日～12月22日にかけて、尾根東側の郭状の平坦面（Ⅰ区）と平成11年度調査区に隣接する西側斜面部分（Ⅱ区）、尾根東側の北向き緩斜面（Ⅲ区）の計7,900㎡を調査した。

Ⅰ区ではT201～T204の４個所でトレンチ調査を行ったが、顕著な遺構、遺物は認められなかったため、全面調査は行わなかった。Ⅱ区では、弥生時代終末～古墳時代前期初頃にかけての竪穴住居跡や弥生時代後期と古墳時代後期頃の加工段、古墳時代後期の掘立柱建物跡と思われる土坑や柱穴群、溝状遺構など多数の遺構を検出した。Ⅲ区では、古墳時代後期初頭頃の古墳跡と考えられる加工段や古墳時代中期と奈良時代の溝状遺構などを確認することができた。この他、一部の東側急斜面で遺構確認のためのトレンチ調査（T205～T208）を実施したが、遺構等が認められなかったことから、全面調査の対象外とした。

平成13年度は、５月９日～12月14日までの期間で、平成12年度調査区の南側にあたる尾根西側及び東側部分（Ⅳ区）と尾根上に位置する権現山古墳の計5,800㎡を調査した。

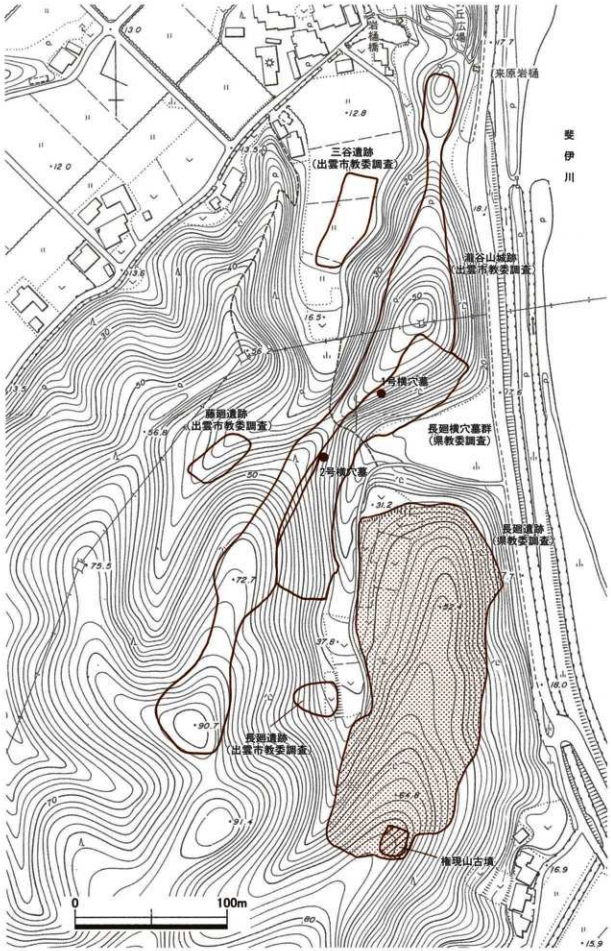
Ⅳ区尾根東側の北向き緩斜面では、弥生時代中期後半頃の自然流路と思われる溝跡や弥生時代後半～古墳時代前期末頃の土器が出土する土坑、柱穴などを検出した。また、Ⅳ区尾根西側の急斜面からは、古墳時代後半の横穴墓１基を検出した。横穴墓では、玄門入口付近と玄室内から須恵器や石製紡錘車、耳環が出土した。尾根上の権現山古墳の裾部に近い所からは、古墳時代中期頃の土師器の壺を埋めた土壙墓を検出した。

尾根上に位置する権現山古墳は、東西17m、南北19m、高さ２m～３mを測る方墳であることが判明した。墳丘上に葺き石は認められなかった。墳頂部からは標石と思われる長さ60cmばかりの石２個と東西2.4m、南北4.6mを測る１段墓壙を検出したが、出土遺物は表土から須恵器の甕片を１片採集したのみであった。

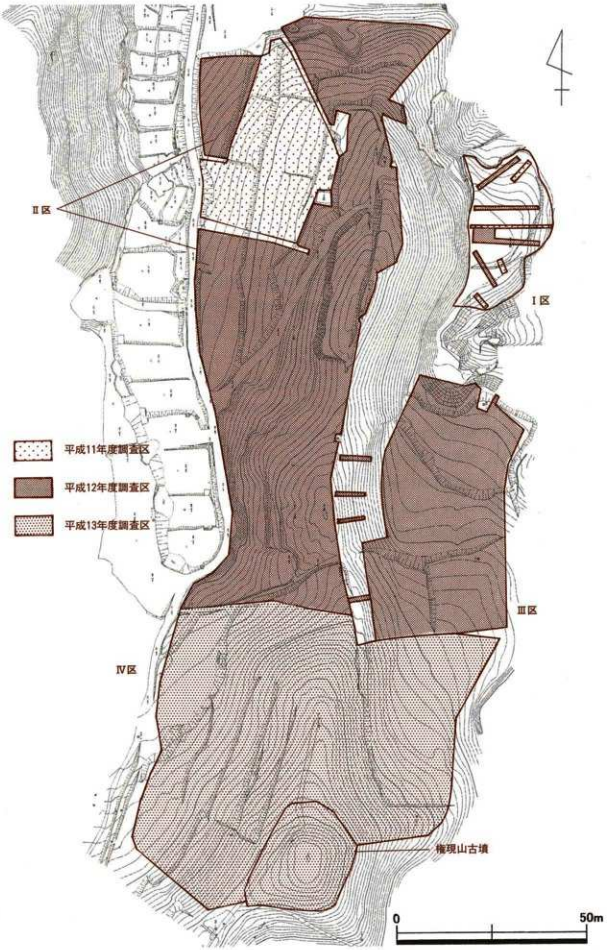
第３章　註

（１）島根県教育委員会　「元権現山横穴群」『出雲・上塩冶を中心とする埋蔵文化財調査報告書』 1980

（２）島根県教育委員会　「長廻遺跡の調査」『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ』 2001



第3図　長廻遺跡・権現山古墳位置図（S＝1/2500）



第4図　調査区配置図（S＝1/1000）

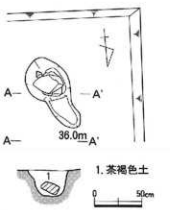
第４章　調査の成果

第１節　Ⅰ区の調査

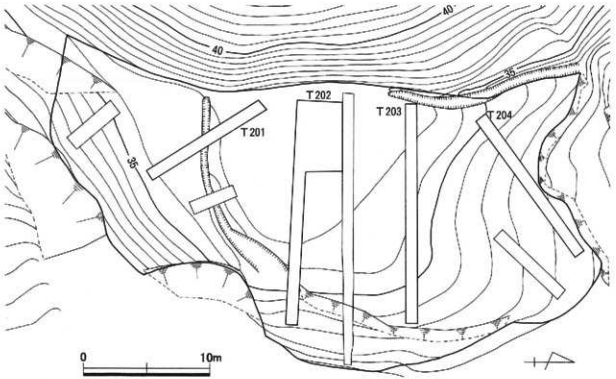
Ⅰ区は尾根東側の標高35mのところに位置し、東西7.5m、南北15mほどの東側へ緩やかに傾く平坦面であり、周りが崖状に落ち込んでいることから、郭状を呈している。平成11年度に４か所のトレンチ調査を行い、遺構、遺物は認められなかったが、平坦面に遺構が存在する可能性も残っていたため、さらに４か所（T201～T204）のトレンチ調査を実施した。各トレンチの配置及び土層堆積状況は第６図・第７図のとおりである。トレンチからは全部でコンテナ１箱分の遺物が出土したが、いずれも細片であったため、実測や写真による掲載は行わなかった。

T201は、地山が東方向へ行くにしたがって落ち込んでおり、谷側では１m程の自然堆積した土層があり、その上には地面を均すように第２層の黄茶褐色土が約20cmの厚みで堆積していた。遺構は、トレンチの中央部で自然排水路と思われる落ち込みを検出した以外は確認できなかった。遺物は、第２層の黄茶褐色土から近世以降の陶磁器片が出土している。

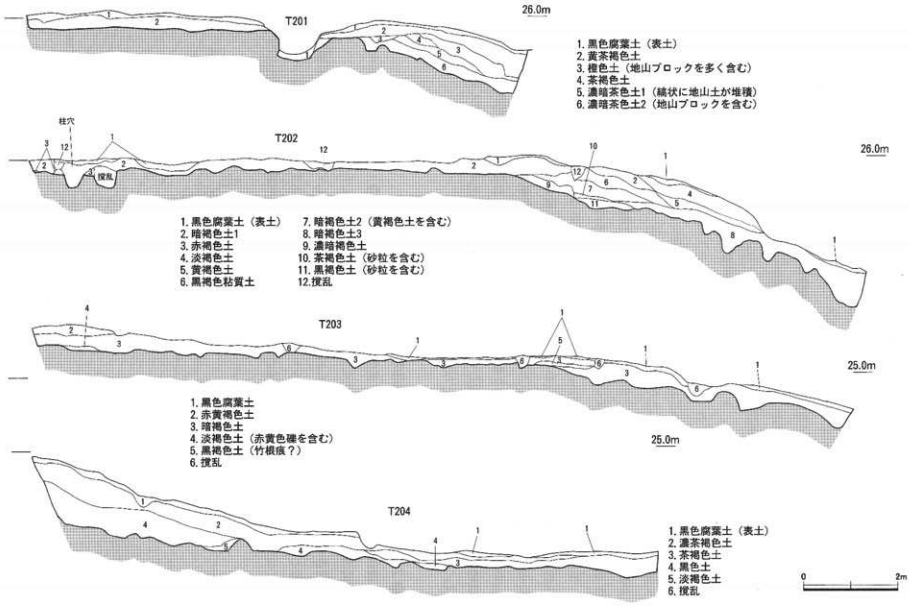
T202もT201と同様に東側へ行くにしたがって地山が落ち込んでおり、谷側では１m近い自然堆積土層が認められた。ここでも、地面を均すように第２層の暗褐色土１が20cm～30cmの厚みで堆積していた。トレンチ西端では、第２層上面から柱穴が掘り込まれているのを確認した。この柱穴は、南北方向が２段になった東西40cm、南北80cm、深さ30cmを測る不整形を呈し、長さ30cmほどの平石が置かれていた。掘立柱建物跡に伴う可能性もあったため、トレンチの一部を北側へと拡



第５図　T202柱穴実測図
（S＝1/40）



第６図　Ⅰ区トレンチ（T201～T204）配置図（S＝1/300）



第7図　I区トレンチ（T201～T204）土層図（S＝1/80）

張したが、対応する柱穴等は認められなかった。柱穴から遺物は出土しなかったが、第2層暗褐色土1から近世以降の陶磁器類の破片が見つかった。

T203は、地山面が比較的緩やかな勾配を呈しており、東端でも30cm程度しか堆積土層は認められなかった。第3層暗褐色土は10cm～30cmの厚みでトレンチ全体に堆積しており、近世以降の陶磁器片と瓦片が数点出土している。いずれの層でも遺構は認められなかった。

I区の北端に設定したT204では、トレンチの西端から弥生土器や古式土師器を含む遺物包含層と考えられる第4層黒色土が約60cmの厚さで堆積していた。黒色土は、トレンチの東へ行くにしたがって徐々に厚みが薄くなり、トレンチの中程過ぎで消滅する。この土層は、他のトレンチや平成11年度のトレンチでも確認されていないことから、I区の北向き斜面を中心に堆積している層と考えられたが、北側に崖がせまっていたため、トレンチを拡張することができなかった。遺物は、先に記したように第4層黒色土から弥生土器や古式土師器が出土したが、いずれも細片でかなり風化が進んでいた。また、他のトレンチと同じように、黒色土の上層には、近世以降の陶磁器片が出土する第2層赤黄褐色土が堆積していた。いずれの層からも遺構は検出できなかった。

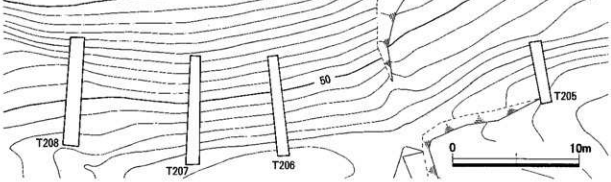
T201～T203の上層堆積状況から、場所により上色の違いはあるものの、I区のほぼ全面に地面を均すことを目的とした盛り土が行われたと考えられ、これらの層から陶磁器などが出土することから、近世以降に宅地造成等を行うために整地が行われたものと推察されるが、遺構と考えられるものはT202で検出した柱穴1のみであった。また、T204で確認した弥生～古墳時代前期初頭頃の遺物を包含する第4層黒色土は、周辺にあった遺構から遺物が流れ込んだものと考えられるが、I区においてその痕跡を確認することはできなかった。

第2節　トレンチT205～T208の調査

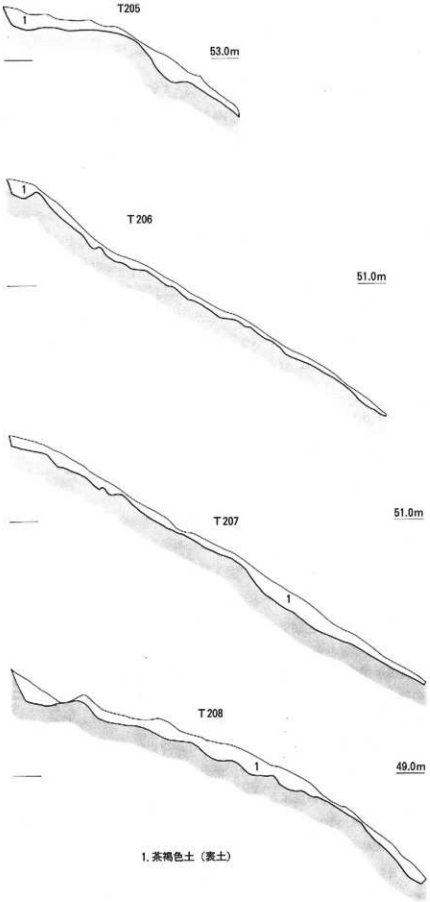
調査対象地のうち、勾配がきつく遺構が存在する可能性の低いと考えられたII区とIII区の間の尾根東側斜面に、トレンチT205～T208を設定し、遺構の有無を確認した。

調査の結果、いずれのトレンチにも10cm～30cmほどの表土が堆積しており、その下層は凝灰岩質砂岩と思われる脆い地山であった。各トレンチでは遺構・遺物を検出することはできなかった。

このため、トレンチを配置した区域には遺構が存在しないものと判断し、調査対象地からはずす



第8図　T205～T208配置図（S＝1/300）



第９図　トレンチＴ205～Ｔ208土層図（Ｓ＝1/80）

こととした。

第3節　Ⅱ区の調査

Ⅱ区は北方向に延びた舌状の丘陵の尾根西側斜面を中心とする調査区で、標高約30m～50mのところに位置する。尾根に近い部分はかなり急な斜面であるが、標高約30m～40mの調査区北側から中央部にかけては緩斜面となっている。平成11年度のトレンチ調査では、この緩斜面を中心に弥生土器や須恵器などが出土している。

また、調査区北側の一部（約750㎡）は、平成11年度にトレンチ調査と併行して全面調査が行われ、弥生時代後期初頭の竪穴住居跡1棟、同終末期～古墳時代前期初頭にかけての竪穴住居跡2棟、弥生時代中期末～後期初頭の加工段3か所、古墳時代後期の加工段1か所などの遺構が検出されている[3]。

今回の調査でも、平成11年度調査区の南側に隣接する緩斜面を中心に多くの遺構を検出した（第10図・11図）。その内容は、弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭頃の竪穴住居跡3棟、弥生時代中期後半の加工段1か所、古墳時代後期の加工段3か所、弥生時代後期後半～古墳時代後期までの溝状遺構16、古墳時代後期を中心とする土坑（墳）54、性格不明遺構2などであった。この他、中央部緩斜面から、80以上の掘立柱建物跡に伴うと考えられる柱穴群を検出したが、明確な柱並びは確認できなかった。

調査区の3か所に土層観察用の畦を設定した（第12図）。堆積土層から、Ⅱ区中央部の尾根寄りを中心に、段々畑として造成により、山側の地山を削り、谷側に盛り土を行っていることがわかった。また、調査区中央部の西端は山と谷の端境部分にあたり、地山が凝灰岩質砂岩から粘質土へと変化する場所で、湧き水にかなり悩まされた地点である。

調査区全体にわたって、地山の上面には自然堆積土層が認められ、弥生時代～近・現代までの遺物を少量含んでいたが、遺物は細片で風化が激しいため図化・写真掲載は行わなかった。

以下、Ⅱ区から検出した遺構、遺物について報告する。

(1) 竪穴住居跡

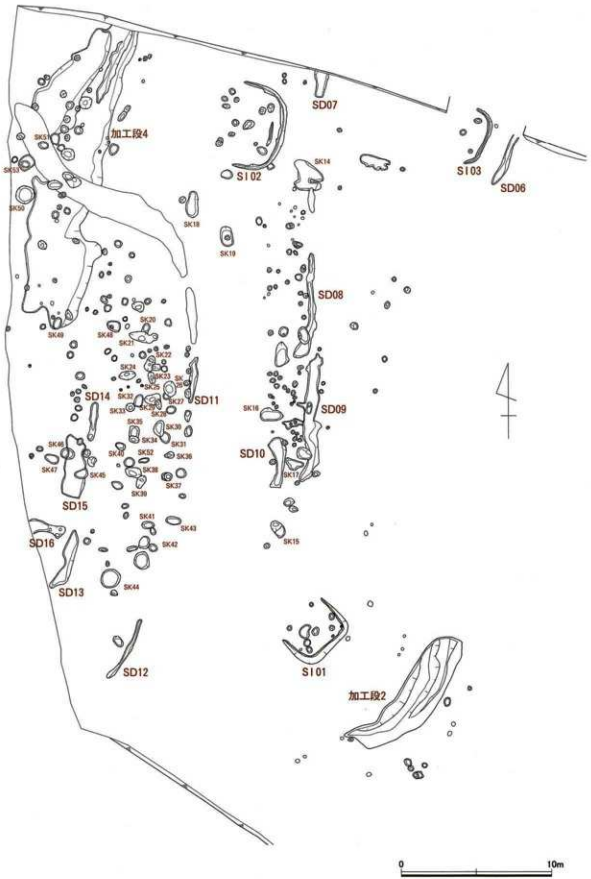
S I 01（第13・14図）

規模・形態　調査区中央部、標高42m～43m程の北西向き斜面で検出した。平面形は隅丸方形を呈し、住居跡の規模は、残存長で東西3.0m、南北4.0m、深さ70cmを測る。斜面下方側の約1/4程度が流失している。

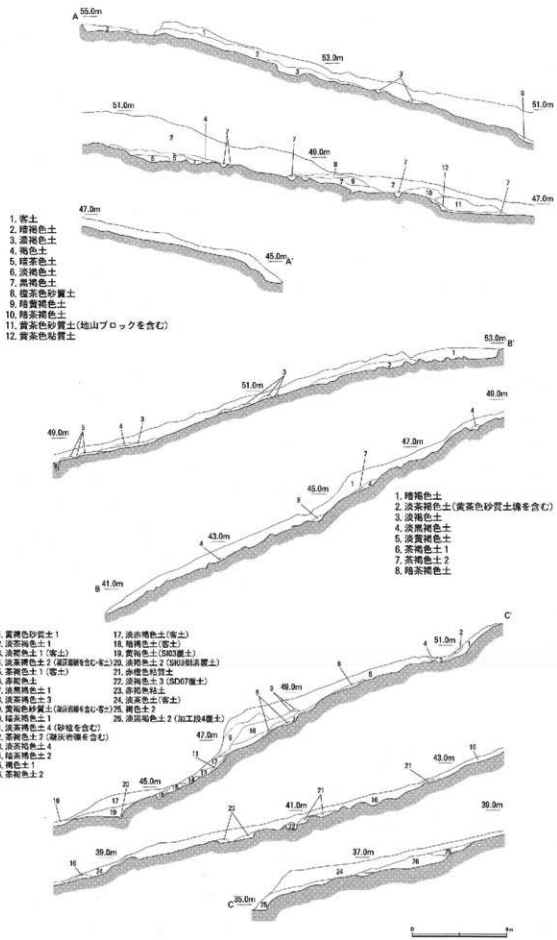
柱穴・壁体溝　竪穴住居跡の覆土には、P 1・P 2が穿たれていた。2穴とも径50cm～60cm、深さ30cm程度で、黒色系の覆土が堆積していた。付近でP 1・P 2に対応する柱穴を探したが、検出することはできなかった。谷側斜面にあった場合には、既に流出してしまった可能性も考えられる。

住居跡の床面には6cm～10cmの厚さで貼床が施されており、柱穴は全て貼床面から穿たれていた。検出した柱穴は9穴を数え、このうちのP 3～P 6が主柱穴で、4本柱構造の建物であったとみられる。P 5・P 6は床面が流出し、柱穴のみが残っていた。柱穴の規模はP 3・P 4が径約40cm、深さ30cm程度、P 5・P 6が径約30cm、深さ20cm程度である。柱間距離は2m～2.2mを測る。P 7はいわゆる中央ピットであり、すぐ西側の床面には、幅0.8m～0.9m、深さ5cm～10cmの範囲で炭化物を含む焼土が認められ、火処であったものと思われる。その他の柱穴は覆土から焼土や炭化

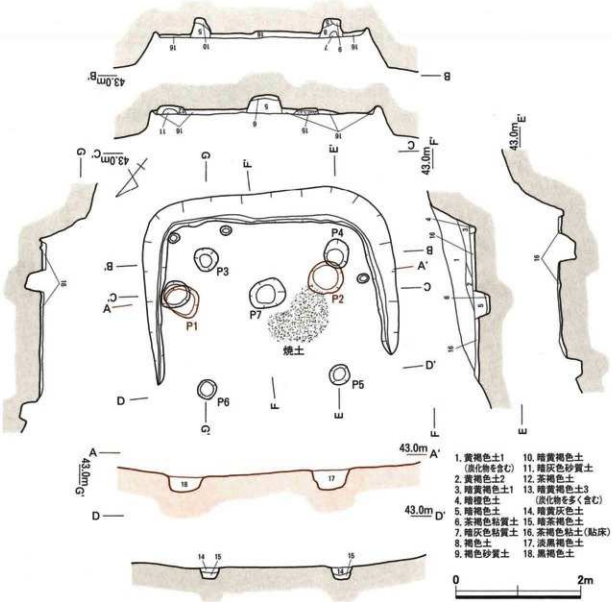
第10図　Ⅱ区遺構配置図（S＝1/400）



第11図　Ⅱ区ＳＩ01～ＳＩ03周辺図（Ｓ＝1/250）



第12図　Ⅱ区東西土層図（S＝1/160）



第13図　ＳＩ01実測図（Ｓ＝1/60）

物などは一切確認されておらず、用途は不明である。また、３方の壁際で幅0.2m～0.25m、深さ10cm、断面Ｕ字形の壁体溝を確認した。

覆土　住居跡の覆土は、床面に暗褐色土２と暗黄褐色土１、その上に炭化物を含む黄褐色土１が堆積しており、斜面上方から流れ込んだものと考えられる。

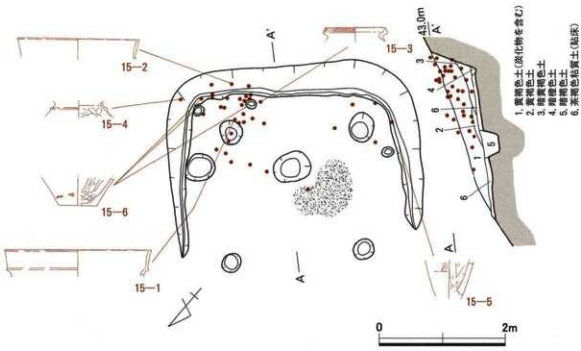
遺物出土状況　Ｐ１・Ｐ２からは、細片のため図化していないが、古式土師器と思われる土器が出土した。住居跡に伴う遺物は、覆土の上面から床面直上まで出土し、弥生土器と土師器が混在していた。斜面上方に近い南壁付近を中心に分布しており、前述のとおり流れ込みに伴うものが多いと考えられる。床面付近の遺物で図化できたものはないが、甕の肩部にハケ状工具による波状文を施したものがみられた。また、貼床の下面からも細片が１片出土したが図化できなかった。

ＳＩ01出土遺物（第15図）

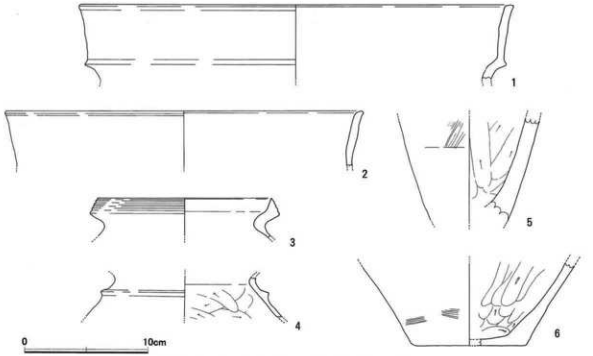
出土遺物は細かい破片が多く、表面の風化も進んでいたため、図化できたものは覆土中から出土した６点のみであった。１は土師器の甕、２は同じく甕か壺の口縁部である。推定口径が30cm前後

の大型品であり、器壁がやや厚く、端部を外方に軽く引き出している。3は弥生土器の甕で、口縁部が内傾気味に短く立ち上がり、外面に4条の凹線文を施す。4は土師器の鼓形器台脚部で、内面に横方向のヘラ削りが施されている。5、6は弥生土器の底部資料で、5は細身で直線的に外傾する。6は径が9㎝を測るやや大型の平底である。両者ともに内面にヘラ削り調整が確認できる。

年代　図化した遺物の年代をみると、第15図1、2は松山編年小谷1式（草田編年6期新段階相当）～小谷2式（草田編年7期相当）に相当するものと思われる[2]。また、第15図4の鼓形器台は小谷3式までみられる器種であるが[3]、他の土器が小谷2式（草田編年7期相当）を降らないことから、



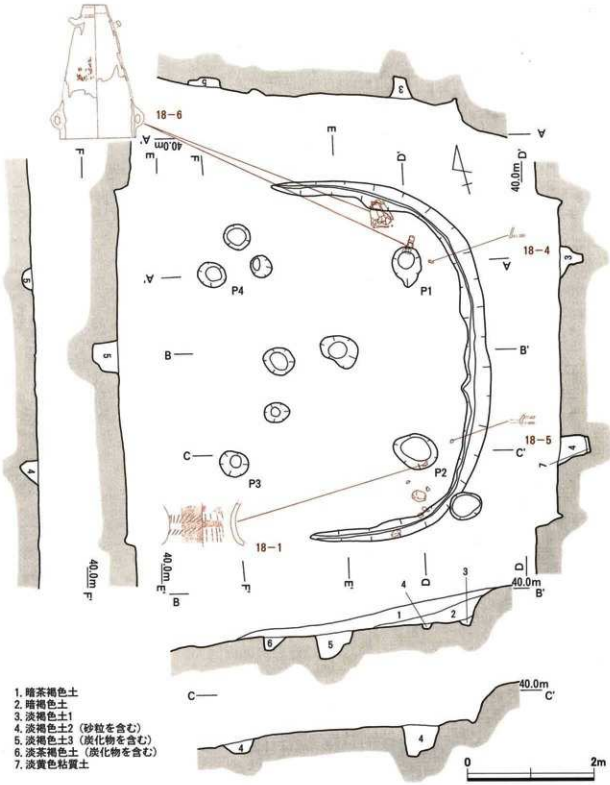
第14図　ＳＩ01遺物出土状況（Ｓ＝1/60　遺物Ｓ＝1/9）



第15図　ＳＩ01出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）

ほぼ同時期と考えられる。この他、前述のハケ状工具による波状文が施された甕は小谷２式（草田編年７期相当）まで残存するものである[4]。古い時期の資料としては、第15図３が松本編年Ⅳ－２様式のもので、底部資料も同じ頃のものと推察される。

以上のように、流れ込みの土器が多く、住居跡の年代を知る目安となる資料に乏しいが、覆土中の土器が松本編年Ⅳ－２様式～小谷２式（草田編年７期相当）の範疇におさまることから、住居廃



第16図　ＳＩ02実測図（Ｓ＝1/60　遺物Ｓ＝1/9、18－6はＳ＝1/18）

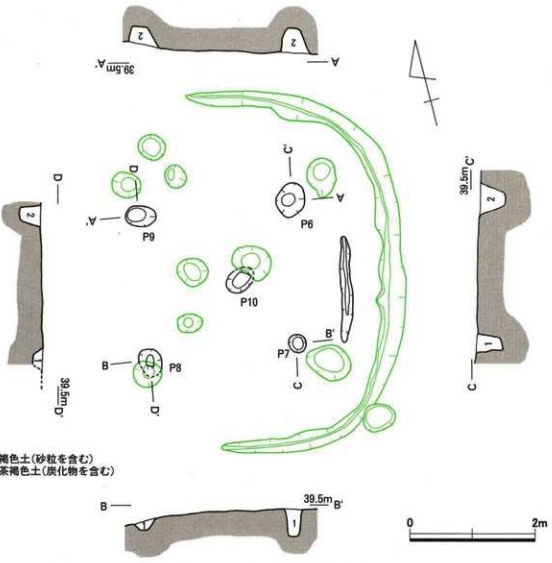
棄時の年代は小谷２式（草田編年７期相当）以前と思われる。

ＳＩ02・ＳＩ02－2（第16・17図）

規模・形態　当住居跡はⅡ区のほぼ中央部にあり、標高約40mの緩斜面に所在する。斜面下方の西側は、後世の改変により段状に削平され、流失も起因して壁体の1/2程度が失われている。住居跡の平面形は隅丸方形プランで、現存する規模は、東西方向が北壁で3.4m、南壁で2.8m、南北が5.6mを測る。壁は垂直気味に掘り込まれ、壁高は最も残りの良い部分で60cmあった。

また、当住居は建て替えを行っており、建て替え前の住居跡を便宜的にＳＩ02－2と呼称する。ＳＩ02－2は壁体溝の東側部分しか残存しておらず、平面プランは明らかでないが、ＳＩ02の主柱穴ラインの内側に並列するように主柱穴が穿たれていることから、ＳＩ02と大きな構造の違いはなかったものと思われる。

柱穴・壁体溝　住居内からＳＩ02に伴うと思われる柱穴を９穴検出した。主柱穴はＰ１～Ｐ４で、４本柱構造の建物であったと思われる。柱穴はＰ１・Ｐ２が径50cm～70cm、深さ40cm～50cmである。Ｐ３・Ｐ４は上面が流出しており、現存する面で径40cm～50cm、深さ約20cmを測る。柱間距離は各



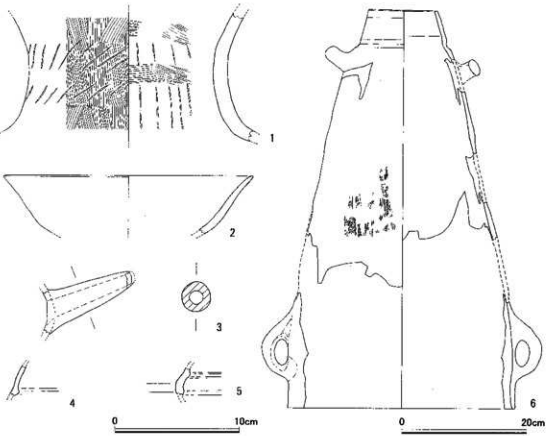
第17図　ＳＩ02－2実測図（Ｓ＝1/60）

柱間とも３mであった。中央ピットと思われるＰ５は、後述するＳＩ02－2の中央ピットＰ10を切るように穿たれていた。覆土に炭化物が多く含まれていることから炉跡と想定され、規模は径50cm～60cm、深さ40cmであった。この他に、住居跡の床面に焼土面などは検出されなかった。壁沿いには幅10cm～20cm、深さ10cmの壁体溝が回り、斜面下方の西側で両端とも途切れていた。

Ｐ６～Ｐ10はＳＩ02－2に伴う柱穴と考えられ、このうちＰ６～Ｐ９が主柱穴であったと想定される。規模はＰ６・Ｐ７が径35cm～50cm、深さ40cm～45cm、上面が流出しているＰ８・Ｐ９は径25cm～50cm、深さ15cm～40cmを測る。柱間距離は東西2.4m、南北2.25mであった。前述のとおりＰ10はＳＩ02－2に伴う中央ピットと考えられ、北側半分はＰ５に切られていた。残存している部分で、径30cm～40cm、深さ30cmを測る。Ｐ６－Ｐ７ラインの80cmほど東側の床面で、ＳＩ02－2の壁体溝と思われる溝を検出した。溝の規模は、残存長1.7m、幅約20cm、深さ６cmであった。各主柱間の80cmほど外側に壁体溝が回っていたとすれば、ＳＩ02－2の復元規模は東西４m、南北3.65mとなり、比較的小規模な住居跡であったものと思われる。

覆土　住居跡内の覆土は下層に暗褐色土、上層に暗茶褐色土が堆積しており、いずれも斜面上方から流れ込んだものと考えられる。遺物は主に下層の暗褐色土内から出土した。なお、ＳＩ02、ＳＩ02－2ともに貼床は検出されなかった。

遺物出土状況　住居跡からの出土遺物は非常に乏しく、図化できたものは６点のみであった。第18図１・４・６はＳＩ02の床面付近から出土したもので、同図３はＳＩ02－2のＰ７から出土したものである。Ｐ１からも薄手の土師器細片が数点出土しているが、器種等は全く判別できない。他は東側の壁体溝付近の覆土から出土したもので、第18図に図化した以外に、20片ほどの弥生土器及び



第18図　ＳＩ02出土遺物実測図（Ｓ＝1/3　６はＳ－1/6）

土師器の細片が見つかっているが、いずれも風化が著しかった。

ＳＩ02・ＳＩ02－2出土遺物（第18図）

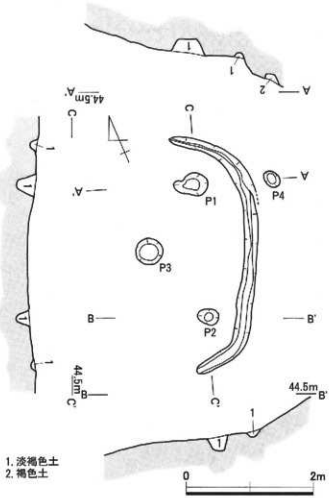
1は弥生土器の壺頸部で、内外面にハケ目が施され、内面にしぼり痕が残る。2は土師器の高坏で、器壁が薄く、緩やかに外反しながら立ち上がる。3は注口土器の注口部で、本体の土器にはめ込んであった部分から剥離している。4と5は土師器細片のため判別が難しいが、4が甕口縁部、5が鼓形器台の筒部と思われる。いずれも、風化が著しく詳細は不明である。6は甑形土器で、Ｐ1近くの床面付近から出土した。体部の狭口縁側に横位一対の把手を、広口縁側に縦位一対の把手をそれぞれ付ける。土器表面の風化が著しく、調整が残っている部分は少ないが、外面体部に縦方向のハケ目がみられる。内面はヘラ削りの痕跡を所々に留めるが、単位や方向はよくわからない。

年代　遺物の年代は、第18図1は弥生時代中期後半の松本編年Ⅳ様式の特徴を示している。第18図2～6は松山編年小谷1式（草田編年6期新段階相当）～小谷2式（草田編年7期相当）頃のものと思われるが、第18図3は「注口付土器は、小谷式単独の土器群では例がないことから、大木式（草田編年6期古段階相当）の中で終息しているようである[5]。」との指摘があることから、小谷1式よりはやや古い可能性が考えられる。したがって、ＳＩ02－2の年代は大木式（草田編年6期古段階相当）に比定され、ＳＩ02は小谷1式（草田編年6期新段階相当）～小谷2式（草田編年7期相当）頃に建て替えられたものと思われる。

ＳＩ03（第19図）

規模・形態　当住居跡はＳＩ02の東側斜面上方に位置し、標高44m～45mのかなり傾斜ある場所に穿たれている。壁体や床面は大部分が流失しており、壁体溝と柱穴の一部を検出したに留まった。住居跡の規模は、残存長が東西1.6m、南北3.6m、深さは壁高がわずかに残存する北東隅で約30cmを測る。南側と北側の壁体溝が広がり気味に途切れているため、平面形を断定できないが、柱穴との関係からみて概ね隅丸方形ではないかと推察される。

柱穴・壁体溝　柱穴は住居内の床面でＰ1～Ｐ3の3穴を確認した。いずれも床面の流失により上面は失われていると思われる。Ｐ1・Ｐ2が主柱穴と考えられ、規模は径30cm～50cm、深さ20cm～30cmである。Ｐ1－Ｐ2の距離は2.1mを測る。Ｐ3は中央ピットと考えられるが、覆土や周辺で焼土や炭化物などは認められなかった。また、Ｐ4は竪穴住居外縁部の垂木柱穴である可能性



第19図　ＳＩ03実測図（Ｓ＝1/60）

も考えられるため掲載した。溝は、幅20cm～25cm、深さ6cm～10cmを測り、前述のとおりやや広がり気味に途切れる。

覆土　ＳＩ03は地山面で柱穴と壁体溝を確認するまで住居跡という認識をもっていなかったため、平面プランで覆土を確認できなかった。第12図に示したⅡ区東西土層図のC－C'ラインの下段19層を参考にすると、住居内に地山の土と類似した黄褐色土が堆積しており、斜面上方から流れ込んだ様子が窺える。ＳＩ03に伴う遺物は認められなかった。

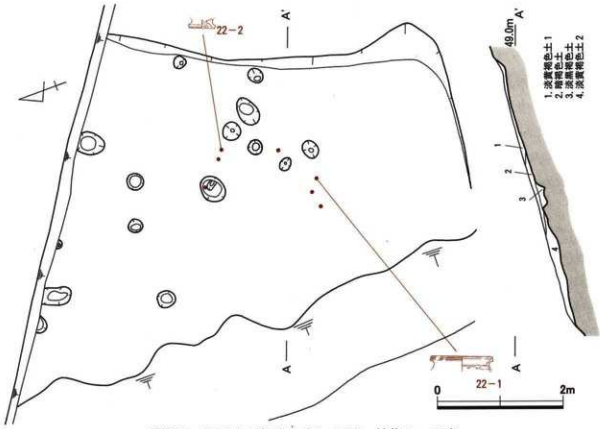
年代　出土遺物が皆無なので明確な年代は不明であるが、住居跡の構造や位置的な関係からみて、ＳＩ02とほぼ同時期のものと思われる。

(2) 加工段

加工段１（第20図）

規模・構造　当加工段はⅡ区の中央部よりも北側の標高約49m程の斜面に位置する。斜面上方をカットして平坦面を造り出した遺構で、周囲に比べて比較的傾斜の緩やかな場所である。斜面下方にあたる北西側は後世の改変により削られており、遺構面が失われている。北側は土層観察用の畦で遮られるが、プランの端はこの場所でほぼ途切れるものと思われる。また、加工段の深さが浅いことから、上面も削平を受けている可能性が考えられる。このため、本来の形状は明らかでないが、南東隅が逆Ｌ字状を呈することから、方形に近かったものと思われる。

規模は、最も残りの良いところで、東西5.3m、南北5.5m、深さ20cmを測る。地山面で14穴の柱穴を確認したものの、掘立柱建物跡を構成するような並びはみられなかった。また、周溝も検出できなかった。



第20図　加工段１実測図（Ｓ＝1/60　遺物Ｓ＝1/9）

覆土　加工段には、下層に淡黒褐色土と淡褐色土２が、上層に淡黄褐色土１と暗褐色土が堆積しており、上層に遺物が含まれていた。下層は貼床の可能性が考えられる。

遺物出土状況　前述のとおり遺物は上層から弥生土器の破片が出土した。出土量はわずかであった。

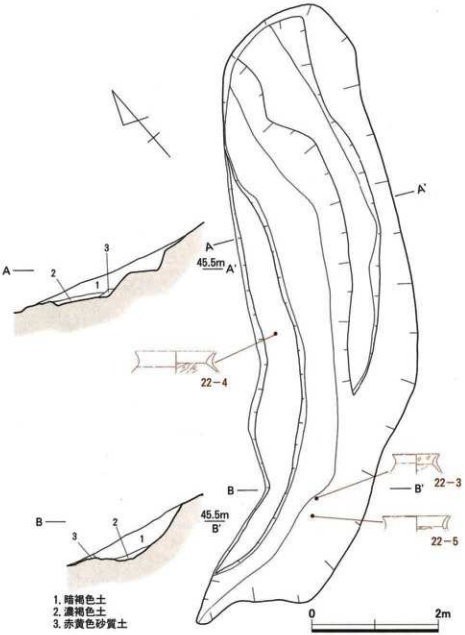
加工段１出土遺物（第22図１・２）

図化できたものは２点であった。１は口縁部がやや内傾する甕で、断面が三角形状を呈し段部があまり拡張しないタイプである。外面に２条の凹線文、内面頸部以下にヘラ削りを施す。２は甕の高台状底部と思われ、脚端部がやや肥厚する。脚部内面にはヘラ削りがみられる。

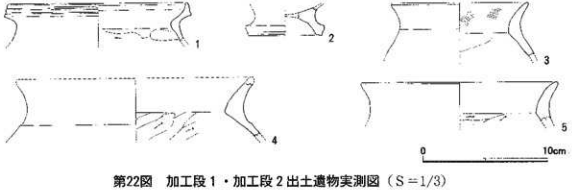
年代　出土遺物に乏しく、年代を判断するのは難しいが、第22図１は松本編年Ⅳ－２～Ⅴ－１様式に相当するものと考えられ、これを重視すれば、加工段の廃棄時期もおよそこの頃に比定されよう。

加工段２（第21図）

規模・構造　加工段２は調査区のやや南寄り、ＳＩ01の斜面上方に位置し、標高は45m～46mを測る。斜面の傾斜角度は25°～30°とかなりきつく、人が立っているのにも苦労するような場所である。平面のプランは不整形で、斜面上方の南東側は緩い円弧状を呈し、斜面下方の北西側はやや歪な直線状に穿たれている。斜面下方の流失はあまりないように思えた。加工段内部も北半分は二段掘り、南側は一段掘りになっており、床面はかなり凸凹していた。規模は、東西幅が1.8m～2.3m、南北の長さが9.2m～9.4m、深さが30cm～40cmを測るが、



第21図　加工段２実測図（Ｓ＝1/60　遺物Ｓ＝1/9）



第22図　加工段１・加工段２出土遺物実測図（S＝1/3）

壁の高さが80cm前後あるため、かなり深く掘り込まれた印象を受ける。柱穴は全く見つかっていない。当加工段は、明確な平面プランを示さず、内部も整形された様子が窺えないことから、建物を建てる目的の遺構ではないと思われるが、その性格は不明である。

覆土　床面付近に濃褐色土と赤黄色砂質土が薄く堆積し、その上層を暗褐色土が覆っていた。上層は流れ込みの堆積土と思われ、下層は地山を整地するための貼床的なものかもしれない。

加工段２出土遺物（第22図３～５）

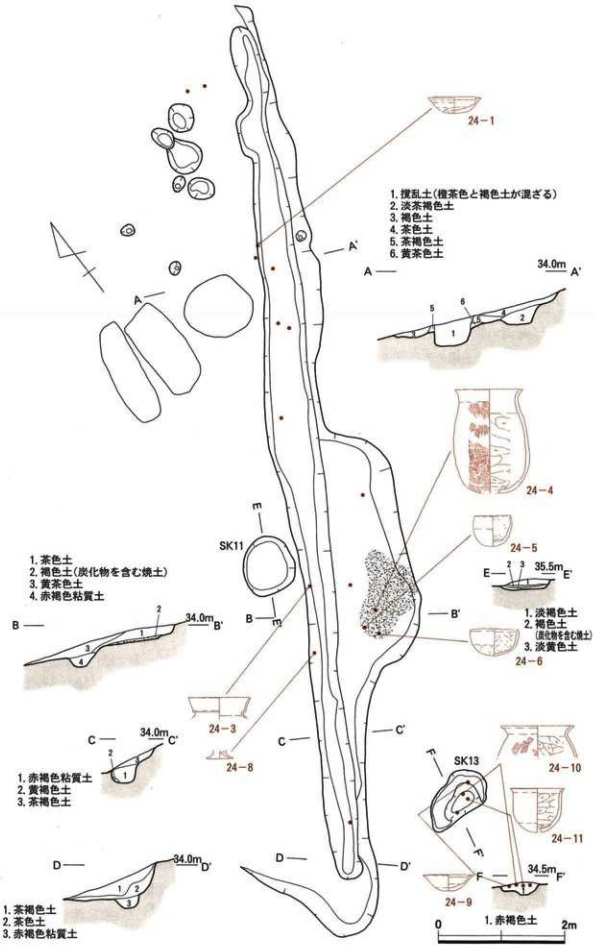
３と５が第１層、４が第３層から出土した。図化できたもの以外に、上層から須恵器小壺類が１片と土師器が10片ほど出土した。３～５はいずれも土師器の甕口縁部で、口縁が「く」の字状に外反して開き、端部を丸くおさめる。３は内面にハケ目が残り、頸部以下はいずれもヘラ削りを施す。

年代　下層から出土した第22図４は古墳時代後期以降のものと考えられるため、加工段も概ね同時期のものと思われる。また、上層より出土した第22図３・５の年代も同図４と大きく異ならないことから、加工段を廃棄した後、それほど時間を経ることなく埋まったとみられる。

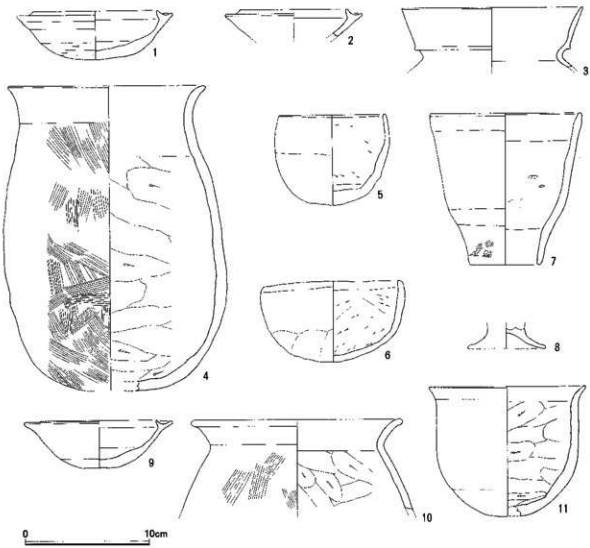
加工段３（第23図）

規模・構造　当加工段はⅡ区の北西隅にあたる標高約34mの緩斜面に位置し、東側の斜面上方は平成11年度調査区に接する。斜面上方にあたる東側の地山をカットして平坦面を造り出しており、斜面の下側は流出したものと考えられる。北端は途切れており、南端も逆Ｌ字状に曲がってから途切れていることから、全容は明らかでない。ただし、検出時には、覆土である褐色系の堆積土が東西1.5m～2.5m、南北15mの範囲で堆積していたことから、もとは南北に長い方形だったのかもしれない。加工段の現存規模は、東西幅が２m～2.5m、南北長が15m、深さ20cmを測る。また、中央部の斜面上方には、東西1.2m、長さ４m、深さ15cm～20cmのテラス状の平坦面があり、床面には幅１m～1.4m、厚さ10cmの焼土がみられた。ここから第24図４～７に示した土師器の甕や坏類、ミニチュア土器が出土しており、炉としての機能が想定される。ただ、ミニチュア土器が見つかっていることから、火に関わる祭祀が行われた可能性も考えておいた方がよいだろう。加工段の壁面沿いには、長さ13.6m、幅50cm～80cm、深さ約30cmの溝が穿たれていた。検出当初は加工段に伴う施設と思われたが、上層堆積状況や出土遺物の年代などから、これよりも古い時期の遺構ということがわかった。

床面で、遺構の伴うと思われる柱穴７と土坑ＳＫ11が見つかったが、掘立柱建物を構成する柱並びは認められなかった。また、テラス状平坦面の南側で加工段３と同時期の土坑ＳＫ13を検出した。なお、土坑については、後述の(4)の項で別途説明する。



第23図　加工段３・ＳＫ11・ＳＫ13実測図（Ｓ＝1/60　道物Ｓ＝1/9）



第24図　加工段３・ＳＫ13出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）

覆土　加工段の上層には前述したとおり褐色系の土層が堆積しており、須恵器の完形に近い坏身や土師器の破片が含まれていた。テラス状の平坦面には、褐色系の土の下層に焼土が堆積しており、炭化物も含まれていた。溝には赤褐色系の粘質土が堆積しており、加工段の覆土とは明らかに区別できた。加工段が造られる以前に埋まってしまったとの思われる。ＳＫ11・ＳＫ13は覆土が加工段３と大きく異ならないことから、同時期に埋まった可能性が考えられる。

加工段３出土遺物（第24図１～８）

図示した遺物のうち、１・２は上層の覆土から、４～７はテラス状平坦面の床付近から、３・８は溝から出土した。１・２は須恵器の坏身で、口縁部のかえりが短く、口径が10cm程度の小型品である。１は外面底部外周に粗いヘラ削りを施す。３は複合口縁をもつ土師器の甕である。器壁が薄く、口縁は肥厚せずに直立気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。内外面とも風化が著しく調整は不明である。４は土師器の甕で、口縁部が内湾しながら外方へ開き、胴部はあまり張らずに長胴形を呈する。外面に粗いハケ目、内面にヘラ削りが施される。５・６は土師器の坏で、内側にやや内湾しながら口縁部に至る。内面を粗いヘラ削りで成形する。７はミニチュア土器と考えられるもので、上下の端部は丸くおさまり、器高は12.2cmを測る。瓶を模したものであろうか。８は低脚坏

の脚部で、内湾気味に外方へと開く。

年代　覆土から出土した第24図1は大谷編年蓋坏のA7型、同図2はA8型に相当し、出雲5期（飛鳥Ⅰ併行期）～出雲6a期（飛鳥Ⅱ併行期）に比定される。第24図4～7は床面付近からの一括遺物で、須恵器の年代と差はないものと思われる。第24図3・8は松山編年小谷1式（草田編年6期新段階相当）におさまるものと考えられる。したがって、加工段3は出雲5期（飛鳥Ⅰ併行期）～出雲6a期（飛鳥Ⅱ併行期）頃に、これに先立つ壁面の溝は小谷1式（草田編年6期新段階相当）頃に廃絶されたものと推測される。

加工段4（第25図）

規模・構造　Ⅱ区の中央部、西側斜面で最も傾斜が緩く、谷に近い場所にあり、標高は35m～36mを測る。遺構の南東では、掘立柱建物跡に伴うと思われる柱穴群が検出されている。覆土上には、後述するSK49のほか、10穴以上の柱穴（第25図中で上端を細く表記したもの）が穿たれており、切り合いが認められた。

加工段の北側は調査区外になり、また、中央部を近年まで使われていた進入路により寸断されていたため、全容は明らかでないが、東西の幅が3m～5m、南北の残存長が20m、深さ20cm～30cmとかなり大規模な遺構である。また、北西隅では別の加工段を確認し、遺構の切り合いからこの加工段が当初に造られたものと考えられる。規模は、東西幅が2m～3m、南北の残存長が8m、深さ30cmを測り、南端は山への進入路により途切れていた。2つの加工段は非常に近い場所に造られていることから、当初のものが手狭となり、南側に拡張されたのではないかと考えられる。

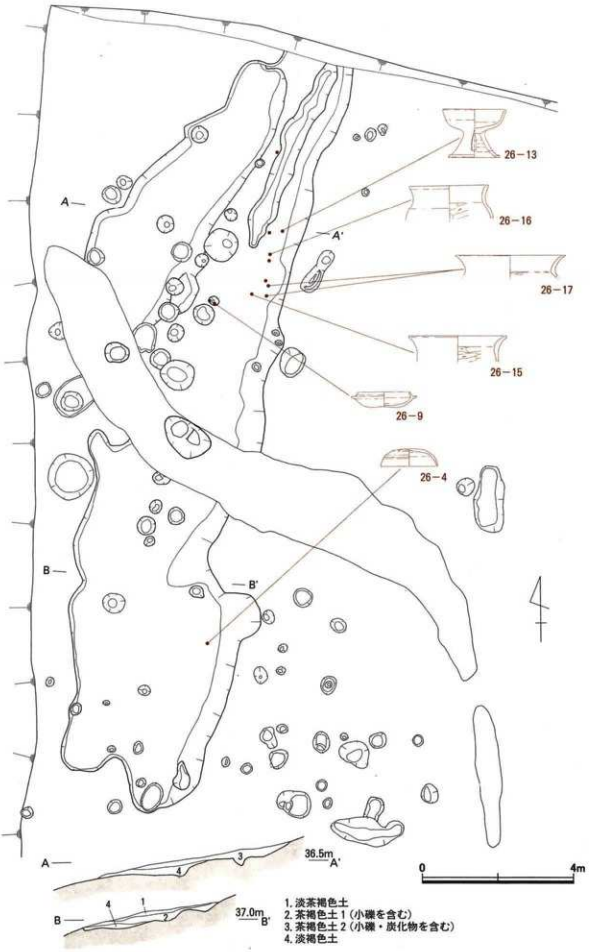
加工段4の床面からは径30cm～80cm程の柱穴や土坑状の穴が20穴以上確認され、いずれも加工段に伴うものと考えられるが、掘立柱建物跡を構成する並びはみられなかった。また、南寄りの壁際には、幅60cm～70cm、残存長5.3mを測る溝が検出された。側溝と考えるには大きすぎるが、加工段に伴うものであることは確実であると思われるので、何らかの機能を果たしていたものであろう。

覆土　加工段4の上層には茶褐色系の土層が堆積しており、南寄りには炭化物も混入していた。出土遺物の大部分はこの層からのものである。壁際の溝内も同様の覆土であり、両者の間に時期差は認められなかった。また、当初の加工段内には固く締まった第4層褐色土が堆積していた。堆積後のレベルが加工段4の床面レベルとほぼ一致するため、当初の加工段を埋め戻して拡張が行われたものと推測される。

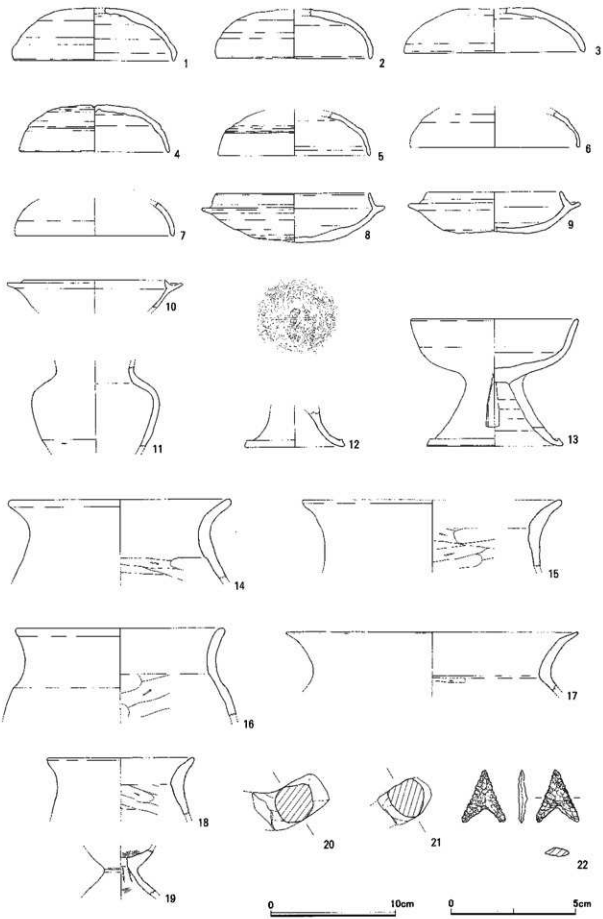
加工段4出土遺物（第26図）

加工段4の覆土からは、コンテナ2箱分の須恵器と土師器が出土し、それぞれの割合は1：9と圧倒的に土師器が多かった。器種では、須恵器のほとんどが蓋坏類で、土師器は甕類が多数を占めた。遺物の遺存状態が良くないため、実測できたものはわずかであった。

1～7は須恵器の蓋坏である。1～3・6・7は口径が12cm～14cm、肩部には稜・沈線とも表現されず、天井部はヘラ起こし後ナデ調整を施す。4・5は肩部に突帯と稜が表現され、1条の沈線が回る。4は天井部に回転ヘラ削りを施し、ヘラ記号もみられる。8～10は坏身で、8・9は口縁部のかえりが内湾気味に立ち上がり、外面底部はヘラ起こし後ナデ調整を施す。10はかえりが短いタイプのものである。11は直口壺の頸部から胴部にかけての部分である。12は上部が欠損するため詳細は不明であるが、脚付椀の脚部ではないかと思われる[30]。13は高坏で、脚端部外面に内傾する面をもち、三



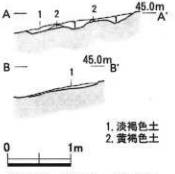
第25図　加工段4実測図（S＝1/100　遺物S＝1/9）



第26図　加工段4出土遺物実測図（S＝1/3　22はS＝2/3）

角形の2方透かしを入れる。14～18は土師器の甕口縁部である。14・15は口縁が内湾気味に外方へ広がり、端部を丸くおさめる。16は頸部と胴部の境に稜を廻し、緩やかに外反しながら立ち上がる。17は大きく屈曲して開き、端部を細く仕上げる。17は口径が約12cm程の小型品で、14・15と同様の形態を示す。19は小型器台と考えられ、坏部と脚部の間に径6㎜程の孔を開けて貫通させる。25・26は把手で、ヘラ削りの後にナデて成形する。22は黒曜石製の石鏃で、無茎の凹基式のものである。

年代　第26図で示した遺物のうち、須恵器の1～3・6・7と10は大谷編年蓋坏のA7型に、4はやや古い特徴をもつことからA6型に属する。5と9は形態的に8に近いのではないかと思われる。13は大谷編年低脚無蓋高坏のA5型にあたる。これらのセット関係から、須恵器は出雲4期（TK209併行期）～出雲5期（飛鳥Ⅰ併行期）のものと考えられ、土師器もこの時期におさまるものであろう。このように遺物の年代にあまり時間差がないことから、当初の加工段を築造後あまり時間を置かずに加工段4を造り、出雲5期（飛鳥Ⅰ併行期）までには廃棄されたのではないかと考えられる。



第27図　SD01・SD02実測図（S＝1/60）

(3) 溝状遺構

SD01・SD02（第27図）

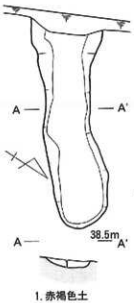
規模　Ⅱ区の一番南端の西向き斜面に、平行な位置で穿たれていた。実際は溝というよりも細長い土坑らしきものであるが、調査時に溝状遺構として取り扱ったため、ここに掲載する。規模はSD01が長さ1.7m、幅30cm～50cm、深さ20cm、SD02が長さ1.3m、幅30cm、深さ10cmを測る。両者ともに、床面のレベルは南から北へと低くなっている。また、SD01の床面は凸凹して不安定であった。

覆土　SD01・SD02ともに淡褐色土が認められたが、非常に浅く、堆積しているというよりも、かろうじて残存するという程度であった。両者とも出土遺物は認められなかった。

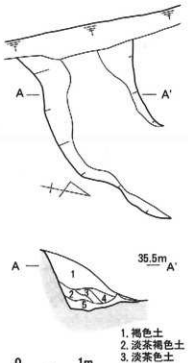
年代・性格　遺物が出土しておらず、溝としての機能も認めがたいため、年代・性格ともに不明である。

SD03（第28図）

規模　SD03は、Ⅱ区の北端、舌状に延びた丘陵先端部に位置し、標高約38m程の傾斜のかなりきつい斜面に穿たれている。溝は等高線と平行する形で検出され、西端は土層観察用の畦で途



第28図　SD03実測図（S＝1/60）



第29図　SD04実測図（S＝1/60）

切れる。畦の西側、平成11年度調査区では、本遺構から南西にややずれる位置に加工段1が存する。溝の規模は、東西の残存長が3.1m、幅が0.8m～1.1m、深さ15cmを測り、床面レベルは、東から西へと低くなっている。溝の両端は流失のため自然消滅したものと思われるが、西端は平成11年度調査区加工段1に続く可能性を残す。

覆土　堆積土は赤褐色土のみで、掘り返し等の形跡は認められなかった。

年代・性格　出土遺物は検出されていないため、年代は不明である。ただ、推測の域を出ないが、平成11年度調査区加工段1の一部である可能性もあり、関連性があるとすれば、加工段1と同時期の7世紀前半代のものかもしれない。

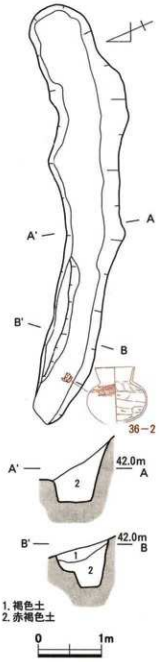
S D04（第29図）

規模　S D04は、S D03と同様にⅡ区北端の北向き斜面にあり、S D03下方の標高35m前後の場所に位置する。遺構の南東側は土層観察用の畦を挟んで、平成11年度調査区S D02へとつながっている。溝は、床面が南東から北西方向に向かって低くなっており、北西端は流失し途切れていた。検出時の規模は、残存長が約3.0m、幅が1.2m～1.7m、深さ90cmを測る。また、平成11年度調査区S D02とあわせた溝の長さは8.0m、最大幅が2.0m程で、かなりしっかりした溝である。断面は、北側の上端が流出しているため明瞭ではないが、逆台形に近い形状をしていたものと思われる。

覆土　断面A－A'をみると、5層に分かれており、堆積状況から上層の1層、中層の2～4層、下層の5層に大別される。平成11年度調査区S D02では、堆積状況から3回の掘り返しを確認しているが、下流にあたる今回の調査では2回程度の掘り返しを確認するに留まった。

S D04出土遺物（第36図1）

平成11年度調査区S D02では、下層（報告書[7]では「第7層以下」と記述）から松山編年小谷4式（報告書では「松山編年Ⅱ期古段階」と記述）の土師器や須恵器片などが出土しているが、今回は中層から土師器の甕口縁破片が1点のみ出土した。複合口縁の下段突出部付近と思われるが、小片で摩滅も進んでいるため詳細は不明である。



第30図　S D05実測図
（S＝1/60 遺物S＝1/9）

年代・性格　第36図1から具体的な年代を推測することはできない。平成11年度調査区S D02の出土遺物を参考にすれば、小谷4式相当と考えるのが有力であるが、須恵器片が1片混入していることから断定はできない。性格についても明らかでないが、数度の掘り返しが認められることから、ある程度の期間、継続的に利用されたものと考えられる。

S D05（第30図）

規模　S D05は、Ⅱ区の北東端、舌状に延びた丘陵先端部が南東方向へ回り込むところに位置し、

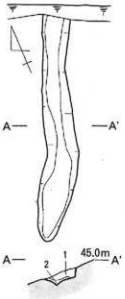
標高は42mを測る。当初は、溝の西半分を検出したが、さらに調査区外の東側へと続く様子であったため、調査区の一部を拡張して東半分を確認した。検出した溝は、等高線と平行するように東西に長く穿たれており、緩く湾曲した平面形を示す。東西の両端は、それぞれ流失して消滅したものと思われる。規模は、残存長が6.7m、幅1m～1.2m、深さ0.8m～1mで、西側部分は一部が2段掘りになっていた。溝の床面はほぼ平坦で、最大部分で上端幅1.2m、下端幅0.7mを測り、断面は逆台形を呈する。傾斜はわずかに西から東へと傾くようである。

覆土　堆積土は、褐色土と赤褐色土の2層で、東側では赤褐色土しか認められなかった。堆積状況から掘り返しが行われた痕跡は窺えない。遺物は、西端に近い位置で土師器の壺が出土した以外は全く認められなかった。

ＳＤ05出土遺物（第36図２）

２は土師器の直口壺で、床面直上から横倒しになった状態で発見された。口縁部がまっすぐ逆ハの字状に開き、胴部は倒卵形を呈する。口縁外面に稜は認められない。内外面には赤色顔料が塗布されていた。

年代・性格　第36図２は形態の特徴から松山編年の夫敷中層式（初期須恵器）に相当し、遺構もその頃の所産と考えられる。性格は定かでないが、赤色顔料を塗布された土器が出土していることから、祭祀的な儀式が行われた可能性も考えられる。



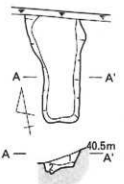
第31図　ＳＤ06
実測図（S＝1/60）

ＳＤ06（第31図）

規模　Ⅱ区中央部、標高約45mの尾根西側斜面にあり、すぐ下方にはＳＩ03が位置する。南北方向に細長く穿たれた溝である。規模は、長さ3.5m、幅0.4m～0.5m、深さ15cmで断面は逆台形状を呈する。床面レベルはほぼ水平であった。

覆土　上層に炭化物を含む暗褐色土、下層に砂質の赤褐色土が堆積していた。いずれも流れ込みにより堆積したものと考えられる。出土遺物は認められなかった。

年代・性格　出土遺物がないため年代を知ることはできないが、ＳＩ03の直上に位置することから、住居跡関連の遺構である可能性も考えられる。



第32図　ＳＤ07
実測図（S＝1/60）

ＳＤ07（第32図）

規模　Ⅱ区のほぼ中央部、標高約37m～42mの間はなだらかな斜面になっており、周辺は後世の改変により斜面が削られて階段状を呈している。これから述べるＳＤ07～ＳＤ10はその上段から検出された遺構である。

平面的な位置関係から、平成11年度調査で確認されたＳＤ03の続きと考えられる。平面形は、横幅がやや広く、南端が隅丸状に閉じていた。検出時の規模は、残存長が1.6m、幅0.6m～0.9m、深さ20cm～25cmであった。平成11年度調査区ＳＤ03とつなげ合わせた復元長は約10.2m、最大幅が1.8m程で、北側から緩やかに弧を描きながら南へと延び、幅をすぼめて終焉するようである。床面は南側が高く、北側との標高差は約70cmあった。

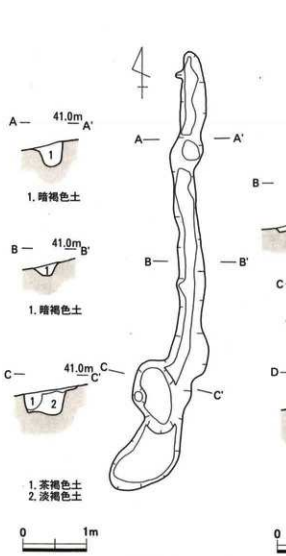
覆土　上層に淡褐色土、下層に地山の土が流れ込んだような赤褐色土が堆積していた。

年代・性格　今回の調査では遺物が全く認められなかったが、平成11年度調査区ＳＤ03では松本編年Ｖ－１様式の壺や甕の口縁が出土していることから、当溝も同年代のものと推測される。性格は、円弧を描く形状から住居跡や加工段に伴うものである可能性も考えられるが、周辺に明確な遺構・平坦面が存しないことから特定しがたい。

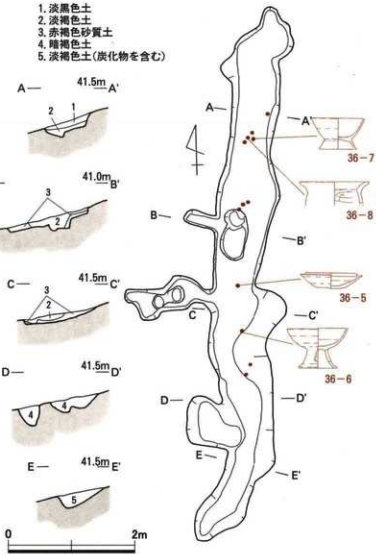
ＳＤ08（第33図）

規模　Ⅱ区中央部の緩斜面に位置し、すぐ南側にはＳＤ09が隣接する。また、周辺には柱穴や土坑などが多数穿たれており、切り合い関係が認められるものもあった。当溝の平面形はかなり歪で、中央部と南端に近い部分の２か所では、深さ30㎝～50㎝程の落ち込みがみられた。溝の規模は、南北の長さが約７ｍ、幅が0.4ｍ～0.8ｍ、深さ15㎝～30㎝で、断面の形状はＵ字形の個所や比較的平たい個所などがあり、一定ではなかった。床面は北側がわずかに高い。

覆土　基本的な覆土は茶褐色土のみであるが、Ｃ－Ｃ'をみると、淡褐色土を掘り返したような状態で堆積しており、土坑状の落ち込みと切り合い関係があったのかもしれない。また、覆土は隣接



第33図　ＳＤ08実測図（Ｓ＝1/60）



第34図　ＳＤ09実測図（Ｓ＝1/60　遺物Ｓ＝1/9）

するＳＤ09とよく似たものであった。

ＳＤ08出土遺物（第36図３）

ＳＤ08からの出土遺物は非常に乏しく、茶褐色土から第36図３のほか、古墳時代後期頃の土師器片がわずかに出土したが図化できるものはなかった。３は低脚坏の破片で、坏部と脚部の接合部分であると思われる。表面の風化が進んでいるが、内外面ともにナデ調整の痕跡が残る。

年代・性格　第36図３は、全容が明らかではないため時期を判断するのは難しいが、低脚坏は小谷４式以降ほぼ消失すると考えられることから[8]、概ね松山編年小谷３式以前の古墳時代前期頃のものとしてよいのではないだろうか。ただし、溝の年代については、堆積土がＳＤ09と似ており、古墳時代後期の土師器片も出土することから、古墳時代後期のものと思われる。また、性格については、溝が延びる西側の平坦面に柱穴が多数穿たれていることから、掘立柱建物跡に関連した施設であったのかもしれない。

ＳＤ09（第34図）

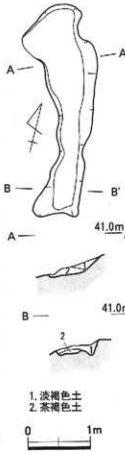
規模　当溝は、Ⅱ区中央部の緩斜面にあり、前述のとおりＳＤ08がすぐ北側に隣接する。ＳＤ08と同様に周辺には多数の柱穴や土坑があり、西側にはＳＤ10が平行する位置に穿たれている。溝の平面形はかなり歪で、南側ほど上端から下端の間隔が広く、なだらかな掘り込みになっていた。また、中央部から南側にかけての３か所で深さ10㎝～25㎝の溝状ないし土坑状の落ち込みがみられた。溝の規模は、南北の長さが8.5m、幅が0.7m～１m、深さ20㎝～30㎝を測る。

床面はほぼ平坦であった。

覆土　溝内の覆土はほとんどが褐色系の土層であったが、北側の一部では上層に淡黒色土が堆積していた。出土遺物は、淡黒色土と褐色系の土層から出土している。

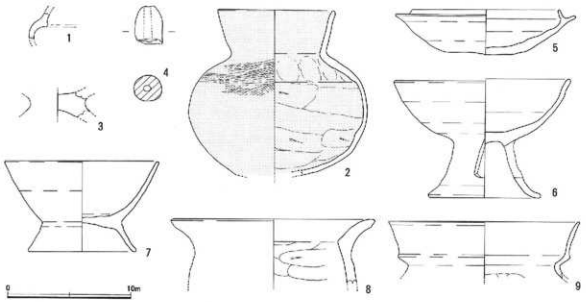
ＳＤ09出土遺物（第36図４～８）

ＳＤ09では、上層から中世の土師質土器が、褐色系の土層から須恵器や土師器、土師質土器などが出土したが、土師器はほとんどが細片であり、復元もできなかったため、図化できたものは５点のみであった。このうち、７は土師質土器の高台付坏で、やや高めのハの字状に開く高台を有し、底部からわずかに丸みを帯びながら上方へと延びる。外面の調整は不明である。５・６は須恵器である。５は坏身で、口縁部のかえりが内傾しながら立ち上がり、外面底部はヘラ起こし後ナデ調整を施すものである。６は高坏で、脚端部外面は丸くおさまり、三角形の２方透かしを入れる。坏部は緩やかに丸みをもって立ち上がり、外面に稜線などは認められない。８は土師器の壺口縁部で、胴部はあまり張らず、頸部から口縁にかけて肥厚し、外方へと開く。外面は風化が激しく調整は不明である。４は管状土錘で、1/2が欠損する。中心部に径５㎜の孔が貫通する。



第35図　ＳＤ10
実測図（Ｓ＝1/60）

年代・性格　第36図４～８のうち、７は中世の土師質土器で、松江市大井町池ノ奥２号墳に周溝内土壙出土土器と類似する形態のものである[9]。この土器は供伴する須恵器の時期から11世紀代に位置づけられており[10]、７



第36図　ＳＤ04・05・08・09・10出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）

もこれに近い年代のものではないかと考えられる。5は大谷編年蓋坏のＡ７型、6は低脚無蓋高坏のＡ５型に該当するものであることから、出雲５期（飛鳥Ⅰ併行期）に属するものと考えられる。また、4の土錘と、8の土師器も須恵器に伴う時期のものであろう。年代的には上層から出土した7のみが新しい時期のものであるが、その他の遺物は出雲５期（飛鳥Ⅰ併行期）の範疇で捉えられることから、ＳＤ09も同時期の遺構と思われる。性格については、周辺の遺構の在り方から、ＳＤ08と同様に掘立柱建物跡に関連した施設ではないかと推測される。

ＳＤ10（第35図）

規模　Ⅱ区中央部の緩斜面にあり、周辺にはＳＤ08、ＳＤ09のほか、多くの柱穴や土坑が存し、当溝の覆土を掘り込んで造られた柱穴もみられた。遺構の西側は削平より、段になっている。溝は南北方向にかるく弧を描くように延び、平面形はやや歪んだ形をしている。規模は、長さが3.3m、幅が北側で1.3m、南側で0.6m、深さ10cm～15cmで、床面は比較的平坦であった。

覆土　溝内には褐色系の土に２層にわたって堆積しており、近隣のＳＤ08、ＳＤ09の覆土と類似していた。

ＳＤ10出土遺物（第36図９）

出土遺物は１点のみである。９は弥生土器の複合口縁をもつ甕であり、口縁下段突出部はあまり張らず、そこから外反して立ち上がり先端が薄くなるものである。外面にヨコナデ、内面にヨコナデとヘラケズリ調整がわずかに残る。

年代・性格　第36図９は、草田編年５期に相当するものと考えられるが、前述のとおり覆土がＳＤ08、ＳＤ09と類似することから、９は流れ込みによるものと判断し、遺構の時期は古墳時代後期に比定されるものと考えられる。性格は不明だが、周辺の遺構と関連があったのではないだろうか。

ＳＤ11（第37図）

規模　Ⅱ区中央部の階段状に削平された緩斜面の下段からＳＤ11～ＳＤ16が検出された。ＳＤ11は、

段の下端近くで発見された遺構であり、途切れ途切れで3か所に分かれる。基本的には南北に延びるが、北側のプランでは深さ40cmほど土坑状に掘り込まれているところもあった。3か所全てをあわせた溝の規模は、南北の長さ約5.3m、幅が0.4m～0.6m、深さ5cm～25cmである。床面の断面はU字形に近い。

覆土　上面に褐色系の土が堆積し、南側の2つの掘り込みでは下面に淡茶色土が堆積していた。覆土からは土師器が出土したが、細片のため図化できなかった。

年代・性格　土師器は古墳時代後期のものと思われることから、遺構も同時期のものであろう。また、隣接する西側平坦面に同時期の柱穴や土坑が多くあることから、これらの遺構と関連があったものと思われる。

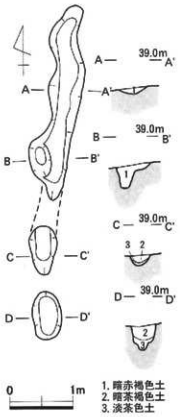
SD12（第38図）

規模　当溝はSD11が存する緩斜面の一番南側に位置し、平面は南北方向に長細に延びる形を呈する。東肩は上端と下端が明確に分かれるが、西肩は下端のみで段を形成していない。規模は長さが4.4m、幅0.3m～0.4m、深さ10cm～15cmを測る。

覆土　溝内には上面に淡褐色土、下面に赤褐色土がわずかばかり堆積していた。出土遺物は全く認められなかった。

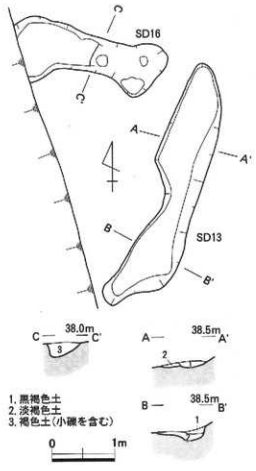
年代・性格　近隣にある遺構は時期不明の柱穴1のみであり、年代・性格は不明である。

SD13（第39図）



第37図　SD11実測図
（S＝1/60）

第38図　SD12
実測図（S＝1/60）

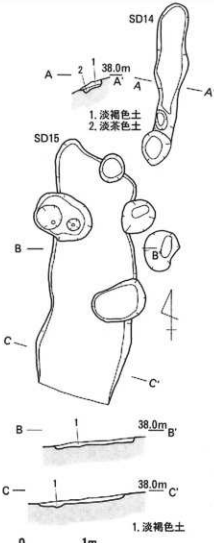


第39図　SD13・SD16実測図（S＝1/60）

規模　ＳＤ13～ＳＤ16はいずれもⅡ区中央部西端にあり、丘陵と谷の端境部分に位置する遺構である。ＳＤ13のすぐ北側にはＳＤ16が隣接している。溝の平面は南端が歪む幅広の不整形をしており、深さはかなり浅い。規模は長さが4.0m、幅が0.5m～1.0m、深さ10cm～15cmであった。床面はほとんど傾斜がなく、平坦であった。

覆土　褐色系の土層が２層にわたり堆積しており、いずれも自然堆積したものと思われるが、ＳＤ14・ＳＤ15の覆土と類似する。

年代・性格　推し量るべき資料はないが、ＳＤ15と覆土が似ていることから、近い年代のものかもしれない。



第40図　ＳＤ14・ＳＤ15実測図
（Ｓ＝1/60）

ＳＤ14（第40図）

規模　当溝もⅡ区中央部の西端に近いところにあり、南側でＳＤ15と隣接する。平面は南北に延びるが、南端は別の柱穴に切られて途切れている。残存する長さが約２m、幅0.35m～0.5m、深さ10cmと溝というよりは浅い落ち込みという印象の遺構である。

覆土　淡褐色土と淡茶色土の２層が堆積しており、いずれも自然堆積したものと思われるが、ＳＤ13・ＳＤ15の覆土と類似する。

年代・性格　出土遺物がなく年代は不明であるが、ＳＤ15と覆土が似ていることから、これに近い年代のものかもしれない。

ＳＤ15（第40図）

規模　ＳＤ15はＳＤ14の南側に隣接する遺構である。覆土には、ＳＫ45や古墳時代前期初頭の遺物が出土したＳＫ46、その他の柱穴などが掘り込まれていた。溝は南北に長いが、東西の幅も広く、長方形に近い形を呈している。南端は自然消滅するように途切れていた。規模は長さ4.0m、幅が1.2m～1.5m、深さ10cm～15cmで、残存する掘り込みはかなり浅かった。

覆土　覆土は淡褐色土の１層であった。前述のとおり、覆土はＳＤ13・ＳＤ14の覆土と類似する。

年代・性格　出土遺物がなく年代は不明だが、切り合い関係から、松山編年小谷３式以前と思われるＳＫ46よりも古いことは明らかである。性格については、東西方向の幅が広く、掘り込みも浅いことから、一部が流失した住居跡など、溝以外の機能も考慮する必要があるかもしれない。

ＳＤ16（第39図）

規模　ＳＤ16は前述のとおりＳＤ13の北側に位置する遺構で、東西に長いが、西端は調査用の排水溝に切られていた。溝の掘り込みが浅く、平面プランは歪んだ不整形を呈する。また、東側には３

か所でピット状の掘り込みを認めたが、機能は不明である。溝の規模は、長さ2.4m、幅0.5m～0.9m、最も深いところでは20cmを測る。

覆土　溝内には黒褐色土が堆積しているのみであった。位置的には近いが、ＳＤ13の覆土とは違う性質の土であるように思われた。

年代・性格　出土遺物がなく、年代・性格ともに不明である。

(4) 土坑

Ⅱ区からは54の土坑を検出した。その多くは竪穴住居跡や溝状遺構が検出された中央部の緩やかな斜面に集中しており、主には掘立柱建物跡の柱穴の一部やこれに伴うものと考えられる。それ以外では、土壙墓と考えられるものもいくつか認められた。以下、土坑と考えられたものについて順次報告する。

ＳＫ01・ＳＫ02・ＳＫ04（第41図）

規模・形態　調査区東南隅の尾根に近い場所で検出したもので、３基の切り合いから、ＳＫ04→ＳＫ02→ＳＫ01の順に造られていることがわかる。最も新しいＳＫ01の北端も、ＳＸ03を造る際の掘り込みにより切られていた。各土坑の現存する規模は、ＳＫ01が1.7m×0.9m、深さ30cm、ＳＫ02が１m×1.1m、深さ20cm、ＳＫ04が長さ0.7m、深さ20cmであった。形態は不明である。

覆土　ＳＫ01に暗褐色土、ＳＫ02に茶褐色土、ＳＫ04に暗茶色土が堆積していた。

出土遺物（第46図１・２）

遺物はいずれもＳＫ01から出土した。１は肥前系の染付碗で底部に蛇の目凹形高台を付ける。２は肥前系の陶胎染付の碗である。

年代・性格　ＳＫ01の出土遺物はいずれも18世紀後半頃のもので、ＳＫ01もその頃のものであろう。ＳＫ02・ＳＫ04は切り合いからみてＳＫ01に先行するものである。明確な年代は不明だが、近隣に古い年代の遺構が存しないことから、ＳＫ01と年代の差があまりないものと思われる。

ＳＫ03（第41図）

規模・形態　Ⅱ区の南寄り、斜面の中腹に位置する。形態は楕円形で、規模は1.2m×0.7m、深さ35cmで、断面は逆台形状を呈する。

覆土　土坑内には地山の土がブロック状に混じった黒褐色土が堆積していた。

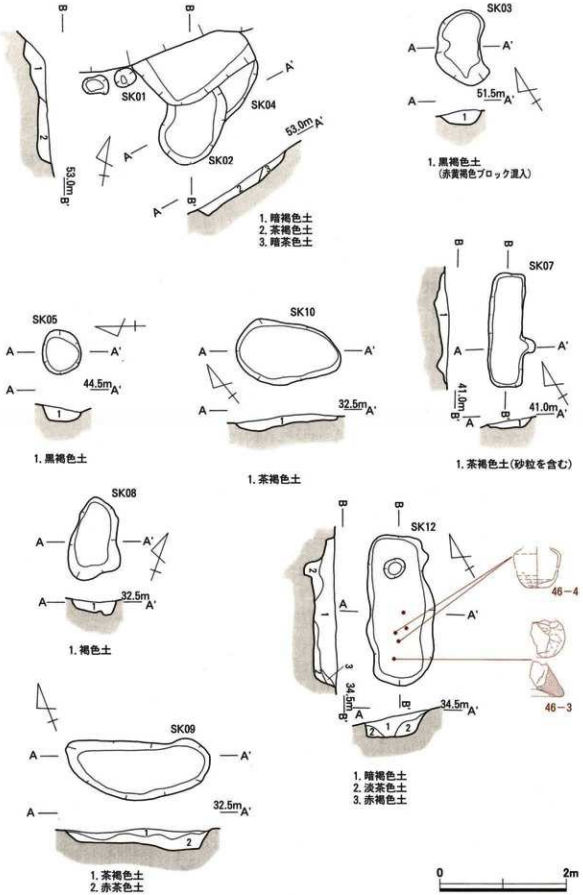
年代・性格　出土遺物がないため、年代・性格ともに明確でないが、覆土が当遺跡で検出した弥生～古墳時代にかけての遺構のものと似ていることから、比較的古い年代のものと推測される。

ＳＫ05（第41図）

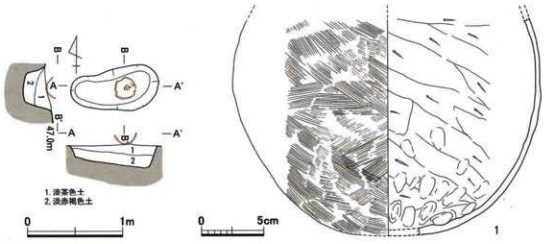
規模・形態　当遺構は、調査区南西側の谷へ向かって落ちる崖際で検出された。平面形は円形で、規模は径0.7m、深さが15cmほどの浅い掘り込みであった。上面が流出しているのかもしれない。

覆土　土坑内には黒褐色土が堆積していた。遺物は認められなかった。

年代・性格　年代・性格ともに不明だが、ＳＫ03と同様に覆土が弥生～古墳時代にかけての遺構のものと似ていることから、比較的年代の古い遺構ではないだろうか。



第41図　ＳＫ01～05、07～10、12実測図（Ｓ＝1/60　遺物Ｓ＝1/9）



第42図　ＳＫ06実測図（Ｓ＝1/40）　**ＳＫ06出土遺物実測図**（Ｓ＝1/3）

ＳＫ06（第42図）

規模・形態　Ⅱ区の中央部よりも北側、丘陵斜面が西から北へと向きを転換する尾根の先端部で検出された。この付近の遺構は当土坑のみである。平面形は東西に長い楕円形で、規模は0.9m×0.45m、深さ約50cmであった。覆土の上には土師器の甕が供献されていたが、土器の頸部以上は既に失われていた。

覆土　土坑内には、上層に淡茶色土、下層に地山に似た淡赤褐色土が堆積していた。土坑内に遺物は認められなかった。

ＳＫ06出土遺物（第42図１）

１は土師器の甕胴部で、前述のとおり供献土器と考えられる。胴部最大径は中位にあり、球形に近いプロポーションで、底部は完全な丸底である。外面に横方向のハケ目が施され、内面はヘラ削りと底部に指頭圧痕が残る。器壁の厚みは胴部で４㎜～５㎜、底部で６㎜であった。

年代・性格　第42図１は口縁部が欠損しているためはっきりとした年代はわからないが、プロポーションや器壁の厚みなどからみて、松山編年小谷２式（草田編年７期相当）～小谷３式の間におさまるのではないかと思われる。性格については土壙墓であり、規模からみて小児が被葬者であった可能性が考えられる。

ＳＫ07（第41図）

規模・形態　調査区中央部の斜面中腹に立地し、同標高の南側にはＳＩ03が位置している。平面形は南北に長い長方形を呈し、東側の肩が一部外方へと張り出す。規模は1.7m×0.5m、深さ20cmを測る。床面は不安定で、北側に向かって深くなっている。

覆土　土坑内には、茶褐色土が堆積しており、出土遺物はなかった。

年代・性格　形態からみれば土坑墓とも考えられるが、床面の造りが歪であり、出土遺物もないことから、年代・性格ともに断言できない。

ＳＫ08・ＳＫ09・ＳＫ10（第41図）

規模・形態　３基の土坑は、Ⅱ区の最も北端、北向きに傾斜する斜面が部分的になだらかになる地

点で検出された遺構である。すぐ上方は後世の改変により半円状に大きく抉られている。3基は互いに隣接した状態で穿たれており、いずれの土坑からも古墳時代前期頃の器壁の薄い土師器片が出土することから、近い時期に造られたものと考えられる。3基の平面形はやや歪んだ楕円形で、規模はSK08が1.8m×0.8m、深さ20cm、SK09が2.2m×0.9m、深さ30cm、SK10が1.6m×1m、深さ16cmであった。

覆土　SK08には褐色土が、SK09には上層に茶褐色土、下層に赤茶色土が、SK10には茶褐色土がそれぞれ堆積しており、色調は微妙に異なるが土質は類似していた。

年代・性格　土坑からの遺物で図化できるものはなかったが、前述のとおりいずれも古墳時代前期頃の土器が出土しており、遺構もこの年代のものと思われる。性格については不明である。

SK11（第23図）

規模・形態　Ⅱ区の北西隅にあたる標高約34mの緩斜面に立地し、すぐ東には加工段3の溝が所在する。平面形は円形で、規模は1m×0.8m、深さ約20cmを測る。床面はほぼ平らで、断面形は逆台形状を呈する。

覆土　土坑内の覆土は3層に分かれ、上層から淡褐色土、炭化物と焼土が混じる褐色土、淡黄色土の順に堆積していた。

年代・性格　当土坑は、平面的な位置からみて加工段3に付随する施設と考えられ、加工段3と同じ出雲5期（飛鳥Ⅰ併行期）～出雲6期（飛鳥Ⅱ併行期）頃のものであろう。性格については、炭化物や焼土が堆積していた状況から、炉などの用途が考えられる。

SK12（第41図）

規模・形態　Ⅱ区北西部の斜面に位置し、遺構の北側には加工段3やSK11などが位置する。平面形は南北方向に長い長方形で、規模は、2.2m×1.1m、深さ約40cmのしっかりとしたつくりである。北端に近い床面で径0.3m、深さ20cmほどのピットが見つかったが、用途は不明である。

覆土　土坑内には、上層に暗褐色土、下層に淡茶色土と赤褐色土が堆積していた。土層堆積状況からみて、土坑内の中央部が陥没した後に、暗褐色土が流れ込んだのではないかと考えられる。遺物は暗褐色土層から出土した。

SK12出土遺物（第46図3・4）

3は土師器の土製支脚の脚部片で、外面に整形のための強いナデが、内面底部にはヘラ削りが施されている。4は須恵器の長頸壺の胴部で、外面胴部下半には回転ヘラ削りを施し、底部にはヘラ記号が認められた。

年代・性格　出土遺物のうち第46図4は大谷編年長頸壺の1型に相当し、出雲4期（TK209併行期）～6A期（飛鳥Ⅱ併行期）に属するものである。第46図3もこれに伴うものであろう。これらの遺物はいずれも土坑内に流入した土層から出土しているため、土坑に伴うものではないと思われる。したがって、土坑は出雲4期（TK209併行期）～6a期（飛鳥Ⅱ併行期）以前に造られたことは明らかであるが、詳細な年代までは言及できない。性格については、形態や構造などから、土壙墓であることが想定され、坑内中央部の陥没は木棺の腐食などの理由によるものではないかと考えられる。

ＳＫ13（第23図）

規模・形態　Ⅱ区北西隅の西向き斜面に立地し、加工段３のすぐ東側に位置する。平面形は不整な楕円形を示し、一部が２段掘りになっていた。規模は1.2m×0.7m、最深部が約10cmであった。

覆土　土壙内には赤褐色土が堆積しており、須恵器などの遺物が出土した。

ＳＫ13出土遺物（第24図９～11）

４点の出土遺物のうち図化できた３点について報告する。９は須恵器の坏身で、口縁部は内傾するかえりを短く立ち上げ、外面底部はヘラ起こし後ナデ調整を施す。外面には自然釉が付着していた。10は土師器の甕で、やや胴部が張り、口縁はくの字状に屈曲して外方へと開く。外面に縦方向のハケ目、内面頸部以下にヘラ削りが認められた。11は土師器の鉢形土器で、底部は丸底を呈し、直線的に延びた胴部から短く外反して口縁端部に至る。内面頸部以下にヘラ削りを施す。

年代・性格　第24図９は大谷編年坏蓋のＡ７型に相当し、出雲５期（飛鳥Ⅰ併行期）に属する。土師器も概ね同年代のものであろうか。したがって、ＳＫ13の年代は出雲５期（飛鳥Ⅰ併行期）に比定される。これは、近隣の加工段３やＳＫ11の年代とも一致する。性格については、加工段３に関連したものではないかと推測される。

ＳＫ14～ＳＫ53（周辺図　第11図参照）

Ⅱ区中央部の斜面が緩やかになる地点は、後世の改変により地山の一部が削平されて崖に近い段状を呈しており、その辺りにＳＩ02や加工段４のほか、多数の土坑や柱穴が穿たれていた。ここで報告するＳＫ14～ＳＫ19は上段で、ＳＫ20～ＳＫ53は下段で検出された遺構である。遺物が出土した土坑の年代は、弥生中期後半～古墳時代前期初頭と古墳時代後期に大別されるようである。

ＳＫ14（第43図）

規模・形態　遺構の残りが悪いため東側肩が一部途切れており、平面形は不整形である。規模は長さ1.8m～2.2m、深さ25cmを測る。

覆土　上層に暗褐色土、下層に黄褐色砂質土が堆積する。遺物は上面から出土した。

ＳＫ14出土遺物（第46図５）

５は中世土師質土器の坏で、平底の底部から体部が丸みをもって立ち上がる。風化が激しく、内外面ともに調整は不明である。

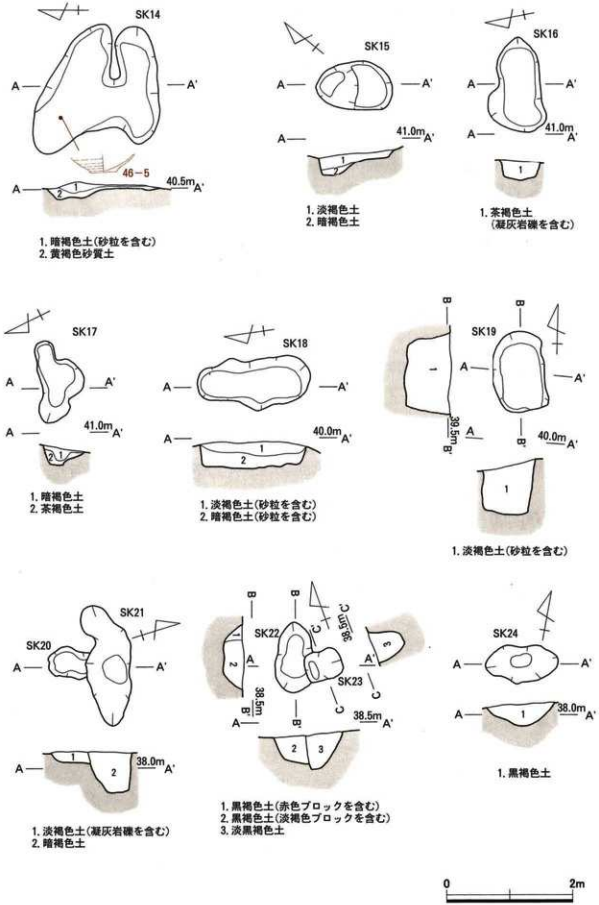
年代・性格　第46図５は供伴する遺物がないためはっきりした年代はわからないが、形態が出雲市渡橋町蔵小路西遺跡の中世土器編年１期に属する坏と類似することから[12]、概ね12世紀後半までのものと思われる。ＳＫ14からはこのほかに遺物が出土していないため、遺構の年代も同時期に比定されよう。性格は不明である。

ＳＫ15（第43図）

規模・形態　規模は1.2m×0.7m、深さ40cmを測り、平面形は楕円形を呈する。床面は一部が２段になっていた。

覆土　上層に淡褐色土、一部低くなった部分に暗褐色土が堆積していた。

年代・性格　出土遺物はないが、２mばかり北側にＳＤ09やＳＤ10が存することから、これらの遺



第43図　ＳＫ14～24実測図（Ｓ＝1/60　遺物Ｓ＝1/9）

構に関連するものかもしれない。

ＳＫ16（43図）

規模・形態　規模は1.5m×0.9m、深さ30cmで、平面形は楕円形、断面は逆台形を呈する。

覆土　地山の礫を含む茶褐色土であった。

年代・性格　ＳＫ15と同じく、近くにＳＤ09やＳＤ10が存することから、これらの遺構に関連する施設と思われる。

ＳＫ17（第43図）

規模・形態　規模は1.2m×0.7m、深さ約30cmで南側がやや広がる不整な楕円形を呈する。

覆土　上層に暗褐色土、下層に茶褐色土が堆積し、上層から遺物が出土した。

年代・性格　図化できなかったが、古墳時代後期頃の土師器が出土しており、遺構の年代もこの頃と考えられる。性格は、遺構の年代と平面的な位置から、ＳＤ09に付属する施設ではないかと思われる。

ＳＫ18（第43図）

規模・形態　規模は1.3m×0.8m、深さ40cmで、平面形は隅丸の長方形である。

覆土　土坑内には、上層に淡褐色土、下層に暗褐色土が堆積していた。

年代・性格　出土遺物はなく、性格も不明である。

ＳＫ19（第43図）

規模・形態　規模は1.4m×0.8m、深さ約90cmを測る。平面形は楕円形を呈し、壁面がほぼ垂直に落ちて、床面はほぼ平坦になっていた。床面からは僅かずつであるが水が湧き出ていた。

覆土　土坑内には砂が混じった淡褐色土が堆積していた。

ＳＫ19出土遺物（第46図６）

土坑からの出土遺物は６のみで、長さ3.5cm、幅1.6cm、重さ8.2ｇを測る黒曜石の剥片である。

年代・性格　出土遺物に乏しく、第46図６が遺構に伴うものかどうかも明らかでないため、年代を断定できない。性格についても、不明である。

ＳＫ20（第43図）

規模・形態　ＳＫ21と切り合っており、北側はこの切り合いにより失われている。残存する規模は、残存長0.6m×幅0.5m、深さ20cmを測る。平面形は楕円形になるだろうか。

覆土　土坑内には暗褐色土が堆積しており、北側がＳＫ21の掘り込みにより途切れる。

年代・性格　ＳＫ21の年代が古墳時代後期のものと考えられるので、これに先立つものと考えられる。性格については不明である。

ＳＫ21（第43図）

規模・形態　前述のとおりＳＫ20を切って穿たれており、規模は1.9m×0.7m、深さ60cmで、かなりしっかりした造りである。

覆土　覆土はＳＫ20の堆積土である暗褐色土を切るように淡褐色土が堆積していた。覆土からは須恵器や土師器の小片が出土した。

年代・性格　出土遺物で図化できるものはなかったが、これらの遺物から年代は概ね古墳時代後期と考えられる。先にも述べたとおり、当遺構の周辺には、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭と古墳時代後期頃の土坑や柱穴が混在していた。柱並びから建物を復元できたものはないが、この辺りに古墳時代後期頃の掘立柱建物跡があった可能性が考えられ、ＳＫ21もこれらに関係した遺構ではなかったかと推測される。

ＳＫ22（第43図）

規模・形態　当遺構はＳＫ23と切り合っており、東側肩の一部が失われている。規模は長さ1.1m×残存幅0.5m、深さ35cmを測る。

覆土　土坑内には、黒褐色系の土が堆積しており、東側はＳＫ23の覆土により切られていた。

年代・性格　遺構内から遺物は出土していないが、隣接する古墳時代後期頃のＳＫ24と覆土が似ていることから、近い時期のものではないかと思われる。建物関連の施設か柱穴であろうか。

ＳＫ23（第43図）

規模・形態　ＳＫ22を切るように穿たれており、規模は0.6m×0.5m、深さ45cmを測る。ＳＫ22の掘り込みよりもやや深い位置まで掘り下げられている。形態は隅の丸い長方形である。

覆土　ＳＫ22の覆土である黒褐色土を切るように淡黒褐色土が堆積していた。出土遺物は認められなかった。

年代・性格　切り合い関係からＳＫ22よりは新しいが、周辺に古墳時代後期以降の土坑があまりみあたらないことから、ＳＫ22とあまり時期差はないものと思われる。性格もＳＫ22と同様のものか。

ＳＫ24（第43図）

規模・形態　規模は1.1m×0.6m、深さ35cmを測り、平面形はやや歪な楕円形である。断面は両端の広がるＵ字形を呈する。

覆土　ＳＫ22の覆土とよく似た、黒褐色土が堆積していた。覆土から土師器片が出土した。

年代・性格　出土した土師器は器壁が厚く、古墳時代後期頃のものと思われるので、遺構の年代も同時期と考えられる。性格については、不明である。

ＳＫ25（第44図）

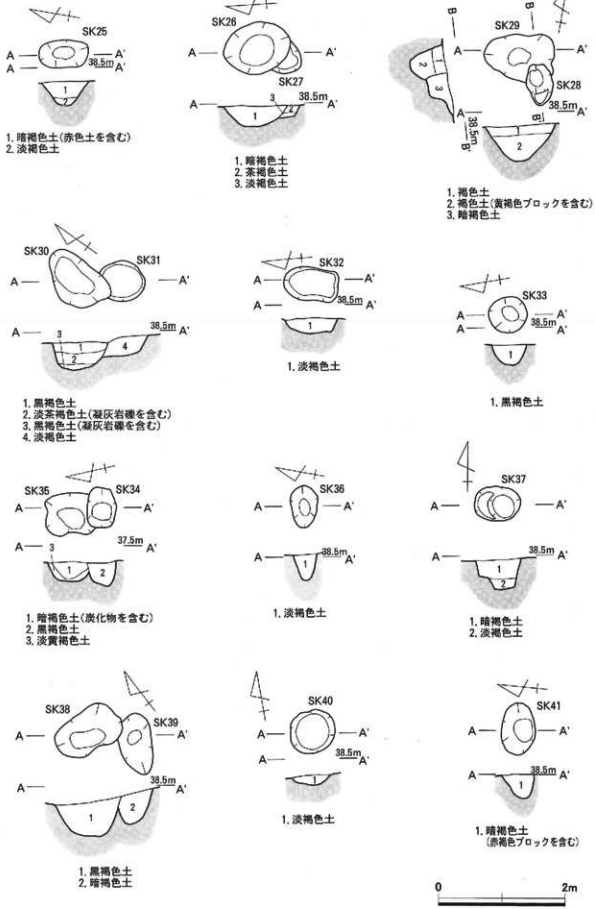
規模・形態　規模は0.8m×0.4m、深さ40cmで、平面形は楕円形であった。

覆土　土坑内の覆土は２層に分かれ、上層に暗褐色土、下層に淡褐色土が堆積していた。

年代・性格　出土遺物がなく、年代・性格ともに不明である。

ＳＫ26（第44図）

規模・形態　当土坑はＳＫ27の北側肩を切って造られたものである。規模は、1.1m×0.8m、深さ32cmを測り、平面形は楕円形に近い。



第44図　ＳＫ25～41実測図（Ｓ＝1/60）

覆土　ＳＫ27内に堆積した覆土を切るように暗褐色土が堆積していた。
年代・性格　遺物はなく、年代・性格ともに不明である。

ＳＫ27（第44図）

規模・形態　ＳＫ26と切り合っており、北側肩が失われている。規模は長さ0.5m×残存幅0.3m、深さ20cmを測る。
覆土　土坑内には上層に茶褐色土が、下層に淡褐色土が堆積していた。
年代・性格　切り合いからＳＫ26に先立つが、年代・性格ともに不明である。

ＳＫ28（第44図）

規模・形態　ＳＫ29の南東端を切るように穿たれており、北側が２段掘りになっている。規模は、0.6m×0.4m、深さ40cmを測る。
覆土　ＳＫ09内に堆積した覆土を切るように暗褐色土が堆積していた。
年代・性格　ＳＫ29が弥生時代中期後半に比定されるため、それ以降のものであることは確かだが、下限を限定できない。性格的には柱穴などの可能性が考えられる。

ＳＫ29（第44図）

規模・形態　前述のとおりＳＫ28と切り合っており、南側肩の一部を欠う。規模は、1.1m×0.7m、深さ55cmを測り、しっかりとした造りの遺構である。平面形は東側がやや広がる楕円形である。
覆土　土坑内には褐色系の土が２層にわたり堆積していた。覆土から弥生土器片が出土している。
ＳＫ29出土遺物（第46図７）

７は弥生土器の口縁部で、頸部から屈曲して、口縁端部を内傾気味に拡張させ、外面には２条の凹線文を施す。
年代・性格　第46図７は松本編年Ⅳ－２様式に相当し、弥生時代中期後半頃のものである。したがってＳＫ29の年代も概ねこの頃と考えられる。性格については不明である。

ＳＫ30（第44図）

規模・形態　ＳＫ31の北西隅を切って穿たれた土坑で、規模は1.1m×0.7m、深さ50cmであった。平面形は南側がやや広がる楕円形を呈する。
覆土　土坑内の覆土は３層に分かれており、第１層に黒褐色土、第２層に淡褐色土、第３層に礫を含む黒褐色土が堆積していた。遺物は第２層から１点出土している。
ＳＫ30出土遺物（第46図８）

８は土師器の複合口縁をもつ壺である。頸部から外反して口縁部に至り、下段突出部から端部に向けて丹び内傾するようである。風化が激しく調整は不明であるが、文様などは認められない。
年代・性格　第46図８は破片のため、はっきりとした年代は不明であるが、概ね松山編年の小谷２式～小谷３式の範囲におさめるのではないかと思われるので、遺構もこの頃のものであろう。性格については不明である。

ＳＫ31（第44図）

規模・形態　当遺構はＳＫ30と切り合っており、北側の一部が失われている。規模は、0.75m×0.6m、深さ30cmで、平面形は円形に近い。

覆土　土坑内には淡褐色土が堆積しており、北側はＳＫ30の覆土により切られていた。

ＳＫ31出土遺物（第46図９～12）

土坑内からは４点の遺物が見つかった。９は土師器壺の頸部で、大きく湾曲して口縁部へとつながる部分である。調整は不明である。10・12は弥生土器の複合口縁をもつ甕で、突出部から上方に反って立ち上がり、口縁の端部を引き延ばして薄く仕上げる。調整は不明である。11は土師器の壺口縁で、復元口径が30cmを越える大型品である。口縁端部を肥厚させて、平坦部を作る。

年代・性格　遺物は10・12と９・11の２時期に分かれる。前者は草田編年５期頃のもので、後者は松山編年小谷２式～小谷３式の範囲におさまるものと考えられる。土坑内には淡褐色土しか堆積していなかったため、厳密で年代差を求められないので、遺構は新しい方の年代である松山編年小谷２式～小谷３式頃のものと考えたい。性格については不明である。

ＳＫ32（第44図）

規模・形態　当遺構はＳＫ29とＳＫ33との中間に位置し、規模は0.9m×0.5m、深さ25cmを測る。平面形は楕円に近い形状である。

覆土　土坑内には淡褐色土が堆積しており、そこから器壁の薄い土師器片が出土している。

年代・性格　前述のとおり、覆土から土師器片が出土しているが、細片のため図化できなかった。ただ、この土器を重視すれば、遺構の年代は概ね弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭頃に比定されると思われる。性格については不明である。

ＳＫ33（第44図）

規模・形態　規模は、0.6m×0.6m、深さ35cmを測る。平面形は円形を呈する。

覆土　土坑内には黒褐色土が堆積しており、出土遺物は認められなかった。

年代・性格　ＳＫ33の覆土は、近接する古墳時代後期頃のＳＫ24やＳＫ34の覆土と似ていることから、これらの遺構と同年代のものではないかと考えられる。性格については不明である。

ＳＫ34（第44図）

規模・形態　ＳＫ35の南側肩を切って穿たれた土坑である。規模は、0.6m×0.4m、深さ40cmで、平面形は楕円形を呈する。

覆土　土坑内には黒褐色土が堆積しており、覆土から土師器片が見つかっている。

年代・性格　遺物は細片のため図化できないが、古墳時代後期頃の土師器と考えられるため、ＳＫ34も同年代の所産と思われる。性格については、平面プランが小規模で掘り込みが深いことから、柱穴として利用されたものかもしれない。

ＳＫ35（第44図）

規模・形態　ＳＫ34と切り合っており、南側の一部が失われている。規模は、残存長0.7m×幅0.7

m、深さ30cmで、平面形は不整な楕円形であったものと想像される。

覆土　土坑内には、上層に炭化物を含む暗褐色土、下層に淡黄褐色土が堆積し、南側はＳＫ35の覆土により切られていた。堆積状況からみて、一度掘り返しが行われたものと考えられる。

ＳＫ35出土遺物（第46図13・14）

土坑内からは２点の遺物が出土した。このうち13は、弥生土器の甕口縁部で、頸部から短く屈曲して口縁端部を上方にやや拡張させ、外面に２条の凹線文を回らせる。14も弥生土器の甕片で、口縁端部を欠くが、13とほぼ同型のものと思われる。

年代・性格　第46図13・14は松本編年Ⅳ－２様式に属すると思われることから、本土坑も同年代のものと推測される。これはⅡ区中央部で検出した土坑の中では最も古い時期のものである。性格については、覆土に炭化物が多く含まれていたため、火を使う施設であった可能性も考えられる。

ＳＫ36（第44図）

規模・形態　規模は0.7m×0.45m、深さ42cmで、平面形は楕円形を呈する。

覆土　土坑内には、淡褐色土が堆積しており、出土遺物は認められなかった。

年代・性格　遺物がなかったため、年代は不明である。性格については、平面プランが小規模で掘り込みが深いことから、柱穴として利用されたものかもしれない。

ＳＫ37（第44図）

規模・形態　ＳＫ37は一部が２段になった土坑で、規模は0.7m×0.5m、深さは１段目が20cm、２段目までが30cmであった。平面形は楕円形を呈する。

覆土　１段目のレベルまで第１層の暗褐色土が、その下層に淡褐色土が堆積していた。堆積状況から掘り返した様子は窺えなかったので、構築時から２段になっていたものと思われる。覆土からは器壁の薄い土師器片が出土した。

年代・性格　前述の土器は、弥生時代後期後半～古墳時代初頭頃に比定されるものと考えられるので、当土坑も同年代であると思われる。性格についてはよくわからないが、しっかりとした掘り込みであることから、柱穴ではないかと推測される。

ＳＫ38（第44図）

規模・形態　ＳＫ38は、ＳＫ39の北西隅を切って穿たれていた。規模は1.1m×0.6m、深さ60cmを測り、平面形はやや不整な楕円形を呈する。かなり深くてしっかりとした印象を受ける。

覆土　土坑内には黒褐色土が堆積しており、そこから須恵器片や土師器片が出土した。

年代・性格　出土遺物は図化できなかったが、年代は概ね古墳時代後期であることから、遺構も同時期のものと思われる。性格は不明であるが、周辺の同年代の遺構に関連した施設であろう。

ＳＫ39（第44図）

規模・形態　ＳＫ38と切り合っており、北西隅が失われている。規模は1.0m×0.5m、深さ40cmを測り、平面形は楕円形を呈する。

覆土　土坑内には暗褐色土が堆積しており、一部をＳＫ38の覆土により切られる。覆土からは土師

器片が出土した。

年代・性格　出土遺物は細片のため図化できなかったが、古墳時代後期の甕片と思われることから、土坑も同年代のものと思われる。このことから、ＳＫ39の廃絶後、あまり時期を置かずにＳＫ38が穿たれたと考えられる。性格についても、ＳＫ38と同様のものではないだろうか。

ＳＫ40（第44図）

規模・形態　ＳＫ38のすぐ北側に穿たれた土坑である。規模は0.65m×0.65m、深さ20cmと掘り込みが浅く、平面形は円形を呈する。

覆土　土坑内には淡褐色土が堆積しており、そこから器壁の薄い土師器が出土した。

年代・性格　遺物で図化できたものはなかったが、上器の様子から概ね弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭頃のものと思われる。したがって、遺構も同年代のものと考えられる。性格については不明である。

ＳＫ41（第44図）

規模・形態　規模は0.8m×0.5m、深さ40cmを測り、平面形は楕円形を呈する。

覆土　土坑内には暗褐色土が堆積していた。遺物は出土していない。山の水脈の通り道に位置しているため、掘り下げ後、土坑内には絶えず水が湧き出ていた。

年代・性格　年代・性格ともに不明である。

ＳＫ42（第45図）

規模・形態　規模は0.6m×0.5m、深さ35cmを測る。平面形は円形を呈し、床面は南へ向かって低くなっている。掘り下げ後、土坑内には絶えず水が湧き出ていた。

覆土　上層に暗褐色土、下層に赤黄褐色砂質土が堆積していた。いずれも流れ込みによって堆積したものと思われる。

年代・性格　出土遺物がないため、年代・性格ともに不明である。

ＳＫ43（第45図）

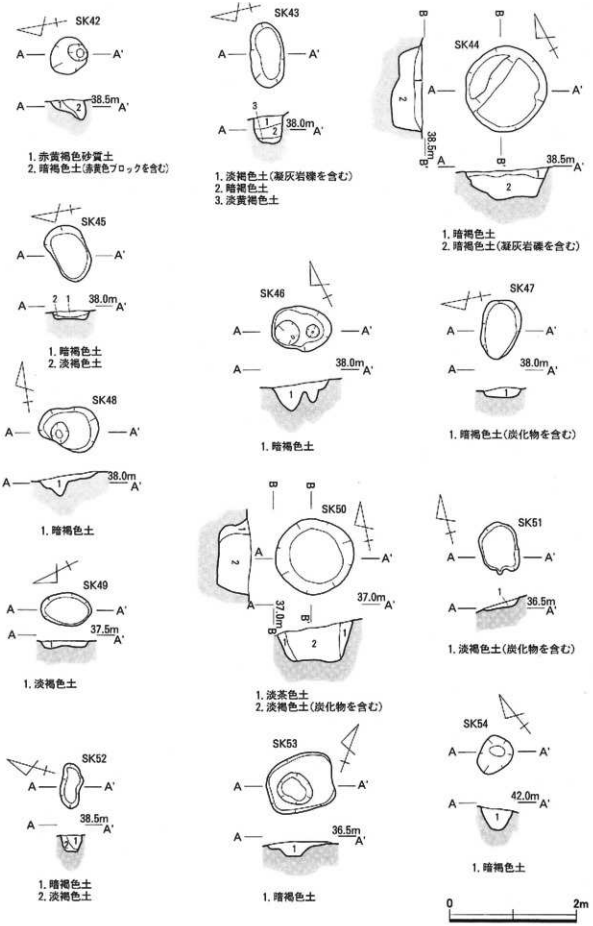
規模・形態　規模は1.0m×0.5m、深さ42cmを測り、掘り込みはかなり深い。平面形は細長の楕円形である。

覆土　土坑内には覆土が３層に分かれて堆積しており、上層が淡褐色土、中層が暗褐色土、下層が淡黄褐色土であった。中層から須恵器片が出土している。ＳＫ41・ＳＫ42と同様に、土坑内には絶えず水が湧き出ていた。

年代・性格　遺物は図化できなかったが、出土した須恵器からみて、当土坑の年代は概ね古墳時代後期であると考えられる。性格については不明である。

ＳＫ44（第45図）

規模・形態　ＳＫ44の規模は1.3m×1.3m、深さ50cmを測り、平面形は円形である。床面の一部が２段になっていた。



第45図　ＳＫ42～54実測図（Ｓ＝1/60）

覆土　土坑内には暗褐色系の土が2層に分かれて堆積しており、下層には地山の土である凝灰岩質の小塊が含まれていた。床面の地山は、谷の土質に近い暗灰色粘質土に変化しており、この辺りが山部と谷部の境のようである。ＳＫ41～ＳＫ43と同様に、土坑内には絶えず水が湧き出ていた。

年代・性格　年代・性格ともに不明であるが、平面プランが円形のしっかりとした土坑であり、内部に絶えず水が湧いていたことから、井戸であった可能性も考えられる。

ＳＫ45（第45図）

規模・形態　当土坑は、ＳＤ15の北東側隅を切って造られた土坑であり、規模は0.9m×0.55m、深さ15cmを測る。平面形は楕円形を呈する。

覆土　土坑内には褐色系の土が2層に分かれて堆積していた。

年代・性格　年代的には、切り合いからＳＤ15よりも新しいことまではわかるが、それ以上は言及できない。性格についても不明である。

ＳＫ46（第45図）

規模・形態　当土坑もＳＫ45と同様にＳＤ46を切って穿たれていた。規模は1.0m×0.7m、最深部15cmを測り、平面形は楕円状を呈する。床面には2か所の落ち込みがあるため、安定性を欠く。

覆土　土坑内には暗褐色土が堆積しており、落ち込み部分も同様の覆土であった。

ＳＫ46出土遺物（第46図15）

15は土坑内唯一の出土遺物である。器種は鼓形器台で、風化が激しく調整等が不明のため、一応受部として図化した。外面の突出部も摩滅して丸くなっていた。

年代・性格　第46図15だけで年代を判断するのは難しいが、鼓形器台は現在のところ松山編年小谷3式まで続く器種であると考えられることから[註]、土坑の年代は小谷3式を下限とする時期としてもよいのではないだろうか。したがって、ＳＫ46と切り合うＳＤ15はそれよりも古い年代の遺構であると言えよう。

ＳＫ47（第45図）

規模・形態　ＳＫ46のすぐ西側に位置しており、規模は1.0m×0.6m、深さ15cmを測る。平面形は楕円形を呈する。

覆土　土坑内には、炭化物を含む暗褐色土が堆積していた。覆土からは土師器が1点出土している。

ＳＫ47出土遺物（第46図16）

16は土師器の高坏であるが、脚部が分厚い作りになっており、坏部は丸みをもって立ち上がるようである。脚部内面にはヘラ削り調整が施されていた。

年代・性格　第46図16は、平成11年度調査区加工段1から出土した土師器高坏とよく似た形態を示している。加工段1出土の高坏は、坏部の口径が大きくて（17.0cm～18.6cm）、浅い形状である。脚部は高くて底径も大きいといった特徴を備えており、大谷編年4期（ＴＫ209併行期）～5期（飛鳥Ⅰ併行期）の須恵器と併行する。したがって、本土坑も同年代のものと考えてよいのではないだろうか。性格については、覆土に炭化物を含む点から、炉などの用途が想像される。

ＳＫ48（第45図）

規模・形態　規模は0.9m×0.5m、最深部で30cmを測り、平面形は楕円形を呈する。床面の一部は2段になっている。

覆土　土坑内には、暗褐色土が堆積していた。

年代・性格　出土遺物がないため、年代・性格ともに不明である。

ＳＫ49（第45図）

規模・形態　ＳＫ49は加工段４の覆土に穿たれた土坑で、規模は0.8m×0.5m、深さ10cmを測る。平面形は楕円形を示す。

覆土　土坑内には、淡褐色土が堆積しており、そこから器壁の薄い土師器片が少数出土した。

年代・性格　図化できなかったが、土師器は弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭頃のものと思われるので、遺構も同年代のものではないかと思われる。性格については不明である。

ＳＫ50（第45図）

規模・形態　ＳＫ50は加工段４のすぐ西側に穿たれており、規模は1.2m×1.2m、深さ60cmを測る。平面形は円形で、壁面はほぼ垂直に掘り下げられている。

覆土　土坑内の壁際に淡褐色土が堆積し、その内部に炭化物を含む淡茶色土が堆積していた。当遺構周辺も山部と谷部の境にあたるため水が絶えず湧く場所である。

ＳＫ50出土遺物（第46図17）

17は須恵器高坏で、外面に稜線などがみられない浅くて単純な坏部を有するタイプのものである。

年代・性格　第46図17は脚部を欠くが、坏部の特徴から大谷編年低脚無蓋高坏のＡ５型以降のものと考えられるので、土坑の年代は出雲５期（飛鳥Ⅰ併行期）以降に位置づけられるだろう。性格については、形状や覆土の状況から井戸など用途が考えられ、隣接する加工段４の付属施設だったのではないかと推測される。

ＳＫ51（第45図）

規模・形態　ＳＫ51は加工段４を切って穿たれた土坑であり、規模は0.75m×0.6m、深さ15cmである。平面形は楕円形を呈する。

覆土　土坑内には炭化物を含む淡褐色土が堆積していた。

年代・性格　切り合い関係から、加工段４よりも年代が新しい遺構であることはわかるが、出土遺物がないために下限は不明である。性格については、掘り込みが浅く炭化物を含むことから、火を焚いた跡ではないかと推測される。

ＳＫ52（第45図）

規模・形態　ＳＫ52はＳＫ40のすぐ東側に位置し、規模は0.7m×0.4m、深さ30cmを測る。平面形は細長い楕円形を呈する。

覆土　土坑内には褐色系の土が２層に分かれて堆積しており、土師器片が少数出土している。

年代・性格　出土した土師器片は図化できなかったが、古墳時代後期のものと思われる。これを重

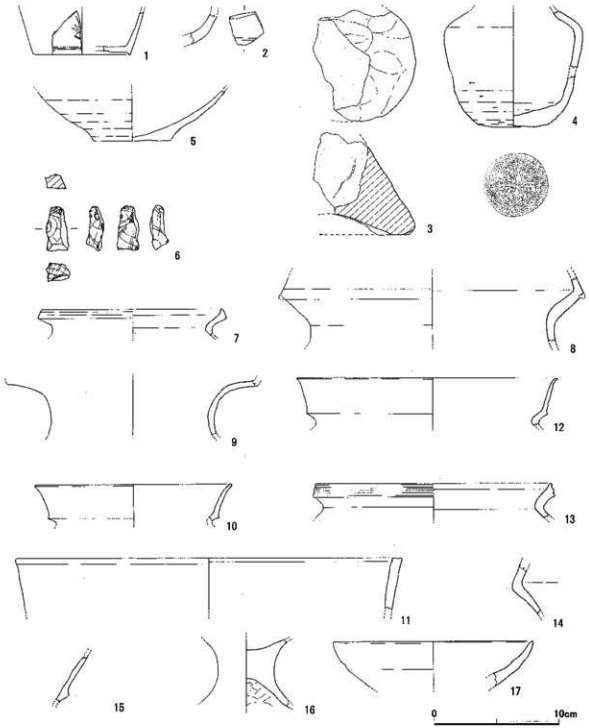
視すればＳＫ52も同年代であると考えられる。性格については不明である。

ＳＫ53（第45図）

規模・形態　ＳＫ50の北側に位置し、攪乱により北端の一部を失う。規模は1.1m×0.9m、深さ25cmで、平面形は楕円形に近い。床面中央は２段になっている。

覆土　土坑内には暗褐色土が堆積していた。覆土からは器壁の薄い土師器片が出土した。

年代・性格　出土遺物は数点で、図化できるものはなかったが、弥生時代後期後半～古墳時代前期



第46図　Ⅱ区その他のＳＫ出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）

初頭頃のものと思われるので、ＳＫ53も同じ頃の所産であろう。性格については不明である。

ＳＫ54（第45図）

規模・形態　ＳＫ54は、Ⅱ区北東側でＳＤ05の続きを追うために拡張した調査区から検出された土坑である。規模は0.6m×0.5m、深さ25cmを測り、平面形は楕円形を呈する。

覆土　土坑内には、暗褐色土が堆積しており、遺物は認められなかった。

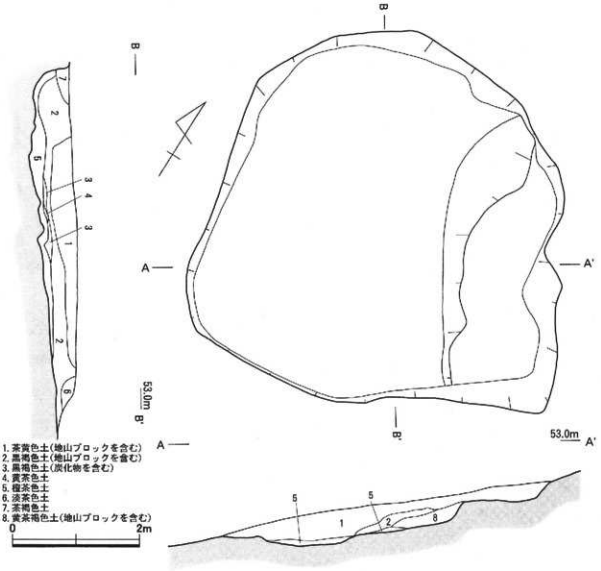
年代・性格　年代・性格ともに不明である。

(4) 性格不明遺構

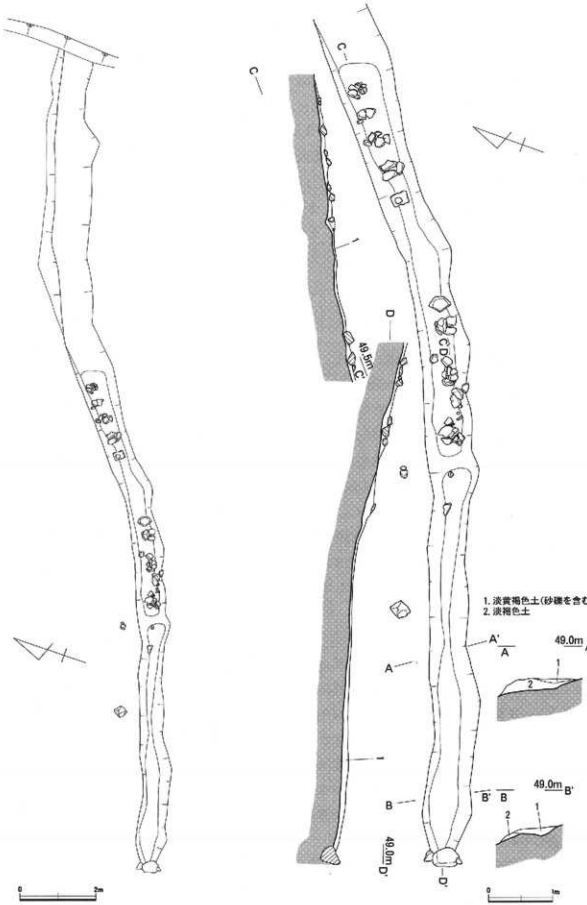
Ⅱ区南側で２か所の性格不明遺構を確認した。以下、ＳＸ01とＳＸ03について報告するが、遺構番号が飛び番になっているのは、検出順に遺構番号を付けた都合からである。

ＳＸ01（第47図）

規模・形態　ＳＤ01はⅡ区南側の尾根近くに所在し、標高は52m～53mを測る。遺構の規模は、東



第47図　ＳＸ01実測図（Ｓ＝1/60）



第48図　ＳＸ03実測図　左：全体図（Ｓ＝1/100）　右：石列検出状況（Ｓ＝1/60）

西最大幅5.8m、南北最大幅6m、深さ50cmで、平面形は南側がやや広い不整形である。床面の一部は2段になっている。

覆土　覆土は8層に分かれるが、堆積状況から2回の掘り返しが認められる。第1層・第6層・第7層が上層で、第2層・第3層が中層、第5層・第8層が下層の堆積土であり、2回目の掘り返し時に東側の一段高い場所が拡張されたことがわかる。また、中層の第3層には炭化物が多く含まれていたことから、最初の掘り返しを行った後に、中層面で火が焚かれた様子が窺えた。第3層を除く覆土は、周辺の地山の土であると思われるので、使用した都度、意図的に埋め戻されたのではないかと推測される。

年代・性格　出土遺物がないため明確な年代は不明であるが、当遺跡で検出した弥生時代～古墳時代にかけての他の遺構の覆土と比較すると、かなり新しい印象を受ける。また、第3層で検出した炭化物もそれほど風化していなかったので、近世以降、かなり新しい年代のものではないだろうか。性格については、火を焚いた痕跡があることから、何かを焼却廃棄するための施設だったのかもしれない。

ＳＸ03（第48図）

規模・形態　本遺構はⅡ区の南端に位置し、標高49m～53mまで細長く続く遺構である。標高53mの南側の堀方が、前述のＳＫ01の西側を切って造られているのを確認した。また、標高49m～50mの位置には、床面に敷石が並べられていた。遺構の規模は、長さが22mで、幅は南側斜面までの掘方を入れて約2m、床面で0.5m～0.6mを測る。

覆土　土層堆積状況をみると、ＳＸ03は地山面を整形した後に、0.5m～1m程の幅で褐色系の土を盛っており、その際に補強のための敷石が置かれたものと思われる。遺構からの出土遺物は認められなかった。

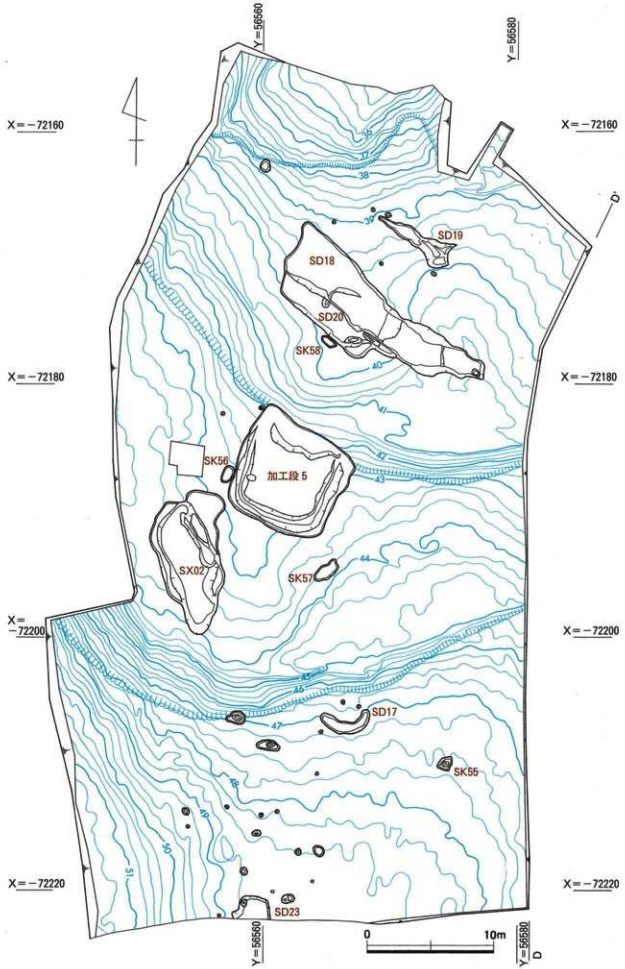
年代・性格　前述のとおりＳＸ03は、18世紀後半頃に位置づけられるＳＫ01を切って造られていることから、それよりも新しい年代のものであることがわかるが、下限は限定できなかった。性格については、斜面を歩きやすいように整地していることから、山へ進入するための道跡と考えられる。

第4節　Ⅲ区の調査

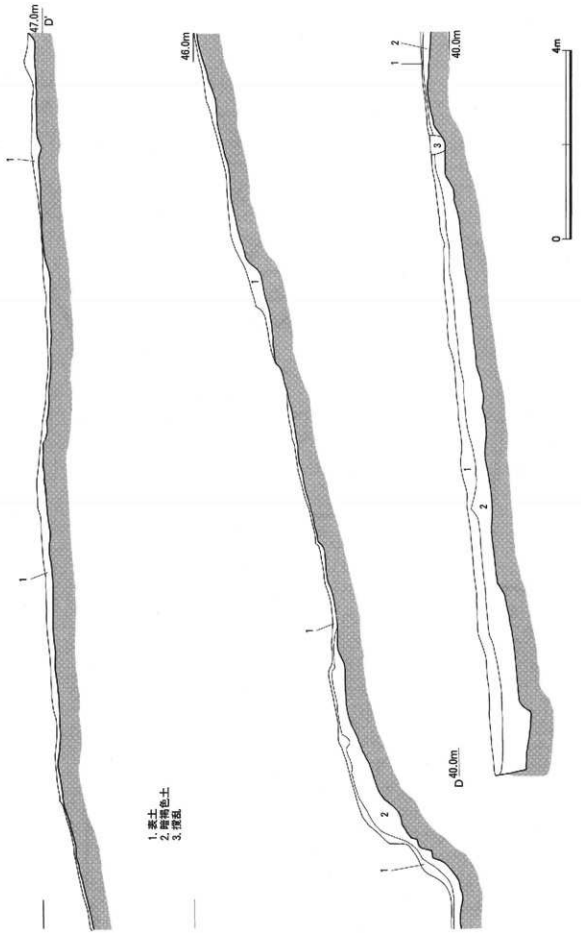
Ⅲ区は、丘陵尾根の東側に存し、標高36m～50m程の南から北へと緩やかに傾斜する斜面を中心とした調査区である。調査区の南側は平成13年度調査区のⅣ区と接する位置関係にある。平成11年度のトレンチ調査では、須恵器や土師器などが見つかっている。

調査前のⅢ区は、後世の改変によって大きく4つの段に分かれており、1～3段目は平坦に近い緩斜面で、遺構・遺物を検出したが、標高38m以下の4段目は、急激に傾斜しており、斜面の所々から山水が湧き出し、常に地面が濡れている状況で、遺構も認められなかった。また、これらの段を画する部分は崖状になっており、各々の崖の高さは0.5m～1.5mで、崩落防止のための竹柵や石積みが行われているところもあった。

遺構は1段目～3段目までの個所で、加工段を1、溝状遺構4、土坑4、性格不明遺構1を検出した（第49図）。調査区の南側では、平成13年度に検出したＳＤ23の北端部分を検出したが、これについては第5節のＳＤ23の項であわせて報告する。出土遺物については、長期遺跡全体を通して言えることであるが、遺構検出数に比べて、遺物の出土量が乏しい印象を受け、Ⅲ区でも同様の状



第49図　Ⅲ区遺構配置図（S＝1/300）



第50図　Ⅲ区南北土層図（S＝1/80）

況であった。

調査区東側の上層堆積状況をみると（第50図）、斜面を利用して段を造るために谷側に第2層が盛られており、さらに北側の斜面にも地面を平らに均すために、30cm～60cmの厚さで第2層が堆積していた。以下、Ⅲ区で検出した遺構、遺物について報告する。

(1) 加工段

加工段5（第51図）

規模・形態 加工段5はⅢ区2段目の中央部に位置し、斜面が緩やかで、比較的広い平坦面が確保された場所である。ただ、遺構の北端は後世の改変により遺構面が消失してしまったようである。このため、全容は明らかではないが、北側を除く3方に溝を回らした方形プランの平坦面であることを確認した。溝は、幅が上端で0.9m～1.2m、下端で0.3m～0.6m、深さが50cm～60cmで、断面形は逆台形を呈する。北側にも溝が続くのかどうかは確認できなかった。中央部の平坦面には盛り土が施されており、その下層では弥生土器を含んだ遺物包含層を確認した。平坦面の規模は、東西が5.6m～6m、南北は盛り土が残っていたところまでが5.0m、北側の堀方までが約7mあった。東西の溝を含んだ規模は、7.4m～7.6mを測る。盛り土の上面及び地山面で精査を行ったが、遺構らしき形跡は認められなかった。東側溝が途切れる辺りからは、須恵器や赤色顔料を塗布した土師器が出土しており、また、平坦面の盛り土の上面からは鉄鏃が見つかった。この他、盛り土内には弥生土器も混入していたが、ほとんどが細片であった。

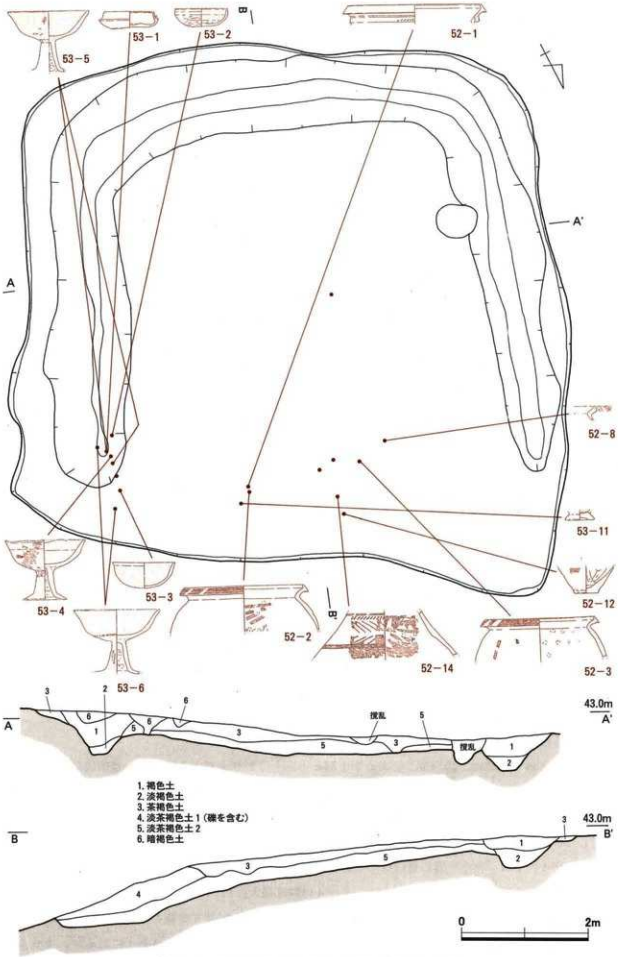
これらの状況から、本来、この場所には盛り土した墳丘があり、溝はこれに伴う周溝だったのではないかと推測される。溝から見つかった土器類は、墳丘築成に用いられたか、副葬品としておさめられたもので、後世に溝内に流出してしまったものとみられる。また、鉄鏃は主体部におさめられていたものが、盛り土に混入したものと思われる。上記の規模から、およそ1片が6m程度の周溝を伴う小規模な方墳だったのではないだろうか。

覆土 周溝内の覆土をみると、上層に褐色土、下層に淡褐色土が認められ、下層を一度掘り返した後で、上層が堆積した状況が窺えた。また、盛り土である第3層茶褐色土との切り合いから、盛り土を行った後、溝が穿たれたものと考えられる。第3層の下には茶褐色系の土（第4層、第5層）が認められ、これらは盛り土が行われる前から堆積していた土層と思われる。第6層は、第3層が削平された後に堆積した土層であろう。

加工段5出土遺物（第52図・第53図）

前述のとおり、遺物は溝内覆土である第1層と平坦面の盛り土である第3層、遺物包含層の第4層から出土した。第52図と第53図9～11は第4層から、第53図1～6は東側溝の第1層から、第53図8は平坦面の第3層上面からの遺物である。この他、第3層からは弥生土器がビニール3袋分出土したが、細片のため図化できなかった。

第52図1～8は、弥生土器の甕口縁部である。1は口縁端部を上下に拡張させて内傾するもので、頸部外面に刻み目を施した突帯を回らす。2～4は胴部最大径がかなり上位にあって強く張り出し、口縁端部は上下に拡張して内傾する。端部外面には3～4条の凹線文が施され、4の頸部には刻み目を入れた突帯を貼り付けた痕跡があった。5・6は胴部最大径が中位よりも上にあるが、2～4に比べると胴部の張りが小さい。口縁部は器厚が厚くなり、端部は主に下方向に拡張して内傾する。



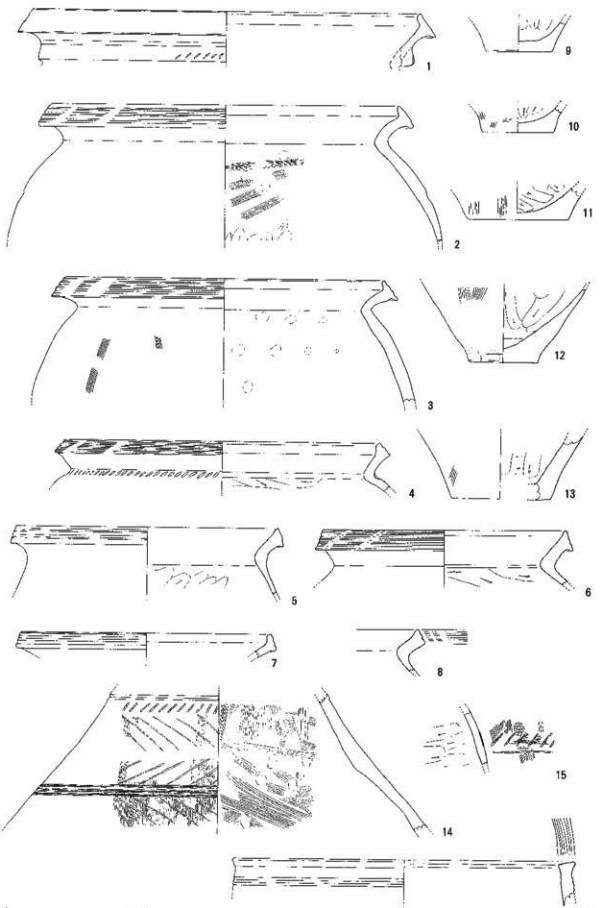
第51図　加工段5実測図（S＝1/60　遺物S＝1/9）

端部外面には4条の凹線文を回らす。内面は頸部以下にヘラ削りを施す。7・8も口縁端部をやや拡張させ、凹線文を施すものである。9～13は弥生土器の底部資料である。9～11・13は比較的薄手でしっかりとした平底状を呈する資料である。内面にはヘラ削りを施しており、9以外は外面にハケ目が残る。12は胴部から細くすぼまって平底になるもので、外面にハケ目と指頭圧痕、内面にヘラ削りが施されていた。14は弥生土器の壺肩部で、なだらかに張り出す長胴系のものと思われる。外面はヘラ描沈線文や刺突文、綾杉文などでにぎやかに飾られ、内面にはハケ目調整を施す。15は甕の肩部で、外面に押引き刺突文と沈線文を施す。16は弥生土器の直口口縁を有する鉢で、肥厚させた口縁端部と側面に3条の凹線文を施す。

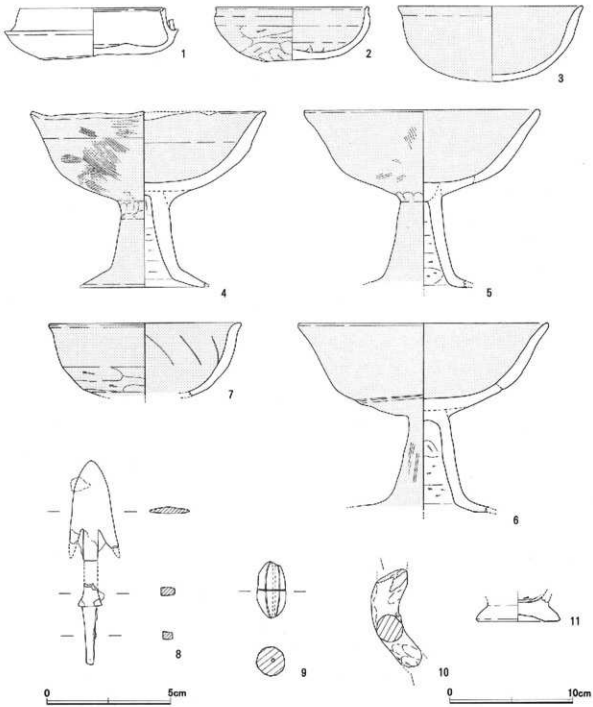
53図1は須恵器の坏身で、やや内傾して立ち上がる口縁端部に明瞭な段を有し、外面底部にわずかな静止ヘラ削りが施されている。受け部に焼成時に付着した蓋の破片が残る。2～7は赤色顔料を塗布した土師器である。2は坏で、底部から丸みをもって立ち上がり、口縁端部で短く外反して、外面に稜を付ける。外面底部には手持ちによるヘラ削りが施されている。3も坏で、やや丸底気味の底部から丸みをもって立ち上がり、口縁端部を外側へ短く引き延ばす。7も3と同タイプの坏であるが、外面底部に手持ちのヘラ削り、内面にヘラ状工具による暗文がみられる。4～6は高坏である。坏部はいずれも底部から外傾して延び、口縁端部付近をわずかに外傾させる形態を示す。5と6は底部と口縁部を別々に作った後で接合しており、そのため6は接合部が段状を呈し外面に稜を作るが、5は接合面をきれいに均しているために段がなく、外面で接合個所を見つけるのは困難である。また、坏部と脚部の接合方法をみると、4と6は坏部と脚部を別々に作り、両者の接合面に粘土紐を巻きつけて固定するもので、5は脚部の中央部に肥厚した粘土を充填するものある。脚内上部に刺突痕を残すものは認められなかった。8は鉄製の長頸鏃で、頸茎の一部を失っている。鏃身は逆刺柳葉式であり、篦被は台形を呈し、茎との境に稜を付ける。9は有溝管状土錘で、表面の縦方向に5本、横方向に1本の沈線が施され、断面中央部に径3㎜の孔を穿つ。10は把手で、ヘラ状工具により表面を調整している。把手が取り付けられていた器種は不明である。11は弥生土器の高台状底部で、底部が上げ底になっている。

年代　まず、第4層からの一括遺物について考察してみると、第52図の1～4と7・8・16は松本編年Ⅳ－2様式に該当するものと思われる。第52図5・6は、口縁の立ち上がりがやや直立気味になり、頸部以下にヘラ削りを施すことなどから、松本編年Ⅴ－1様式に分類しておく。第52図15も同時期のものであろうか。第52図14の壺は、外面に多彩な装飾が施されていることから、松本編年Ⅳ－1様式まで遡れるかもしれない。したがって、第4層の出土土器の年代は、松本編年のⅣ－1様式～Ⅴ－1様式におさまることから、その他の遺物も概ね同年代のものと考えてよいだろう。

次に周溝内及び第3層からの出土遺物をみると、第53図1は大谷編年蓋坏のA2a型に相当することから、出雲2期（TK10併行期）のものと考えられる。第53図2～7の土師器のうち、4～6は松山氏の高坏形式分類の高坏B接続法（β）（第53図5）と高坏B接続法（γ）（第53図4・6）に該当し[15]、松山編年の大敷Ⅰ層式（大谷編年出雲1期併行期）に位置づけられる。第53図3・7の坏も同じ時期のものである。第53図8の鉄鏃は、5世紀後半頃に盛行するもので、古墳の副葬品としては6世紀代までみられる[16]。上記の須恵器と土師器から、概ね大谷編年出雲1期～出雲2期の年代幅が想定され、鉄鏃も土器の年代と調和的であるが、須恵器の年代を重視すれば、当遺構は大谷編年出雲2期に比定される。



第52図　加工段５出土遺物実測図１（S＝1/3）



第53図　加工段５出土遺物実測図２（Ｓ＝1/3　８のみＳ＝2/3）

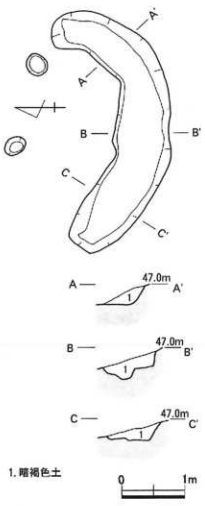
(2) 溝状遺構

ＳＤ17（第54図）

規模・形態　ＳＤ17は、Ⅲ区１段目の中央部分に位置し、標高は47mを測る。溝の形状は南へ弧を描くように造られており、弧の内側で柱穴を２穴検出したが、本遺構と直接関わりがあるものなのかはわからない。規模は、長さが約4.3m、幅が0.6m～1.0m、深さ25cm～30cmである。床面は凸凹している部分が多く、西側から東側へわずかに傾斜する。

覆土　覆土は遺構全体に暗褐色土が堆積しており、遺物は弥生土器又は土師器と思われる小片が10点あまり出土している。

年代・性格　遺物は細片のため図化できるものはなかった。このため、年代を判断する資料に乏しいが、土器が古墳時代前期を降るものはないと思われるので、おおよそ古墳時代前期以前におさまるものと考えられる。性格についても定かではないが、弧の内側の柱穴がＳＤ17に伴うものであれば、円形の竪穴住居跡の可能性も考えられよう。



第54図　ＳＤ17実測図
（Ｓ＝1/60）

ＳＤ19（第55図）

規模・形態　遺構の切り合いを説明する都合から、ＳＤ18に先だってＳＤ19の報告を行う。当溝はⅢ区３段目のなだらかな斜面に位置し、南側に隣接するＳＤ18と平行に穿たれている。平面形はかなり歪で、西端では幅が0.4ｍほどしかないが、東へ行くほど両端が広がっており、２ｍ地点で幅約0.9ｍ、東端の6.5ｍ地点では幅約2.1ｍに広がり、左右の端がやや東へ延びて閉じる。深さも、西端に近いＡ－Ａ'ラインでは約20㎝であるが、東へ行くほど床面が下がっており、遺物が出土したＢ－Ｂ'ラインでは約80㎝あった。

覆土　溝内には上層に暗褐色土、中層に淡褐色土、下層に茶褐色土が堆積しており、Ｂ－Ｂ'ラインの堆積状況からは２回の掘り返しが行われているようにみえた。遺物は床面付近から出土している。

ＳＤ19出土遺物（第57図６～10）

出土遺物はいずれも土師器の坏であった。検出時には、３点が底部を上に向けて積み重ねられており、２点はその横で口縁を上にした状態で見つかった。このうち、６は平底の形状をわずかに留めており、内湾しながら立ち上がり、最大径よりも内側まで延びて、端部を丸く仕上げる。外面底部には手持ちのヘラ削りを施す。７～９は底部が丸底気味になっており、坏部は６と同じく内湾して立ち上がる形状を示す。７・９は外面底部に手持ちのヘラ削りが認められた。10は底部を失うが、坏部の立ち上がりのカーブが他の４点よりも緩く、口縁部もまっすぐ延びて終わる。６～９の内外面には赤色顔料が塗布されていた。

年代・性格　出土遺物が土師器の坏しかないため、やや年代幅を考えておく必要があると思われるので、概ね松山編年の夫敷中層式（初期須恵器）～夫敷上層式（大谷編年出雲１期併行期）頃に位置づけておきたい。性格については、出土遺物のほとんどが赤色顔料を塗布した土師器であり、それが意図的に安置されていた様子から、祭祀的な行為が行われたのではないかと想像される。

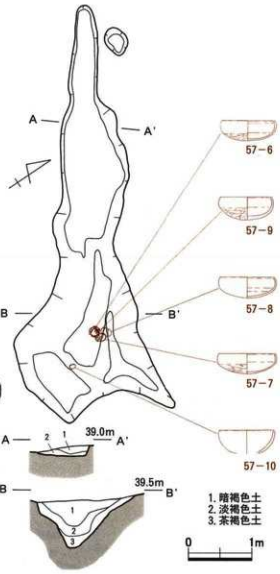
ＳＤ18・ＳＤ20（第56図）

規模・形態　ＳＤ18・ＳＤ20は、Ⅲ区３段目の中央部よりもやや北側に位置しており、東西方向に長く延びる形状を示す。２つの遺構関係をみると、ＳＤ20の北側を切ってＳＤ18が穿たれていることがわかる。このうち、ＳＤ18の規模は、長さが18.0ｍ、幅が1.4ｍ～4.2ｍ、深さ60㎝～70㎝を測

るかなり大型の溝であるが、東・西の端とも自然消滅するように途切れており、それ以上続く様子は窺えなかった。断面形は逆台形状に近い形状をしており、床面は東から西へ傾斜し、途中にある2か所の段でかなりの高低差が付いており、東端と西端では約1mの差があった。

SD20は、北側がSD18と切り合っており、残存する規模は長さが11.0m、幅0.6m～2.0m、深さ20cm～70cmで、中央部が深く東西が浅い掘り込みであった。また、溝の東端はSD18の堀方により失われているように思えるが、西端はSD18とほぼ同位置で自然に途切れていた。

覆土　SD18の基本層位は、上層に暗褐色土、中層に黄褐色土1、下層に淡茶褐色土の3層が堆積しており、この状況から2回の掘り返しが確認でき、段々と溝幅が狭くなり、深さも浅くなっていくようである。一方、SD20では上層に第5層、中層に第6層・第7層、下層に第8層が堆積しており、第5層を切っている第4層は溝が廃棄された後に堆積したものと思われる。西端と東端では上層の茶褐色土2しか認められないが、C－C'ラインには上・中・下層が堆積していた。このことから、SD20は当初1m程の深さに穿たれていたが、何度か堆積を繰り返すうちにしだいに浅くなっていったものと考えられる。両遺構とも、遺物は各層から出土しているが、割合としては下層の方が多かった。

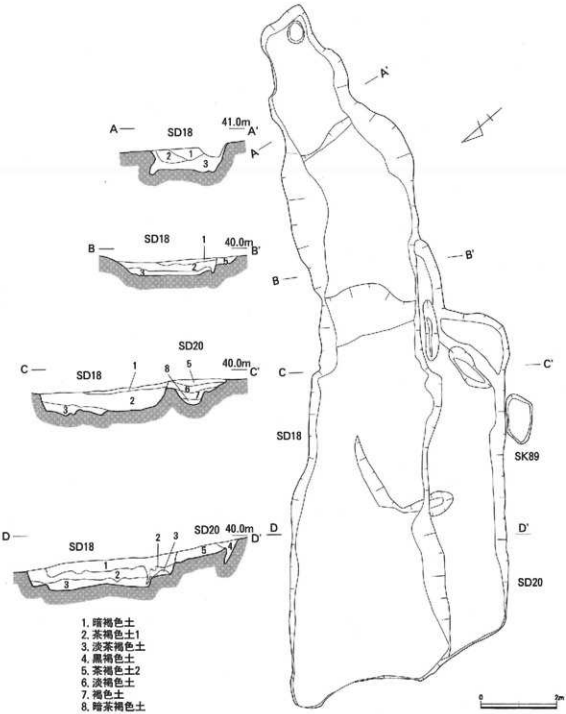


第55図　SD19実測図（S＝1/60 遺物S＝1/9）

SD18・SD20出土遺物（第57図1～5・11～13）

SD18では第2層を中心に、SD20では第6層・第7層を中心に弥生土器片が多く出土したが、細片が多く図化できたのは8点のみである。1～5はいずれもSD18第2層からの出土遺物で、須恵器は図示した2点以外出土していない。1・2は弥生土器の甕口縁部で、1はくの字状に開いた口縁の端部が上下にわずかに拡張して内傾するもので、端部外面に2条の凹線文を施す。内面頸部にかすかにヘラ削りが残る。2は、胴部がやや張り、くの字状に開く口縁端部をわずかに拡張させており、内面頸部以下にヘラ削りを施す。3は弥生土器の底部資料で、比較的薄手でしっかりとした平底状を呈する。内面をヘラ削りする。4・5は須恵器の坏蓋である。4は、外面天井部に輪状つまみを付け、つまみ周辺には回転ナデを施す。5は口縁部内面にかえりが付かず、口縁端部が垂直に下方へ折れ曲がるタイプのものである。

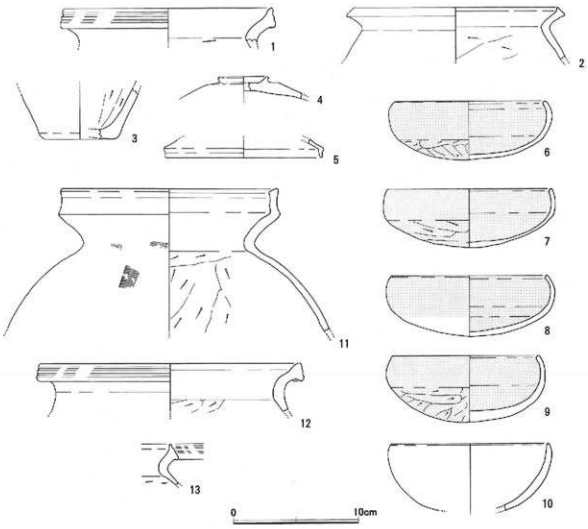
11～13はSD20の中層から出土した遺物である。11は退化した複合口縁を有する土師器の甕で、胴部最大径が中位にあり、口縁部は器壁が厚く、やや内湾しながら短く立ち上がる。外面にハケ目、



第56図　ＳＤ18・ＳＤ20実測図（Ｓ＝1/100）

内面頸部以下にヘラ削りを施す。12・13は弥生土器の甕口縁部である。12は１と同様の形態を示しており、口縁端部外面に２条の凹線文が回っている。13も口縁端部を短く引き延ばしており、外面に２条の凹線文が残る。

年代・性格　まず、ＳＤ18から出土した第57図１～５をみると、１は松本編年Ⅴ－１様式、２はⅣ－２～Ⅴ－１様式に相当する。３もこの間におさまるものであろう。４・５は破片なので糸切り技法の有無が明らかでないため、年代を決めるのは難しい。ただ、形態の特徴からは、大谷編年坏蓋のＢ２型、出雲国庁編年の第２形式～第３形式の蓋Ｄに該当すると思われるので、概ね７世紀末～８



第57図　ＳＤ18～20出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）

世紀初め頃のものとしておきたい。

前述のように、ＳＤ18の出土遺物は弥生土器片が多いが、須恵器が認められることから、遺構の年代はこれを重視して、一応７世紀末～８世紀初め頃と想定しておく。

次にＳＤ20出土の57図11～13をみると、11は松山編年の大東式に属するものと思われる。11・12は松本編年のＶ－１様式に相当する。ＳＤ20も出土遺物は弥生土器が多いが、11の甕を重視すれば大東式に比定される遺構であろう。

性格については、ＳＤ18はかなり大型で掘り込みもしっかりした溝であるが、東端、西端ともに途切れており、それ以上続く様子は窺えなかった。このため、あまり排水路的な機能があったとは思えず、どちらかといえば、地域を画するための意味合いが強かったのではないかと推測される。機能的には、山城のごとく「堀切」的な防御施設や一定の地域を「特別なゾーン」として区別する役割などが考えられるが、周辺に同年代の遺構が認められないため言及するには至らなかった。

ＳＤ20はＳＤ18のかなりの部分を切られており、全容が明らかではないため、性格は不明である。

(3) 土坑

ＳＫ55（第58図）

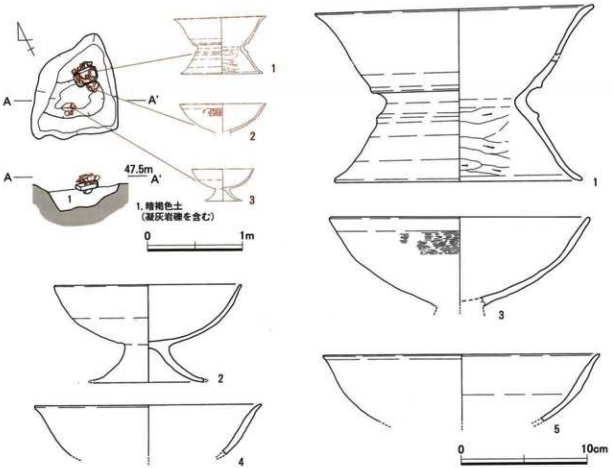
規模・形態　ＳＤ55は、Ⅲ区１段目の南東隅近くの平坦面に位置する土坑である。規模は1.2m×0.85m、深さが25cmを測る。平面形は南側が広くて北側がすぼまる不整形を呈しており、床面の中央部は浅く２段になっていた。覆土の上面には、長さ30cm、幅25cmの扁平な石があり、その上に土師器の鼓形器台が置かれていた。器台の横からは高坏が４点出土している。

覆土　土坑内には、暗褐色土が堆積していた。前述の石は土坑内に土を堆積させた後で、意図的に置かれたものと思われる。

ＳＫ55出土遺物（第55図１～５）

遺物はいずれも覆土の上面から出土した。１は鼓形器台で、脚部は下稜部が横方向にわずかに突出し、ハの字状に開いて端部を軽く外反させる。受け部は上稜部がやや下垂し、そこから大きく開いて端部をさらに外側へ引き出す。脚部内面にはヘラ削りが認められるが、その他は摩滅が激しく調整不明である。２～５は高坏である。２は唯一脚部が残っている。脚部は接合部から外反して開き、坏部は丸みをもって立ち上がる。器壁は非常に薄く、内外面ともに調整は不明である。３～５は径が20cm前後の大型品で、底部から丸みをもって立ち上がり、端部を軽く外反させる。３の外面にハケ目が認められたが、その他は調整不明であった。

年代・性格　出土遺物に壺や甕が伴っておらず、完形品も少ないため、年代を判定するのは難しいが、第55図１の鼓形器台は筒部が縮約し始める時期のものであり、第55図２～５の高坏はいずれも



第58図　ＳＫ55実測図（Ｓ＝1/40　遺物Ｓ＝1/9）　**ＳＫ55出土遺物実測図**（Ｓ＝1/3）

緩やかに丸みをもって立ち上がるやや深い坏部をもつ。これらの特徴から、おおよそ松山編年の大木式（草田編年６期古段階相当）～小谷１式（草田編年６期新段階相当）におさまるものと考えたい。また、性格については、覆土上の石に置かれていた土器類は供献品と考えられるので、土壙墓と考えてよいのではないだろうか。

ＳＫ56（第59図）

規模・形態　当遺構は、Ⅲ区２段目に位置し、東側は加工段５と隣接している。遺構の規模は1.3ｍ×0.7ｍ、深さ20㎝を測り、平面形は楕円形を呈している。

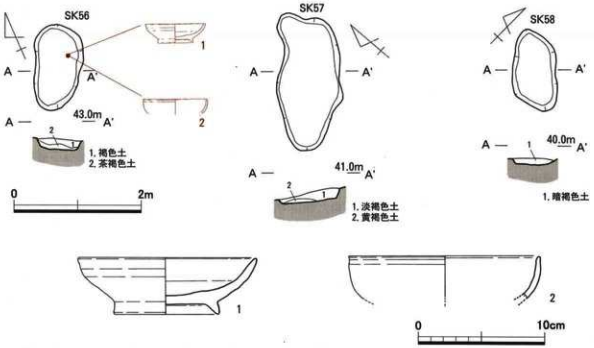
覆土　土壙内には、上層に褐色土、下層に茶褐色土が堆積していた。遺物は上層の地表に近いところから出土している。

ＳＫ56出土遺物（第59図１・２）

土壙の地表に近い場所から、須恵器が２点出土している。１は高台付きの坏で、底部の外周に近い位置に高台を取り付け、外面に回転ヘラ削りを施す。坏部は丸みを帯びながら外方へと開く。２も坏で、やや丸みを帯びて立ち上がり、口縁端部がわずかに内傾する。底部の形態は不明である。

年代・性格　出土土器をみると、第59図１は大谷編年のＢ２型、出雲国庁編年の第２形式～第３形式の坏Ｂに相当するものである。外面底部に糸切りが存在するのかどうか不明なため、明確な位置づけは難しいが、形態の特徴などから大体７世紀末～８世紀初め頃のものと判断される。第59図２は大谷編年の分類には該当がなく、出雲国庁編年の第３形式の坏Ａ、高広編年のⅣＡ期に相当するものと考えられるので、８世紀中葉頃のものであろうか。より新しい方の年代を優先するのであれば、ＳＫ56は８世紀中葉に比定されると思われる。性格については、遺構の表面に土器が置かれていた状況から、土壙墓の可能性が考えられる。

ＳＫ57（第59図）



第59図　Ⅲ区その他のＳＫ実測図（Ｓ＝1/60　遺物Ｓ＝1/9）　**出土遺物実測図**（Ｓ＝1/3）

規模・形態　ＳＫ57はⅢ区２段目のほぼ中央部に位置し、すぐ北側には加工段５が存する。遺構の規模は2.1m×1.0m、深さ20cmで、平面形は北端がやや歪な楕円形を呈している。

覆土　土坑内には、上層に淡褐色土、下層に黄褐色土が堆積していた。遺物は、上層から土師器片が出土している。

年代・性格　出土遺物は破片のため図化していないが、古墳時代後期以降の甕片ではないかと思われる。このため、土坑の年代は古墳時代後期以降としておきたい。性格については、調理器具と考えられる土器が出土していることから炉跡の可能性も考えられるが、土坑内から焼土や炭化物などが検出されていないため、明言はできない。

ＳＫ58（第59図）

規模・形態　ＳＫ58は、Ⅲ区３段目の中央部に位置し、すぐ北側でＳＤ20と隣接する。遺構の規模は、1.3m×0.6m、深さ15cmを測り、平面形は楕円形である。

覆土　土坑内には、暗褐色土が堆積していた。この土層はＳＤ20の第１層とほぼ同質のものではないかと思われるため、同時期に埋没してしまったのかもしれない。覆土からは、土師器の細片が数点出土している。

年代・性格　出土した土師器は細片のため図化できたものはなかったが、胎土や器厚などからおおよそ古墳時代中期以前のものと推察される。前述のとおり堆積土が隣接するＳＤ20と似ており、ＳＤ20が松山編年の大東式に比定されることから、年代としては調和的であると思われる。性格については、不明である。

(4) 性格不明遺構

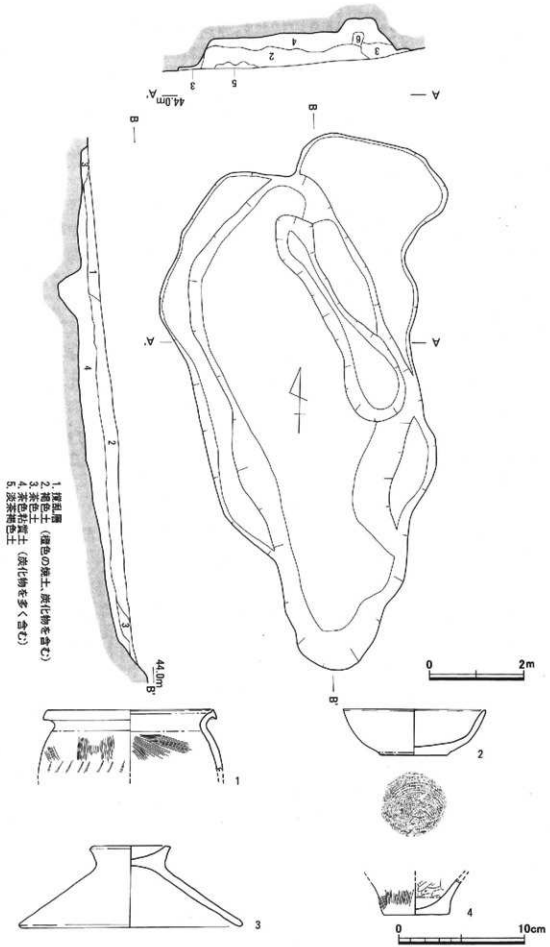
ＳＸ02（第60図）

規模・形態　ＳＸ02はⅢ区２段目の西端に位置し、北西で加工段５と隣接する。何度かの掘り返しがあったようで、平面形は非常に歪になっており、掘方も北東側では３段、北西側と西側では２段になっているなど、企画性があまりないように思えた。遺構の規模は、東西が約２m～5.4m、南北が11.3m、深さが30cm～60cm、北東の３段になっているところでは90cmを測る。

覆土　遺構内の覆土は６層に分けられる。土坑内の土層堆積状況からは２回程度の掘り返しがあったものと思われる。第１層は攪乱土で、針金やビニールなどが混じっていた。５層には何も混じっていなかったが、土質などから第１層に近いものと思われる。第２層、第３層は中層で、遺構内全般に堆積していた。順序としては第３層を掘り込んだ後、第２層が堆積していた。第４層は下層の堆積土であり、炭化物が多く含まれていた。第４層も遺構内全般にわたって堆積していた。第６層は第３層が堆積する以前に部分的に掘り込まれた痕跡であろうか。遺物は、第２層から弥生土器や土師器、土師質土器などの破片がビニール２袋ほど出土したが、第３層、第４層では認められなかった。

ＳＸ02出土遺物（第60図１～４）

出土遺物のうち、実測できたものは４点のみであった。１は弥生土器の甕で、胴部最大径が中位よりもやや上にあり、最大径付近に刺突文を回らせる。口縁部はくの字状に屈曲して端部をわずかに拡張する。２は土師質土器の坏である。底部は平底で、体部が丸みをもって立ち上がり、口縁端部がわずかに外反する。外面底部には、回転糸切り痕が認められた。３は弥生土器の蓋型土器であ



第60図　ＳＸ02実測図（Ｓ＝1/80）　ＳＸ02出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）

る。上部外面は窪んでおり、つまみ部分からくびれた後、直線的に外方へと開く。4は弥生上器の底部資料で、底部は平底を呈し、外面に縦方向のナデ調整、内面にヘラミガキを施す。

年代・性格　第60図の遺物のうち、1は松本編年Ⅳ－1様式に相当するものであろう。2は口径に比して底径が大きいことから、出雲市渡橋町蔵小路西遺跡の中世土器編年1期に属し[18]、おおよそ12世紀後半頃のものと思われる。3は、松本編年1様式におさまる弥生前期の上器である。4は、1と同時期のものであろうか。このように、出土遺物の上限は弥生時代前期、下限は中世であり、これらの状況から考えると第2層は中世以前の遺物包含層であると思われる。ただし、前述のとおり、SX02は2回程度の掘り返しが行われており、直近の掘り返しは現代に近い時期だと思われるので、同一の場所に堆積した第2層以下が近世以前とは素直に考えにくく、年代を決定しづらい。性格については、遺構の平面形や堀方が雑で、数度の掘り返しがあることなどから、廃棄用の土坑ではないかと考えられる。

第5節　Ⅳ区の調査

Ⅳ区は、北方向に延びた舌状丘陵部の根元部分に存し、長廻遺跡の調査区としては一番南側に位置する。調査区は、標高約60m～64m付近の尾根を挟んでかなり急斜面になっており、東側が標高約51m付近で、西側が標高48m付近で緩斜面へと変化していた。東側では、斜面の向きが東から北へと変化しており、調査区北端はⅢ区と隣接する。また、調査区南端の尾根上の最高峰には、後述する権現山古墳が造られていた。平成11年度には、尾根西側でトレンチ調査が行われ、須恵器片や土師器片が見つかっている。

尾根西側斜面の北寄りは畑跡だったらしく、山側の地山が削られて階段状を呈していた。また、調査区北西端のⅡ区に隣接するところでは、長さ約50mにわたって山側の地山を削り、幅15m程の平坦面が造成されており、そこに近代以降の住宅が造られていたようである。そこからは、実測や写真による掲載は行わなかったが、陶磁器類がコンテナ1箱出土した。

遺構は、尾根上で土坑1、尾根東側の緩斜面で溝状遺構4、土坑7、焼土坑2、性格不明遺構1、尾根西側斜面で横穴墓1を検出した（第61図）。この他、尾根東側の緩斜面では多くの柱穴を確認したが、出土遺物に乏しく、柱並びがわかるものはなかった。

調査区の南端に設定した土層観察用の畦をみると、尾根東側（第62図）、尾根西側（第63図）ともに自然堆積した状況を示しており、特に地形が改変された様子は窺えなかった。第63図の第2層はSD21、第3層・第4層はSD22の覆土である。

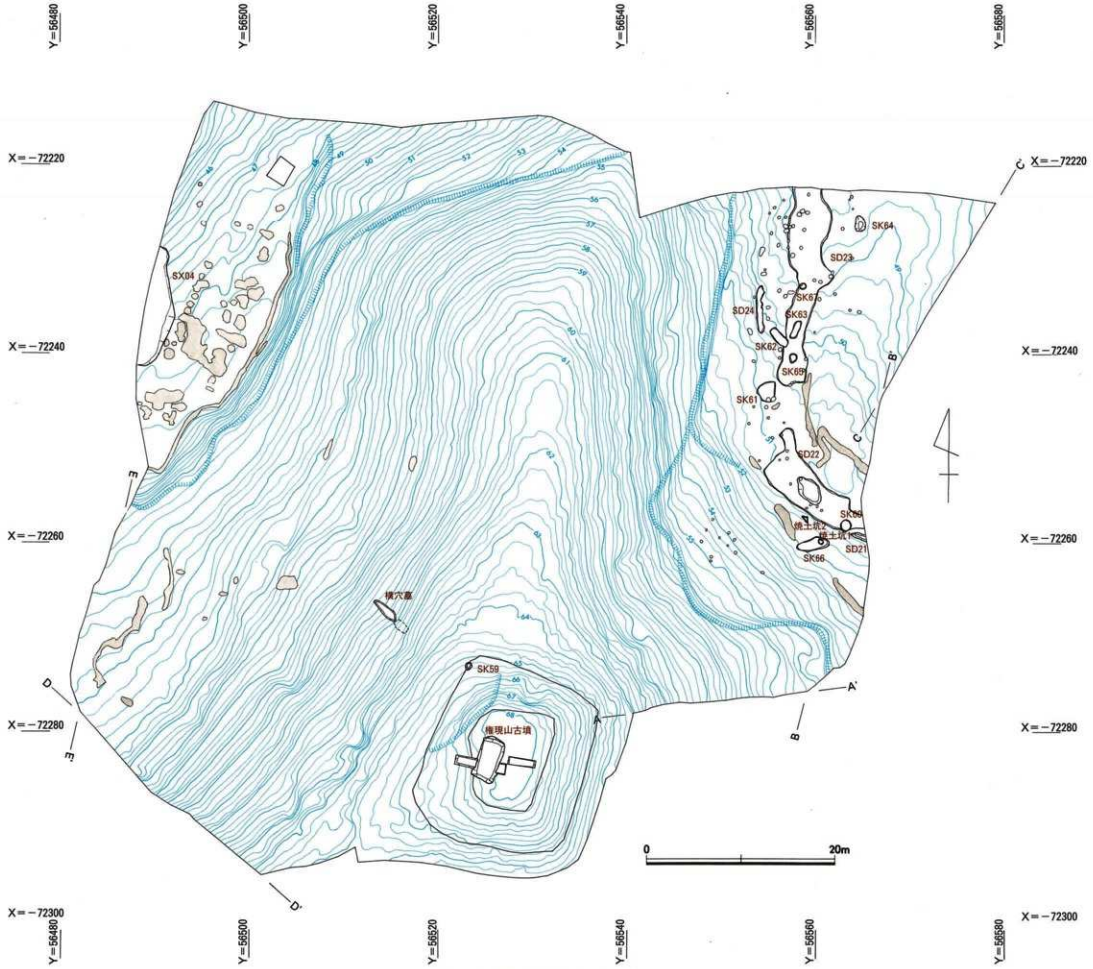
以下、Ⅳ区から検出した遺構、遺物について報告する。

(1) 横穴墓

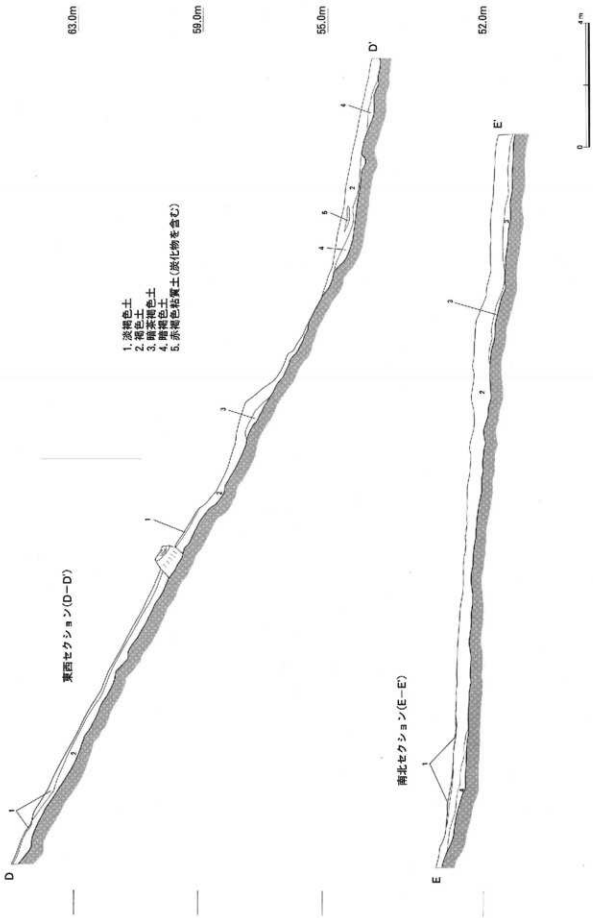
横穴墓（第64図）

Ⅳ区尾根西側の標高60m付近の急斜面に存し、位置的には権現山古墳の北西下方にあたる。この辺りの地山は軟質な凝灰質砂岩のため、横穴墓は存しないものと考えていたが、斜面を精査したところ、径約40cmの空洞と斜面下方で墓道の堀方を確認した。このため、周辺でも横穴墓の確認に努めたが、当横穴墓1基のみしか認められなかった。

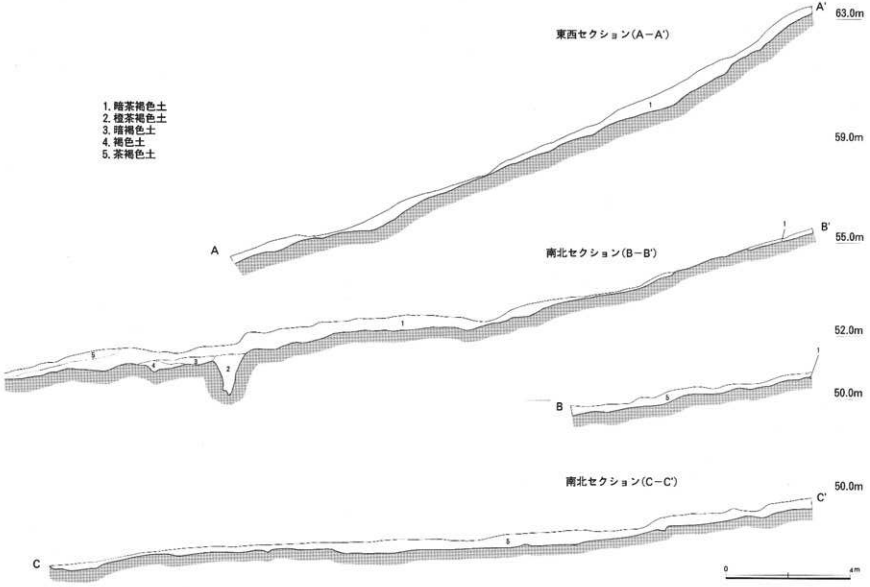
規模・形態　横穴墓は全長が4.65mで、狭長な墓道を有していた。開口方向はN－47°－Wであった。



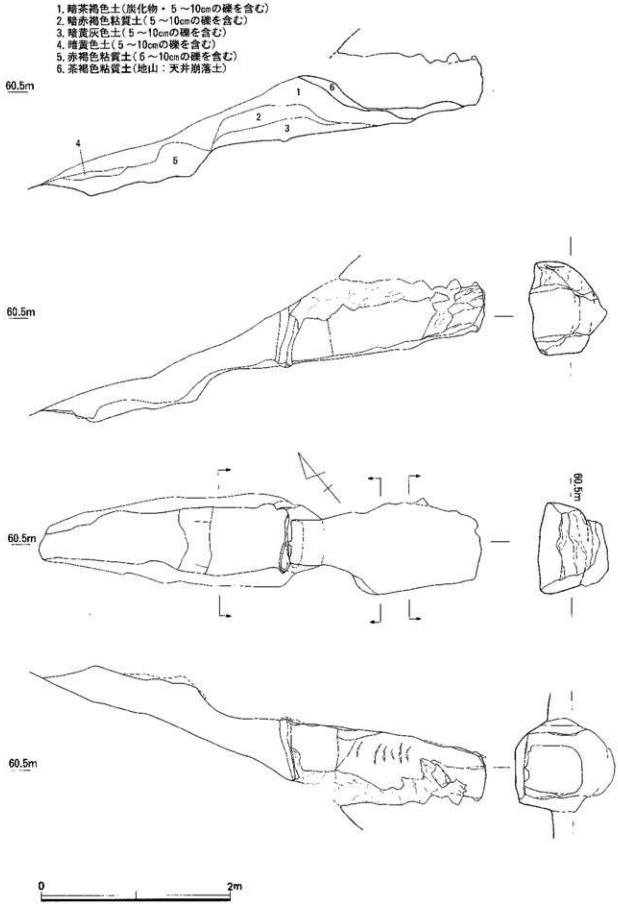
第61図　Ⅳ区遺構配置図（S＝1/400）



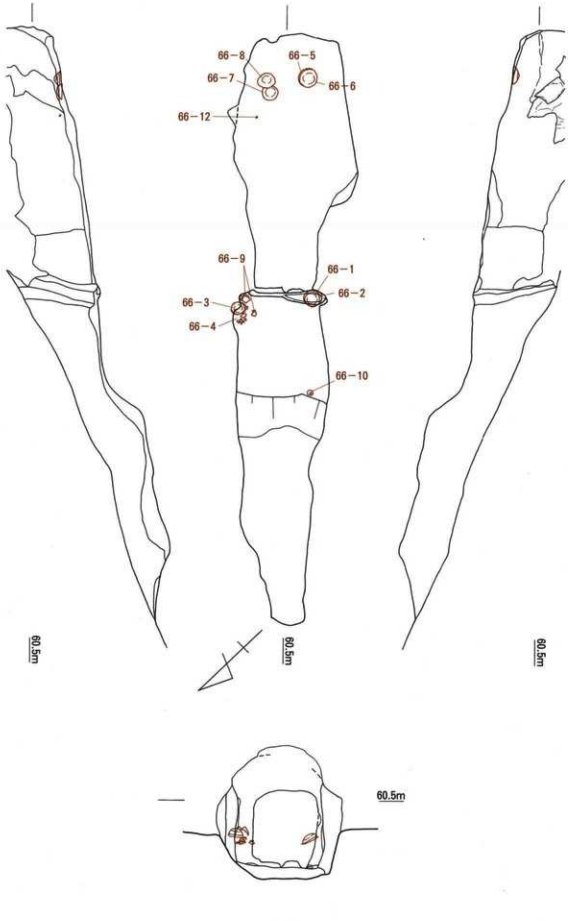
第62図　Ⅳ区西側斜面土層図（S＝1/120）



第63図　Ⅳ区東側斜面土層図（S＝1/120）



第64図　横穴墓実測図（S＝1/40）



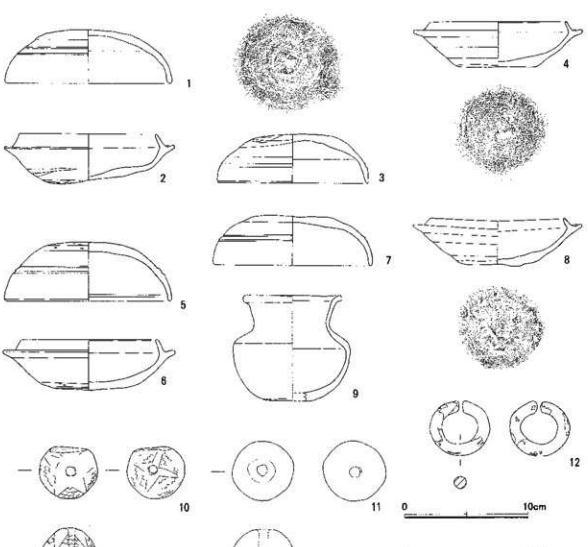
第65図　横穴墓遺物出土状況（S＝1/30）

墓道の規模は、床面で長さ2.65m、幅が玄門側で0.7m、入口側で0.25m、高さ0.5mを測る。平面プランは玄門部から入口に向かって徐々に狭くなり、中程には段をもつ。玄門側と入口側で約50cmの高低差がついていた。また、玄門入口の床面には、長さ60cm、幅3cm～10cm、深さ5cmの溝状の加工があった。これは、閉塞板をはめ込むためのものと思われる。

玄門部は、長さが0.45m、幅が0.45m～0.5m、高さが墓道側入口で0.65mあった。平面的には玄室との境界がはっきりとしないが、立面をみると左右の壁面に稜を施して区画しており、断面はアーチ型をしていたようである。

玄室は、長さが1.55m、幅が前壁で0.95m、奥壁で0.6m、高さは残存する奥壁部分で0.5mを測る。平面プランは、奥壁から徐々に幅広になっており、袖部分は明瞭に表現されず、そこから次第にすぼまって玄門部へと続く。断面は、残存する左右の壁面の状態からみて、アーチ型を呈していたものと思われる。玄室内部の奥壁の立ち上がりや床面と壁面の区画、袖部の調整などを比較すると、左壁に比べて右壁の方が丁寧に造られており、右壁の袖付近には丸刃製痕が残っていた。

覆土　第6層は横穴墓の天井部が崩落したものである。1層は、横穴墓内に堆積した流入土だと思われる。第2層・第3層は墓道中央の1段高い部分から玄門、玄室にかけて堆積していたが、元々



第66図　横穴墓出土遺物実測図（S－1/3　12はS－2/3）

は閉塞板をはめ込んでから積まれた土だと考えられる。第4層・第5層は、墓道を造るために地山面を掘ってから積まれた土層であり、墓道の床面を平らに整える意味合いがあったのかもしれない。覆土の状況からは、追葬は行われなかったものと思われる。

横穴墓遺物出土状況（第65図）

墓道では、中央の1段高くなった部分からは紡錘車が、玄門入口の両袖からは須恵器の蓋坏のセットや広口壺、紡錘車などが見つかった。蓋坏のセットは底を上にした状態で積み重ねられており、壺は破砕されていた。遺物はいずれも第3層の上面から出土しており、これらの状況から、玄門を閉塞後、第3層が積まれ、その上面で墓前祭祀的な行為が行われたのではないかと推察される。そして、その上から第2層が築かれたのであろう。

玄室では、奥壁に近い床面に須恵器の蓋坏2セットが底を上にした状態で積み重ねられていた。また、中央部左壁寄りからは、耳環1が床面からやや浮いた状態で出土した。蓋坏は枕に転用された可能性が高いので、2人の被葬者が埋葬されたのではないかと推測される。また、耳環は流入土により原位置を失っているものと思われる。

横穴墓出土遺物（第66図）

第66図に図化したもの以外、遺物は認められなかった。1～4、9～11が玄室入口から、10が墓道中央から、5～8、12が玄室床面から出土した遺物である。1～8は須恵器の蓋坏・坏身で、1と2、3と4、5と6、7と8がセット関係である。1は肩部にわずかに稜が残り、1条の沈線が回る。2は口縁部のかえりが内傾して立ち上がり、外面底部には粗い回転ヘラ削りを施す。3は肩部に1条の沈線が回り、天井部には粗い回転ヘラ削りを施した後、ヘラ記号を付ける。4は2と同様の形態を呈しており、外面底部にヘラ記号を付ける。5は肩部に2条の沈線を回らせて突帯と稜を表現しており、口縁端部内面にも1条の沈線を回らせる。天井部は回転ヘラ削りを施す。7は肩部に2条の沈線を回らせており、天井部はナデ調整を行う。6・8は口縁部のかえりが内傾して立ち上るもので、6は外面底部に回転ヘラ削りを施し、8はヘラ記号を付ける。9は広口壺で、口縁端部を短く広げて平坦面を有する。底部は平底で、ナデ調整を施す。横穴墓の副葬品としては珍しい器種である[16]。10・11は凝灰岩製の紡錘車である。断面は台形状を呈し、中央部に径8㎜の孔を穿つ。10は上面及び下面に鋸歯文を施す[17]。12は銅芯鍍銀製の耳環である。

年代・性格　第66図の遺物をみると、5・6が大谷編年の蓋坏のA4型、3がA5型、1・2・4・7・8がA6型に該当するもので、墓道と玄室内の遺物に年代差はないものと思われる。また、前述のとおり玄室内には2人の被葬者が埋葬され、土層堆積状況からは追葬を行った形跡が認められない。これらを勘案すると、被葬者はほぼ同時期に埋葬され、埋葬後に玄門を閉塞し、あまり時間を置かないで墓道に土器が据えられたものと推測され、須恵器の型式から横穴墓は概ね出雲4期（TK209併行期）に築造されたものと考えられる。

(2) 溝状遺構

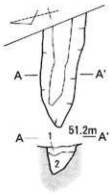
SD21（第67図）

規模・形態　SD21は尾根東側緩斜面の南東隅に存し、すぐ北にはSD22が位置する。平面プランでは両遺構の切り合いは確認できなかったが、第63図の土層堆積状況をみると、SD21の覆土（第2層）をSD22の覆土（第3層・第4層）が切っている様子が窺える。遺構の平面形は、東端は調

査区外へと続いており、西は徐々に狭くなり途切れている。規模は、残存長1.7m、幅0.5～0.65m、深さが50cm～70cmを測り、断面はU字形を呈する。溝の床面は西から東に向かって低くなっていた。

覆土　土坑内には、褐色系の土が2層堆積していた。覆土からの出土遺物は認められなかった。

年代・性格　出土遺物はなく年代は不明だが、切り合い関係から、後述するSD22よりも時期の古いことは明らかである。性格については不明である。



第67図　SD21実測図（S＝1/60）

SD22（第68図）

規模・形態　SD22は尾根東側緩斜面の南東に存し、南東端がSK60と切り合っており、南側肩の一部を失う。南東端は調査区外へと続いており、調査区東端の土層堆積状況をみると、前述のとおりSD21の北側の覆土を切っている。平面形はかなり不整形を呈し、南東側は幅1.8mほどであるが、中央部では4.0m、北西端では4.2mを測り、北側はそこからさらに1.1m幅で2mばかり延びる。また、南側も一度途切れてから、0.6m幅で1.8mほど続く。溝の残存長は最も延びたところまでで13.4m、深さは20cm～30cmを測る。また、中央部の床面には長さが3.4m、幅が最も広いところで2.2m、深さ40cm～60cmの土坑状の落ち込みがあるのがわかった。床のレベルは南東から北西に向かって低くなっており、床面は凸凹として一定ではなかった。

覆土　第68図のD－D'ラインとE－E'ラインがSD22の土層断面図である。D－D'ラインは土坑状の落ち込みを含んだ堆積状況であるが、第1層・第5層・第6層が溝の覆土で、第7層～第9層が落ち込み内の覆土である。落ち込み内の覆土第7層・第8層は周辺の地山と類似するが、炭化物含有の有無により区別した。上層断面からは、落ち込み内の覆土が堆積した後で、SD22の覆土が堆積したものと思われる。E－E'ラインは、SK60と切り合う場所の土層断面で、溝の覆土である第1層が、SK60の覆土により切られているのがわかる。また、第1層は当溝の北側に位置するSD23の第1層と共通のものである。なお、SD22の覆土内からは、土器や石器のほか人頭大の自然石なども出土したが、落ち込み内の覆土（第7層～第9層）からの出土遺物は認められなかった。

SD22出土遺物（第70図1～4、第71図1・2・10）

遺物のほとんどは第1層から出土しており、土器は細片が多かったため実測できたのは4点のみであった。第70図の1～4は弥生土器である。1は甕の口縁部で、口縁端部を上方に拡張させて内傾するもので、端部外面には2条の凹線文が施される。頸部から胴部にかけては強く張り出す。2・3は底部資料で、2はしっかりとした平底状を呈し、3は底が薄手で高台状になっている。内面にヘラ削りが残る。4は高坏の坏部で、体部は斜め上方に開いた後、口縁端部に向かって緩やかに内湾しており、外面には5条の凹線文を回らす。内外面ともに細かなヘラミガキを施す。第71図1・2・10は黒曜石製の石器である。1・2は凹基式の無茎鏃で、1は長さが約4cmの大型品である。10は石核と思われ、両面ともに粗い剥離痕が認められる。

年代・性格　第70図1・4は、松本編年Ⅳ－1様式に相当するもので、他に新しい年代の遺物はみあたらないことから、SD22はおおよそ松本編年Ⅳ様式の枠内におさまるものと考えられる。性格については、平面形が不整形で溝幅や床高が一定でないことから、人為的な遺構というよりも自然

流路であった可能性が高く、遺物は周辺の遺構からの流れ込みではないかと推測される。また、覆土の項で触れたとおりＳＤ23と共通の覆土が堆積しており、形態も類似し、位置的にもつながることから、元々両遺構は同一の流路であったものと考えられる。

ＳＤ23（第68図）

規模・形態　ＳＤ23は尾根東側緩斜面の調査区中央部から北側にかけて位置する溝である。北側はⅢ区と接しており、平成12年度の調査でＳＤ23の北端が確認されている。遺構はＢ－Ｂ'ライン近くでＳＫ67と、Ｃ－Ｃ'ライン近くでＳＫ62、ＳＫ63、ＳＫ65とそれぞれ切り合っており、東側肩の一部が失われていた。平成12年度に検出した北端までの検出長は約23mを測り、溝幅が一定ではなく不整な平面形を呈する。溝幅は南寄りが２ｍ～３ｍ、中央から北寄りにかけては４ｍ～4.5m、深さは10cm～20cmであった。床面は一定ではなく、南から北へと傾いており、南端と北端の高低差は約２m程であった。また、ＳＤ22の北端と当溝の南端では約30cmの高低差が認められた。このことから、ＳＤ22→ＳＤ23に向かって流れていたものと思われる。

覆土　第68図のＡ－Ａ'ライン～Ｃ－Ｃ'ラインがＳＤ23の土層断面図である。いずれもⅠ層にはＳＤ22と共通の茶褐色土が堆積しており、Ａ－Ａ'ライン、Ｂ－Ｂ'ラインにはⅠ層に淡茶褐色土が認められた。いずれも溝内に流れ込んで自然堆積したものと思われる。Ｃ－Ｃ'ラインではＳＫ63との切り合いが確認できる。覆土内からは、ＳＤ22と同じく土器や石器のほか自然石などが出土した。

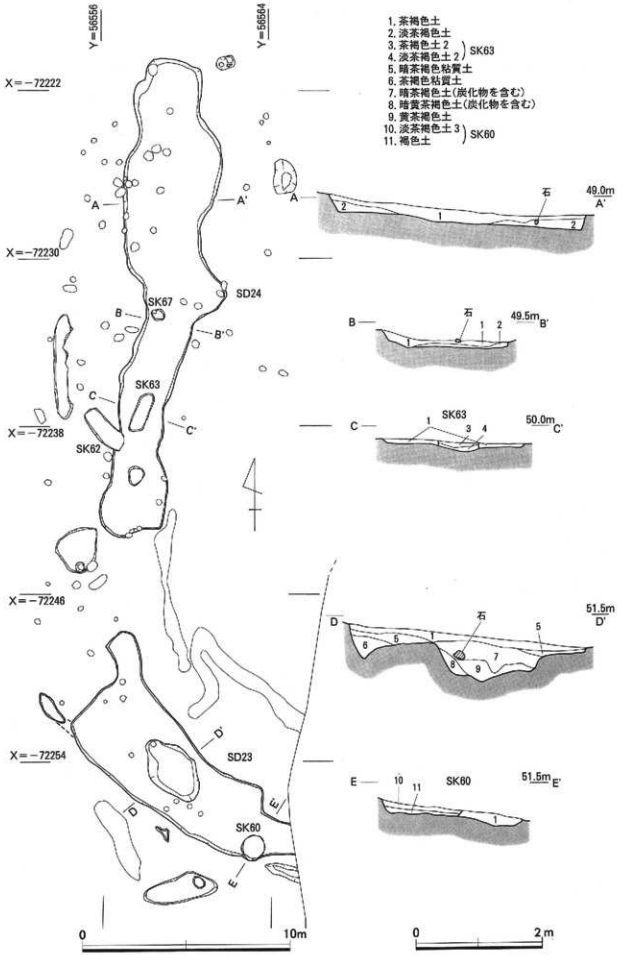
ＳＤ23出土遺物（第70図５～18、第71図３～８、11～13）

遺物は第１層を中心に弥生土器類がコンテナ１箱分出土しており、石器も混じっていた。そのうちの図化できたものを第70図、第71図に掲載した。第70図５は突帯文をもつ深鉢で、出土遺物中唯一の縄文土器である。外面端部下方に突帯を貼り付け、口縁端部と突帯に刻み目を施す。第70図６～18は弥生土器である。６～11は甕で、６はくの字状に屈曲した口縁の端部を拡張し、１条の凹線文を入れる。７は６よりも屈曲が緩やかで、口縁端部もさほど肥厚しない。胴部の張りもなだらかである。８はなだらかに張った胴部から、口縁部がくの字状に鋭く屈曲し、端部がわずかに肥厚する。９～11はくの字状に開いた口縁の端部を拡張させ、外部に１～３条の凹線文を施す。12は直口口縁を有する鉢で、外面に２条の凹線文を回らす。13は高坏の坏部で、体部が斜め上方に開いた後、口縁部が緩やかに内湾する。外面に２条の凹線文を回らす。14は把手で、ヘラ状工具により表面を調整している。把手が取り付けられていた器種は不明である。15～18は底部資料で、比較的薄手でしっかりとした平底状を呈しており、内面にはヘラ削りが残るものもある。

次に、第71図に示した石器類のうち、４～７が黒曜石製の無茎石鏃であり、８がサヌカイト製の無茎石鏃である。いずれも凹基式と思われる。10～11も黒曜石製の石器で、10は石核、11は楔形石器、12・13は縦長剥片である。

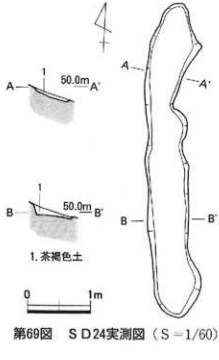
年代・性格　第70図の遺物のうち、５の深鉢は縄文晩期のものであろう。６～10の弥生土器の甕をみると、７・８は松本編年のⅢ－１～Ⅲ－２様式に相当し、６・９・10・11はⅣ－１～Ⅳ－２様式に相当するものである。12の鉢と13の高坏もⅣ様式に属しており、その他の遺物もⅣ様式に相当するものと考えられる。また、上器類と供伴する第71図の石器類も同年代のものであろう。したがって、ＳＤ23の年代は松本編年Ⅳ様式を降らないものと考えられる。

既にＳＤ22の項で、ＳＤ22とＳＤ23は同一の流路であると述べたが、上記のとおり出土遺物の年



第68図　ＳＤ22・ＳＤ23実測図　左：平面図（Ｓ＝1/180）　右：土層図（Ｓ＝1/60）

代（暖ね松本Ⅳ様式以前）が調和的である点からもこのことは裏付けられる。よって、ＳＤ22・ＳＤ23は弥生時代中期後半頃の自然流路であったものと推測される。



第69図　ＳＤ24実測図（Ｓ＝1/60）

ＳＤ24（第69図）

規模・形態　ＳＤ24は尾根東側の斜面が緩やかに変化する地点にあり、すぐ東にはＳＤ23が平行して走る。平面形は南北方向に直線的に穿たれており、両端ともわずかに広がってから途切れている。規模は、長さが約５ｍ、幅が0.5ｍ～0.8ｍ、深さ15㎝～30㎝で、床面は南から北へ向かって低くなっており、両端で50㎝の高低差があった。

覆土　遺構内には茶褐色土が堆積しており、覆土内からは土器の細片が１点出土した。

ＳＤ24出土遺物（第71図９）

９は安山岩質で、凹基式の無茎石鏃である。剥片周辺のみに加工を施す。

年代・性格　出土遺物は、第71図９のほかに、器壁が薄い素焼きの土器が１点見つかっている。これは弥生時代後期末～古墳時代前期頃の土器ではないかと思われるが、表面の摩滅が激しいため年代の判断が難しい。性格についても、遺構の南北の端が途切れており、両端とも続く形跡が認められないことから、溝としての機能を有していたとは言いきれない。

(3) 土坑

ＳＫ59（第72図）

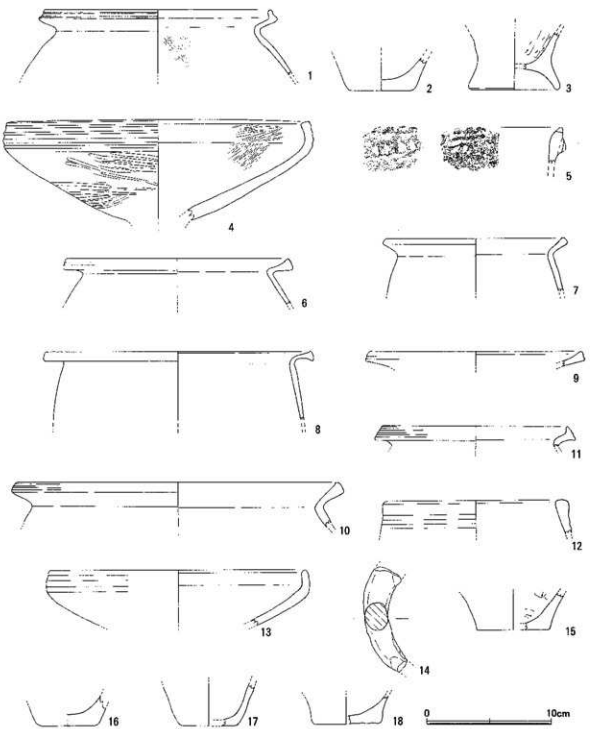
規模・形態　ＳＫ59は調査区南側の尾根上、権現山古墳の北西隅墳裾に穿たれた土坑である。平面形は北側の幅がやや広がった楕円形で、床は２段掘りになっており、上面・床面ともに北に向かって低くなっていた。規模は、長さ0.85ｍ、幅0.5ｍ～0.6ｍ、深さ20㎝～35㎝を測る。当土坑付近から権現山古墳の西側墳丘部にかけては、後世の攪乱（尾根筋に沿った山道）のため削られており、この際に土坑の上面もある程度削られたのではないかと思われる。

覆土　土坑内には暗茶褐色土が堆積しており、土坑内には土師器の壺が置かれていた。覆土の状況からみて、壺を入れてから一気に埋められたのではないかと考えられる。

ＳＫ59出土遺物（第72図１）

１は土師器の壺である。土坑内に、口縁を上にした状態で置かれていたようであるが、土圧により押しつぶされていた。壺は復元したところ、体部の1/3程度が欠損しており、欠損部を土坑内から検出できなかった。形態は、退化した複合口縁を有し、端部は平坦になっている。全体的に口縁部は器壁が厚くなり、胴部は卵形を呈し、底部を丸くおさめる。外面にハケ目、内面頸部以下にヘラ削りを施す。

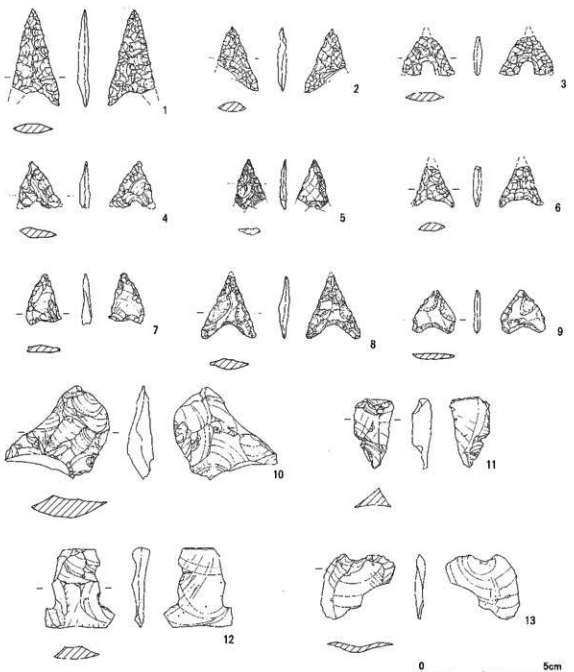
年代・性格　第72図１はおおよそ松山編年の夫敷中層式（初期須恵器）に相当すると思われるので、土坑も同年代のものであろう。性格については、土器を壺棺に転用して埋葬した土壙墓ではないか



第70図　Ⅳ区ＳＤ出土遺物実測図１（Ｓ＝1/3）

と考えられる。壺体部にあった1/3程度の欠損は、当初からのものであろうか。

当土坑は、権現山古墳の墳裾に穿たれていたわけであるが、切り合いからどちらが先に造られたのかを判断するのは難しい。ただ、古墳に先立って造られたのであれば、墳形を整える際に土壙内が攪乱される可能性があるが、特にそのような様子は窺えなかったので、権現山古墳造築後にＳＫ59が穿たれたのではないかと推測される。



第71図　Ⅳ区ＳＤ出土遺物実測図２（Ｓ＝2/3）

ＳＫ60～ＳＫ67・焼土坑１・２

上記の土坑は、調査区の尾根東側の、南から北に向かってなだらかに傾斜する緩斜面（以下「緩斜面」という。）で検出されたものである。地山あるいは溝状遺構の覆土を切って穿たれており、弥生時代～古墳時代にかけての遺物が出土している。

ＳＫ60（第73図）

規模・形態　ＳＫ60は緩斜面の北西寄りに位置し、ＳＤ22を切って穿たれた土坑である。上坑の規模は、東西1.1m、南北1.2mと円形に近い平面形で、深さは10cm～20cmを測る。断面は矩形状を呈している。

覆土　土坑内には、上層に茶褐色土、下層に褐色土が堆積していた。上層からは、石器が1点出土している。なお、A－A'ラインの土層図で点線になっているのはＳＤ22の覆土を表している。

ＳＫ60出土遺物（第75図４）

４は凝灰岩質で、凹基式の無茎石鏃である。剥片周辺のみに加工を施す。

年代・性格　遺構の切り合いからＳＤ22よりも新しいことは明確であり、第75図４以外に遺物が出土していないため、詳細な年代はわからない。性格についても不明である。

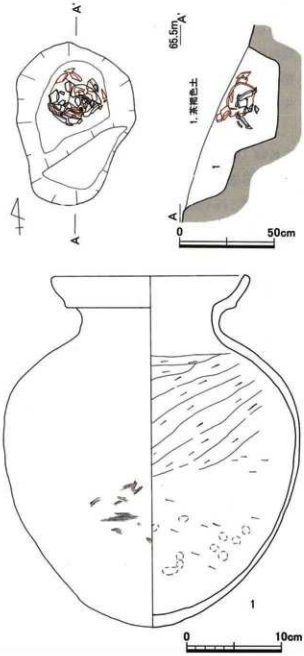
ＳＫ61（第73図）

規模・形態　当土坑はＳＤ22とＳＤ23の中間に位置する。平面形は北東隅が突き出た歪な楕円形をしており、南東側の肩は別の柱穴に切られている。規模は、2.2m×1.9m、深さが20cmを測り、南端の床面には径約50cmの穴が穿たれていた。

覆土　土坑内には３層が堆積していたが、第１層は後世のもので、第３層は木の根による土層の乱れである。よって、土坑内の堆積土は第２層の茶褐色粘質土であり、ここから土器片と石器が出土した。

ＳＫ61出土遺物（第75図５・６）

５は黒曜石製で、凹基式の無茎石鏃である。６は黒曜石製の微細剥離のある縦長剥片である。



第72図　ＳＫ59実測図（Ｓ＝1/20）　**ＳＫ59出土遺物実測図**（Ｓ＝1/4）

年代・性格　第75図５・６のほかに、素焼きの土器片が１点出土している。場所的にはＳＤ22・ＳＤ23の流路ルート上にあたることから、流路が埋没した後にＳＫ61が穿たれたものと思われるが、土器の風化が激しいため詳細な年代を知ることはできない。性格的にも、火を使った形跡などが認められないため、不明である。

ＳＫ62（第73図）

規模・形態　ＳＫ62は緩斜面の中央部に位置し、ＳＤ23の東側肩の一部を切って穿たれていた。平面形は細長い楕円形を呈しており、規模は、2.4m×0.9m、深さは10cm～20cmを測る。床面は南東から北西に向かって低くなっていた。

覆土　土坑内には、上層に褐色土、下層に茶褐色土が堆積しており、いずれも流れ込んだものと思

われる。上層は隣接するＳＫ63の覆土と類似していた。なお、上層より弥生土器もしくは土師器と思われる土器片が１点出土した。

年代・性格　ＳＫ62は、切り合いからＳＤ23よりも新しいことは確かであるが、出土した土器が細片のため、具体的な年代は判断できない。また、性格についても不明である。

ＳＫ63（第73図）

規模・形態　ＳＫ63は、位置的にはＳＫ62の東側にある土坑で、ＳＤ22と切り合っていた。平面形はＳＤ62と同じ細長い楕円形を呈しており、規模は2.0m×0.4m、深さ20cmであった。床面は南から北に向かって20cmばかり低くなっていた。

覆土　土坑内には、上層に茶褐色土、下層に淡茶褐色土が堆積しており、前述のとおり上層は隣り合うＳＫ62の覆土と類似していた。Ａ－Ａ'ラインのとおり、点線で表したＳＤ23の覆土を切っているのがわかる。覆土からの出土遺物は認められなかった。

年代・性格　ＳＫ63は、切り合いからみてＳＤ23よりも新しいことは確かであり、ＳＫ62と形状や上層の覆土が類似することから、比較的近い年代のものと考えられるが、出土遺物がないため具体的な年代は判断できない。また、性格についても不明である。

ＳＫ64（第73図）

規模・形態　当土坑は、緩斜面の北東隅に存し、３mばかり東にはＳＤ23が位置する。規模は、1.7m×1.1m、深さ50cmを測り、周辺で検出した土坑の中ではかなり深い方である。平面形は北側がやや不整な楕円形を呈しており、断面は上端がやや広がるＵ字形であった。

覆土　土坑内には、上層に褐色土、下層に褐色土が堆積しており、いずれも流れ込んだものと思われる。覆土から弥生土器の底部が出土した。

ＳＫ64出土遺物（第75図１）

１は弥生土器の底部資料であり、比較的薄手でしっかりとした平底状を呈している。

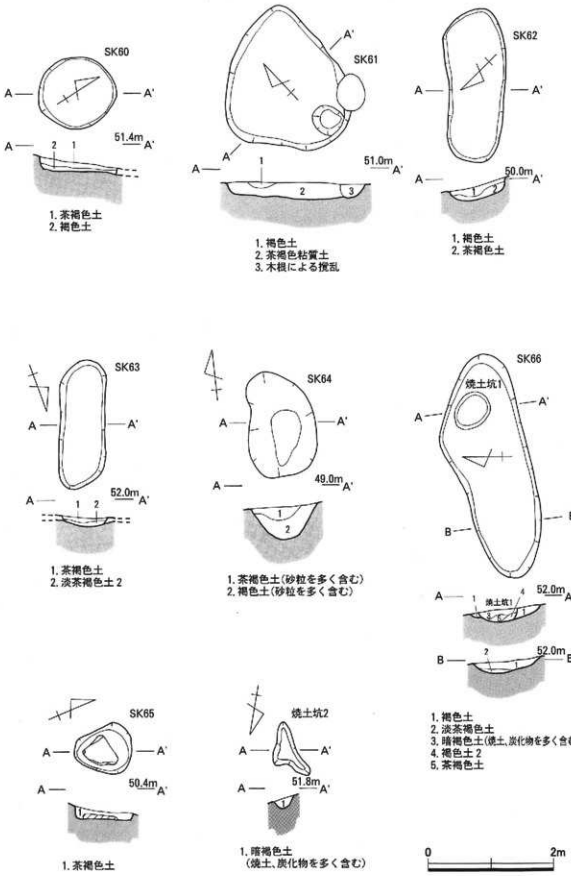
年代・性格　第75図１は弥生時代中期頃のものであることから、ＳＫ64も同年代のものと考えられる。性格については不明である。

ＳＫ65（第73図）

規模・形態　ＳＫ65は、緩斜面の中央部に位置し、ＳＤ23の覆土に掘られた土坑である。規模は0.9m×0.8m、深さ20cmを測り、床面からは長さ50cm、幅40cm、厚さ15cm～20cmの三角形状の平石を検出した。平面形は、北側が広くなる不整な楕円形を呈し、石を除去した後の床面はほぼ平坦であった。

覆土　土坑内には茶褐色土層が認められ、平石を置いた後で堆積したものと考えられる。覆土から遺物は出土しなかった。

年代・性格　遺物が出土していないため年代は不明であるが、切り合いからＳＤ23よりも新しいことは確実である。上坑内の平石は床面に据えられており、台座的な用途が想像されるが、裏付ける資料がないため詳細は不明である。



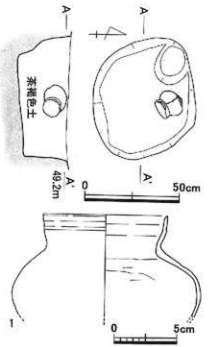
第73図　ＳＫ60～66、焼土坑１・２実測図（Ｓ＝1/60）

ＳＫ66・焼土坑１（第73図）

規模・形態　ＳＫ66は、緩斜面の南側に存しており、北側にはＳＤ22が位置する。また、覆土の一部は焼土坑１により切られていた。ＳＫ66の規模は東西が3.6m、南北が1.0m～1.3m、深さ20cmを測り、平面形は東側がやや広がる細長い楕円形を呈していた。

焼土坑１は、ＳＫ66の東端に近い位置に穿たれており、平面形は卵形をしていた。規模は0.6m×0.5m、深さ20cmで、断面は上端が広がるU字形をしていた。

覆土　Ａ－Ａ'ラインをみると、焼土坑１の覆土である第３層～第５層がＳＫ66の覆土第１層を切っているのがわかる。第３層には焼土と炭化物が多く含まれており、第４層・第５層にも炭化物が若干含まれていたので焼土坑とした。ＳＫ66には、上層に褐色土、下層に淡茶褐色土が堆積しており、流れ込みによるものと思われる。ＳＫ66の第１層と焼土坑第３層から遺物が出土した。



第74図　ＳＫ67実測図（Ｓ＝1/20）
ＳＫ67出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）

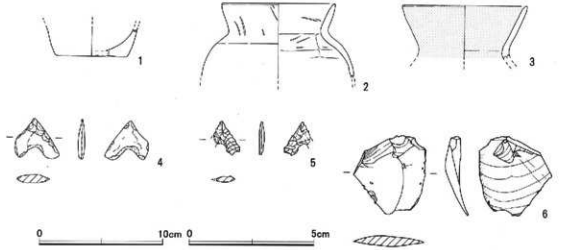
ＳＫ66・焼土坑１出土遺物（第75図２・３）

ＳＫ66からは、数点の土師器片が出土しているが、図化できたものは２のみであった。２は小型丸底壺と思われ、胴部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は器壁がやや肥厚し、ハの字状に開く。外面にハケ目、内面は頸部以下にヘラ削りを施す。

焼土坑からは、土師器が２点出土しており、同一個体であった。３が出土土器で、土師器の直口壺の口縁部と思われる。口縁部はまっすぐハの字状に開き、内外面には赤色顔料が塗布されていた。

年代・性格　第75図２は松山編年の小谷４式～大東式に相当するもので、第75図３は松山編年の夫敷中層式（初期須恵器）頃のものと考えられる。したがって、ＳＫ66は小谷４式～大東式、焼土坑１は夫敷中層式（初期須恵器）に比定され、切り合い関係とも調和がとれている。

性格については、ＳＫ66はほんの一時期に何らかの目的で使われた後、土器とともに廃棄された



第75図　Ⅳ区ＳＫ・焼土坑出土遺物実測図（Ｓ＝1/3　４～６はＳ＝2/3）

のであろうか。また、焼土坑1はSK66の廃棄後、火を焚くために使ったものであるが、赤色顔料を塗布した土器片が見つかっていることから、祭祀的な行為が行われたのかもしれない。

焼土坑2（第73図）

規模・形態　焼土坑2は、SK66・焼土坑1とSD22の中間に位置しており、平面形は不整な三角形を呈している。規模は0.6m×0.5m、深さ20cmで、断面はU字形であった。

覆土　焼土、炭化物を多く含む暗褐色土が堆積していたので、焼土坑とした。

年代・性格　出土遺物は認められなかったが、覆土が焼土坑1と類似しており、位置的にも近いことから焼土坑1と同時期のものと思われる。性格については、火が焚かれたことだけは確かである。

SK67（第74図）

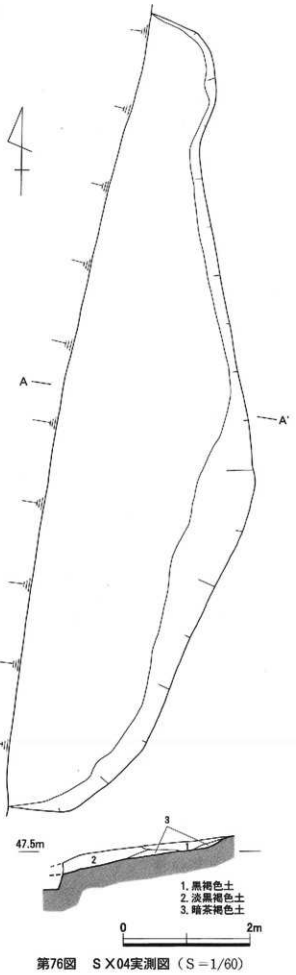
規模・形態　当土坑は緩斜面中央部に位置し、SD23の覆土を切って穿たれている。平面形は楕円形を呈している。規模は、0.7m×0.6m、深さ35cmを測り、東隅には0.2m×0.2m、深さ10cmの掘り込みが認められた。土坑の断面形は逆台形に近い形状をしていた。

覆土　土坑内には、茶褐色土が堆積していた。覆土の上面からは、土器が横倒しになった状態で見つかった。

SK67出土遺物（第74図1）

前述のとおり土坑内から横倒しになった状態で検出された。現地での取り上げ時には底部まで存在したが、表面が非常に脆弱なため、全体を復元できなかった。1は土師器の小型甕で、口縁部は退化した複合口縁を有し、胴部は大きく張り出している。器壁は全体的に薄手で、内面頸部の一部にヘラ削りが残るが、その他は摩滅が激しく調整不明である。

年代・性格　第74図1は松山編年の大東式に相



第76図　SX04実測図（S＝1/60）

当するものと考えられるので、土坑も同年代のものと思われる。性格については不明である。

(4) 性格不明遺構

ＳＸ04（第76図）

規模・形態　ＳＸ04は、調査区の北西寄り、尾根から西へ向かって急傾斜する斜面が緩斜面へと変化し、平面状を呈する区域の一番西端で検出された遺構である。遺構はさらに西へ続いていたものと思われるが、進入路により途切れていた。検出できた範囲では、北側がくびれ南側が広がる半徳利状の平面形を呈していた。床面は南から北へ向かって低くなっており、高低差は約1.5mを測る。残存する規模は、南北の長さが12.7m、東西の残存幅が最大3.2m、深さが25cmであった。

覆土　遺構内には３層が堆積しており、２回の掘り返しが行われた様子が窺える。出土遺物は認められなかった。

年代・性格　年代を決める資料がないため詳細は不明である。ただ、すぐ横にあった近代以降の住宅跡には地山状の軟質な粘質土が覆土として堆積していたが、ＳＸ04の覆土はこれらとは全く異なり、どちらかといえば古い時期の遺構と共通の覆土であると考えられる。性格についても不明であるが、谷に近い位置にあり、南から北へと大きく傾斜していることなどから、比較的古い時期の流路の一部だったのかもしれない。

第６節　権現山古墳の調査

権現山古墳は、長廻遺跡が所在する舌状丘陵の尾根上に存し、平成11年度～平成13年度までの調査範囲の中では最南端に位置する（第61図）。墳丘の所在する標高は65m～68mを測り、東には斐伊川から仏教山、北には出雲平野や北山山地を一望できる眺望の開けた場所である。

権現山古墳のある位置は、元々は長廻遺跡の調査範囲と重複するのであるが、当初から墳丘があることが判明していたため、墳丘周りを区画して権現山古墳として調査を行った。

墳形・墳丘規模（第77図）

墳丘は地山を削り出した方墳で、墳裾を判断するのは難しいが、おおよその規模は南北約19m、東西約17m、墳丘高は北側で約３m、南側で約２mを測る。墳丘の北西側は後世の攪乱（尾根筋に沿った山道）のため、長さが５m、幅が最大２mの範囲で削り取られていた。また、南西隅も墳頂から墳裾にかけて流失していた。墳丘の高さが示すとおり、北側をよりしっかりと削り出し、形も整えられていることから、斐伊川や出雲平野からの眺めを意識して造られたものと推測される。また、北西隅墳裾は前述のとおり長廻遺跡ＳＫ59と切り合っていた。

墳丘には、主体部上面で２個、西裾部で２個、北裾部で１個の礫を検出した以外、外表施設らしきものは認められなかった。

覆土（第78図）

墳丘上には主な土層として、上層に第１層の褐色土、下層に第２層、第４層、第５層が堆積していたが、いずれも自然堆積層と考えられ、盛り土は認められなかった。また、周溝施設もなかったものと思われる。

主体部（第79図）

墳頂部の精査では主体部を検出できなかったため、やむを得ず墳丘の東西方向及び南北方向にト

当するものと考えられるので、土坑も同年代のものと思われる。性格については不明である。

(4) 性格不明遺構

ＳＸ04（第76図）

規模・形態　ＳＸ04は、調査区の北西寄り、尾根から西へ向かって急傾斜する斜面が緩斜面へと変化し、平面状を呈する区域の一番西端で検出された遺構である。遺構はさらに西へ続いていたものと思われるが、進入路により途切れていた。検出できた範囲では、北側がくびれ南側が広がる半徳利状の平面形を呈していた。床面は南から北へ向かって低くなっており、高低差は約1.5mを測る。残存する規模は、南北の長さが12.7m、東西の残存幅が最大3.2m、深さが25cmであった。

覆土　遺構内には３層が堆積しており、２回の掘り返しが行われた様子が窺える。出土遺物は認められなかった。

年代・性格　年代を決める資料がないため詳細は不明である。ただ、すぐ横にあった近代以降の住宅跡には地山状の軟質な粘質土が覆土として堆積していたが、ＳＸ04の覆土はこれらとは全く異なり、どちらかといえば古い時期の遺構と共通の覆土であると考えられる。性格についても不明であるが、谷に近い位置にあり、南から北へと大きく傾斜していることなどから、比較的古い時期の流路の一部だったのかもしれない。

第６節　権現山古墳の調査

権現山古墳は、長廻遺跡が所在する舌状丘陵の尾根上に存し、平成11年度～平成13年度までの調査範囲の中では最南端に位置する（第61図）。墳丘の所在する標高は65m～68mを測り、東には斐伊川から仏教山、北には出雲平野や北山山地を一望できる眺望の開けた場所である。

権現山古墳のある位置は、元々は長廻遺跡の調査範囲と重複するのであるが、当初から墳丘があることが判明していたため、墳丘周りを区画して権現山古墳として調査を行った。

墳形・墳丘規模（第77図）

墳丘は地山を削り出した方墳で、墳裾を判断するのは難しいが、おおよその規模は南北約19m、東西約17m、墳丘高は北側で約３m、南側で約２mを測る。墳丘の北西側は後世の攪乱（尾根筋に沿った山道）のため、長さが５m、幅が最大２mの範囲で削り取られていた。また、南西隅も墳頂から墳裾にかけて流失していた。墳丘の高さが示すとおり、北側をよりしっかりと削り出し、形も整えられていることから、斐伊川や出雲平野からの眺めを意識して造られたものと推測される。また、北西隅墳裾は前述のとおり長廻遺跡ＳＫ59と切り合っていた。

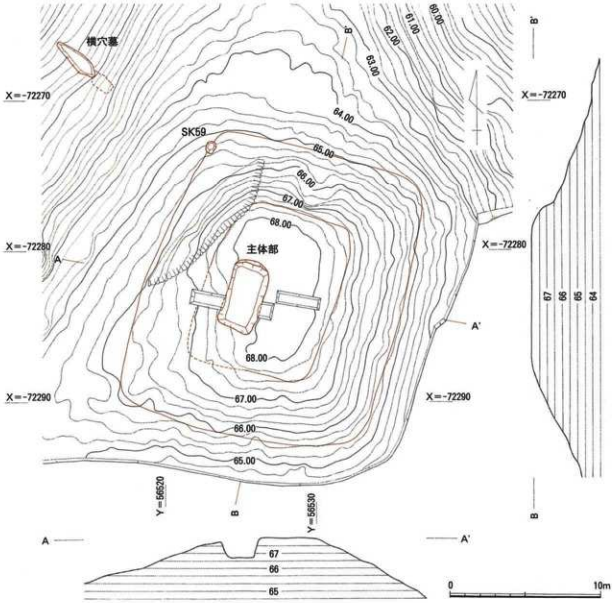
墳丘には、主体部上面で２個、西裾部で２個、北裾部で１個の礫を検出した以外、外装施設らしきものは認められなかった。

覆土（第78図）

墳丘上には主な土層として、上層に第１層の褐色土、下層に第２層、第４層、第５層が堆積していたが、いずれも自然堆積層と考えられ、盛り土は認められなかった。また、周溝施設もなかったものと思われる。

主体部（第79図）

墳頂部の精査では主体部を検出できなかったため、やむを得ず墳丘の東西方向及び南北方向にト



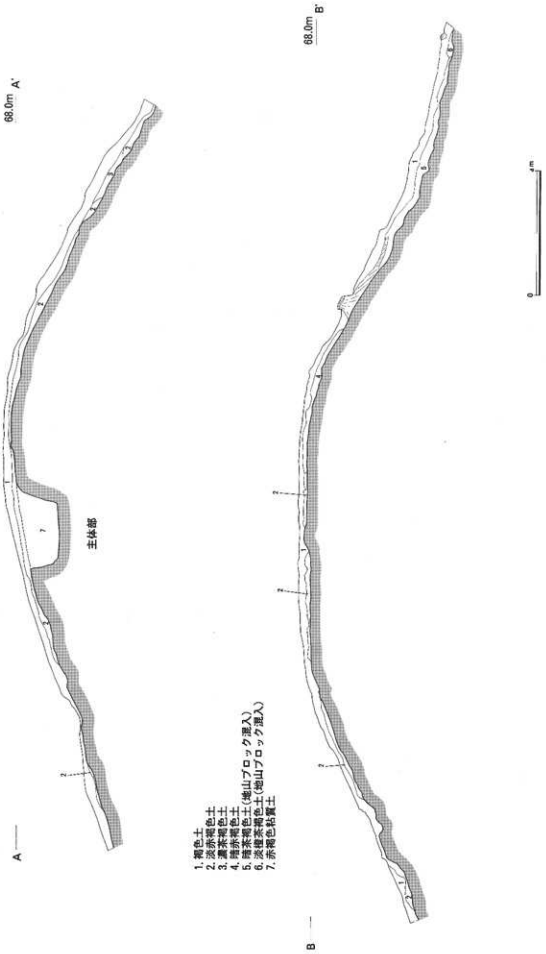
第77図　権現山古墳墳丘測量図（S＝1/250）

レンチを入れた。その結果、東西トレンチの断面に地山の土と非常によく似た赤褐色粘質土が地山を切って堆積しているのを確認し、権現山古墳の主体部と判断した[18]。

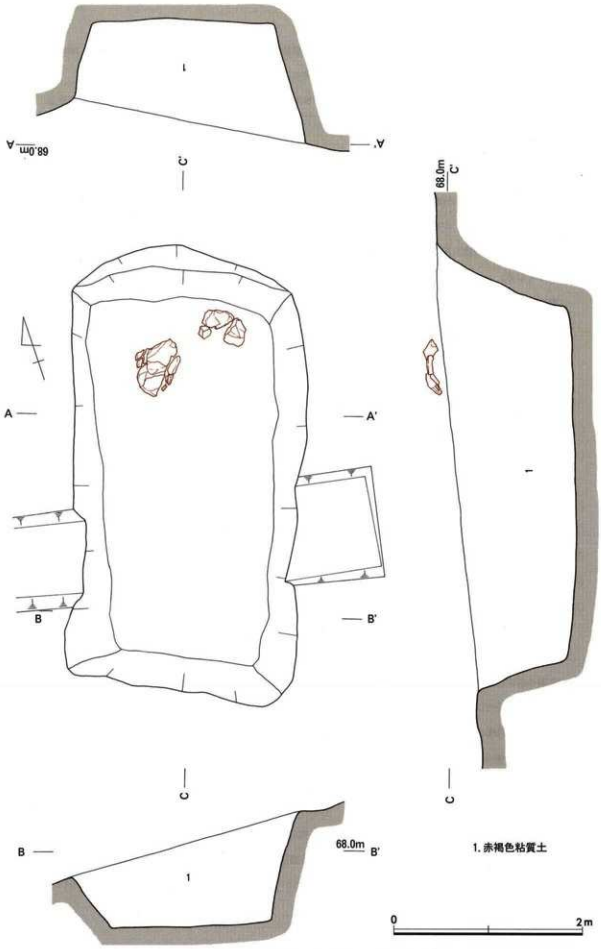
主体部は、墳頂部の中央よりも西側に位置し、主軸はN－18°－Eを測る。主体部上面の北端には復元長60cm程の角礫が置かれていたが、土器などは認められなかった。

主体部の規模は、長軸（南北）が4.6m、短軸（東西）が2.4m、深さが東肩で1.35m、西肩で0.8mを測る長方形の1段墓壙である。墓壙は逆台形状に掘り込まれており、床面は平坦で、レベルもほぼ水平であり、木棺の痕跡などは検出できなかった。頭位方向は地表面に40cm～60cmの角礫が2個置かれていた北側であろうか。出土遺物は、墳丘上の表土から須恵器甕の細片を1点採集したほかは、全く認められなかった。

年代　権現山古墳に関連した出土遺物が皆無のため、詳細な年代は不明であるが、北西隅墳裾における長廻遺跡ＳＫ59との切り合いから、松山編年の夫敷中層式（初期須恵器）よりも先立つことは確かである。



第78図　権現山古墳墳丘土層図（S＝1/120）



第79図　権現山古墳主体部実測図（S＝1/40）

（1）島根県教育委員会　「長廻遺跡の調査　『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書XIII』　2001

（2）本稿で引用する土器編年の山典については、全て凡例に記したとおりである。

（3）松山智弘　「土器から見た出雲における前期古墳」『第30回山陰考古学研究集会資料集』山陰考古学研究集会　2002
の「1．土器編年の概要」と表1大木式・小谷式編年」を参考とした。

（4）前掲　註(3)に同じ

（5）松山智弘　「小谷式の再検討　－出雲平野における新資料から－」『島根考古学会誌』第17集　島根考古学会　2000
の　(3)小谷式甕形土器の細分」の中で述べられている。

（6）県内ではこれまでに、安来市古佐布穴神2号横穴墓、同3号横穴墓、安来市清井町清瀬塩田遺跡ＳＸ01、東出雲町揖屋渋山池古墳群1号横穴墓、東出雲町出雲郷島田池遺跡6区7号横穴墓と、いずれも古墳及び横穴墓関係の遺構から見つかっている。

（参考文献）

島根県教育委員会　「穴神横穴墓群」『一般9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書10』　1995

安来市教育委員会　「清瀬塩田遺跡」『清瀬地区発掘調査報告書』　1999

島根県教育委員会　「渋山池古墳群」『一般9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書西地区XI』　1998

島根県教育委員会　「島田池遺跡」『一般9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書西地区VIII』　1997

（7）前掲　註(1)参照。以下、同じ。

（8）松山智弘　「出雲における古墳時代前半期の土器の様相　－大東式の再検討－」『島根考古学会誌』第8集　島根考古学会　1991　を参考とした。

（9）松江市教育委員会　「池ノ奥古墳群」『松江東工業団地内発掘調査報告書』　1990

（10）広江�clear史　「島根県における中世土器について」『松江考古』第8号　松江考古学談話会　1992

（11）島根県教育委員会『蔵小路西遺跡　一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2』　1999

（12）前掲　註(3)参照

（13）前掲　註(8)の文献の中で、口縁部と杯部の境に段をもつもの、突帯を付けるなどしてアクセントを付けたものを高坏Bとしている。第53図4・6は段を有しないものの、高坏Bに分類される第53図3と製作技法や形態が類似することから、本書では高坏Bの一例として捉えた。

（14）鉄鏃の形式分類及び年代については、愛媛大学法文学部助教授　村上恭通氏に御教示いただいた。

（15）前掲　註(11)に同じ

（16）横穴墓から同様の壺が出土した例としては、安来市黒井田町高広遺跡Ⅴ区1号横穴出土の片口壺（大谷編年出雲4期）、松江市浜乃木奥山遺跡Ｂ－Ⅱ号横穴出土の広口壺（大谷編年出雲6期）などがある。

（参考文献）

島根県教育委員会　『高広遺跡発掘調査報告書　－和田団地造成工事に伴う発掘調査　』　1984

島根県教育委員会　『島根女子短期大学移転予定地内　奥山遺跡発掘調査報告書』　1988

（17）表面に文様を施すお製紡錘車は、出雲市古志町古志本郷遺跡ＨⅠ区ＳＤ01で1例体、同遺跡Ｋ区遺物包含層から3個体、大原郡加茂町神代後遺跡7号横穴墓から1個体出土している。なお、古志本郷遺跡Ｋ区の出土遺物については調査担当者の平岡利栄氏から教示を受けた。

（参考文献）

島根県教育委員会　「斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書XI　古志本郷遺跡Ⅱ』　2001

島根県教育委員会 「湯後遺跡」『中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12』 2001

(18) 実際には、調査担当者の能力不足により、トレンチ調査でも主体部なのかどうか判断がつきかねていたのであるが、調査指導で大谷晃二氏（島根県立松江北高等学校教諭）、田中義昭氏（島根県文化財保護審議会委員）からの御指摘を受け、調査終了前に急遽検出した。

第5章　小　　結

長廻遺跡・権現山遺跡は、平成11年度～平成13年度までの調査の結果、弥生時代～古墳時代を中心とする複合遺跡であることが判明し、弥生時代後期初頭～古墳時代前期初頭の竪穴住居跡、弥生時代中期末～後期初頭と古墳時代後期の加工段、古墳時代前期～後期にかけての土壙墓や土坑状遺構、そして権現山古墳などの多くの遺構を検出した。平成11年度の調査内容については既に報告されているところであるが[1]、これも含めて簡単な整理を行い、まとめとしたい。

1　長廻遺跡について

(1) 弥生時代～古墳時代前期

各調査区を通して検出した遺構は、松本編年Ⅳ様式～Ⅴ－1様式と松山編年大木式（草田編年6期古段階相当）～小谷4式に大別できる[2]。

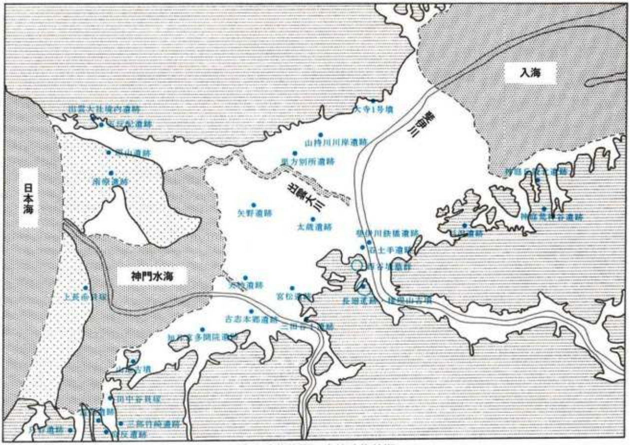
松本編年Ⅳ様式～Ⅴ－1様式に相当する遺構としては、平成11年度調査（以下「H11」という。）のⅡ区ＳＩ03、加工段03・05、ＳＤ03、ＳＫ03や平成12年度調査（以下「H12」という。）のⅡ区加工段1、ＳＤ07（H11Ⅱ区ＳＤ03と同一遺構）、ＳＫ29・35、平成13年度調査（以下「H13」という。）のⅣ区ＳＤ22・23などがある。長廻遺跡ではそれ以前の遺構が確認されていないことから、H11Ⅱ区ＳＩ03や加工段05[3]、H12Ⅱ区加工段1などの築造をもって集落が開始されたものと考えられる。また、H13Ⅳ区ＳＤ22・23の覆土には松本編年Ⅲ　1～2様式の土器も混入しており、周辺に当該年代の遺構が存在した可能性も示唆しておく。

同時期の出雲平野の拠点集落は、いずれも標高0ｍ～10ｍの微高地に営まれており、標高30ｍを越す丘陵部に造られた集落は当遺跡以外に今のところ顕例がない。当該時期には拠点集落である古志遺跡群や天神遺跡、小山遺跡などで大規模な環濠が廻るようになることがわかっており[3]、このような社会情勢の変化が長廻集落の形成に何らかの影響を与えたのかもしれない。

松本編年Ⅴ－2様式～Ⅴ－3様式に相当する時期の遺構や遺物は検出されていない。この時期には、当遺跡から約1㎞北に所在する西谷丘陵で墳墓が盛んに造られており[3]、斐伊川水系では山持川川岸遺跡、神戸川水系では古志遺跡群や四絡遺跡群などが盛行期を迎える[4]。西谷丘陵以南はそれほど重要な地域とは見なされず、当遺跡の集落も一時的な廃絶状態にあったのかもしれない。

松山編年大木式（草田編年6期古段階相当）～小谷4式相当期の遺構では、H11Ⅱ区ＳＩ01・02、ＳＤ02？、H12Ⅱ区ＳＩ01・02・02－2・03、加工段03の壁際の溝、ＳＤ04？、ＳＤ13～15、ＳＫ06・30・31・46、Ⅲ区ＳＫ55、H13Ⅳ区ＳＤ24？などがあげられる。このうち、竪穴住居跡（H11Ⅱ区ＳＩ01・02、H12Ⅱ区ＳＩ01・02・02－2・03）や関連施設の可能性もあるH12Ⅱ区ＳＫ30・31・46はいずれも尾根西側緩斜面で検出されており、この区域が長廻遺跡の居住区域であったものと考えられる。これに対して尾根上及び東側斜面には住居跡は認められず、土壙墓であるH12Ⅱ区ＳＫ06・Ⅲ区ＳＫ55などが見つかっていることから、住居以外の用途に供された区域と思われ、用途による区域分けがあったのではないかと推測される。

竪穴住居跡は大木式～小谷2式（草田編年7期相当）頃に比定され、弥生後期中葉～後葉に廃絶された集落がこの時期に再び営まれた様子が窺えるが、小谷3式以降に継続する住居跡が確認できないことから、人々がこの地に生活した期間は極めて短かったものと思われる。



弥生時代後期～古墳時代前期

古墳時代中期～後期

凡例 砂丘 山地 水域

第80図　出雲平野の主要遺跡分布状況

（出雲市教育委員会『遺跡が語る古代の出雲』より引用して、一部改変した）

ここで出雲平野の様相を見ると、古志本郷遺跡や大神遺跡などの神戸川水系の拠点集落では、小谷2式までに環濠が大量の土器とともに埋め戻され、ほとんどの集落は廃絶や縮小していくようであり、集落の中心は斐伊川水系（山持川川岸遺跡、里方別所遺跡、斐伊川鉄橋遺跡、石上手遺跡など）と神西湖南岸（庭坂遺跡、三部竹崎遺跡、只谷遺跡など）に移る様子が窺える[5]。

長廻遺跡はこうした過渡期に集落が再形成されており、出雲平野の集落の動きと何らかの因果関係があったものと推測されるが、その内容は明らかでない。ただ、当遺跡は中国山地から斐伊川を下って出雲平野へと至る入口付近にあり、北山山麓から遠くは宍道湖まで眺望できる立地条件を有している。出雲平野で前述のような変動が起こっていたとすれば、当然混乱に備えて要所というべき出雲平野の入口は押さえておく必要があり、危機管理的な意識のもとに眺望のきく丘陵上に集落を配置したと考えても過言ではないであろう[6]。

(2) 古墳時代中期

当該時期の遺構は、H11Ⅱ区ＳＫ02、H12Ⅱ区ＳＤ05・09、Ⅲ区ＳＤ20、ＳＫ58？、H13Ⅳ区ＳＫ59・66・67、焼土坑１・２？などがある。また、当遠跡の谷を隔てた東側の斜面では、出雲市教育委員会が平成12年度の調査で竪穴住居跡１、加工段１、溝状遺構１を検出している[39]。前段階の松山編年小谷３式～４式相当期には、溝状遺構や土坑などが点在するのみで、人々が生活した形跡はあまり認められなかったが、出雲市教育委員会の調査成果が示すとおり、松山編年大東式相当期に再びこの地が住居として利用された様子が窺える。ただし、検出された竪穴住居跡は１棟だけであり、地形的な制約や次の時期の住居跡が認められないことなどから、短期的で、単独か極めて小規模な構成であったものと考えられる。同時期の遺構としては、尾根東側の緩斜面にH12Ⅲ区ＳＤ20やＳＫ58などが認められる程度で、遺跡としての利用頻度はそれほど高くないようである。

松山編年夫敷下層式～夫敷上層式に相当する遺構としては、尾根上のH13Ⅳ区ＳＫ59や尾根東側斜面の溝状遺構（H12Ⅱ区ＳＤ05・Ⅲ区ＳＤ19）、土坑（H13Ⅳ区焼土坑１・２？）などがあげられるが、住居跡は確認されていない。このうちＳＫ59は権現山古墳の墳裾に造られた土壙墓であり、同じ尾根上には前述の土壙墓H12Ⅱ区ＳＫ06も存することから、尾根上は墓域として意識されていたのでないだろうか。また、その他の遺構配置から、この時期には尾根東側斜面に遺跡の中心があったと推測されるが、遺構数が乏しいため、さほど積極的に利用されていたものとは思えない。

出雲平野では、古墳時代中期の集落についてはほとんど知られていなかったが、近年の発掘調査により、神戸川水系の古志本郷遺跡や天神遺跡、三田谷Ⅰ遺跡、浅柄遺跡、井原遺跡、斐伊川水系の中野西遺跡や中野美保遺跡、荻杼Ⅱ遺跡、曽原Ⅱ・曽原Ⅲ遺跡などで遺構や遺物が検出され[7]、古墳時代前期中葉～後葉にかけて衰退・廃絶傾向にあった地域にも人々が戻って来る傾向がみられることがわかってきた。このうち、三田谷Ⅰ遺跡では中期の竪穴住居跡が12棟確認されており、この地域の中心的な集落であったものと考えられるが、その他の遺跡は点在的で、現状では集落としての広がりは認めがたい。

長廻遺跡は、元から派生集落的な位置づけにあるため、時期ごとの盛衰はさほど感じないが、松山編年小谷３式～４式相当期には衰退傾向にあり、大東式以降に再利用が始まる状況から、平野部の遺跡と同様の動きが追えるものと思われる。

(3) 古墳時代後期

古墳時代後期の遺構は、H11Ⅱ区及びH12Ⅱ区を中心とする尾根西側斜面に集中しており、尾根東側で当該時期と判断されるものは、H12Ⅲ区加工段5とSK57？のみである。

尾根西側斜面では、H11Ⅱ区加工段1・2、SK03、H12Ⅱ区加工段2～4、SD08～11、Ⅲ区SD18、H13Ⅳ区横穴墓などがある。このほか、遺構の概要でも述べたとおり、H12Ⅱ区中央部の緩斜面からは多数の土坑や柱穴が見つかっており、これらの多くは当該時期の遺構であると思われる。また、長廻遺跡の谷を隔てた西側丘陵には、長廻横穴墓群の1・2号横穴墓があり[107]、これも同じ時期のものと思われる。

後期の遺構のうち最も古いものは、大谷編年出雲2期（TK10併行期）相当期のH12Ⅲ区加工段5で、須恵器のほかに赤色顔料を塗布した高坏や鉄鏃などが出土している。これらは、墳丘祭祀や副葬品などに用いられた可能性があるため、加工段5は盛り土を消失した方墳ではないかと思われる。出雲平野では、当該期の古墳は、今のところ天神原古墳くらいしか確認されておらず[108]、この見解が妥当であれば、後期前葉の古墳の一例を示すことになると思われる。

出雲2期（TK10併行期）の遺構はH12Ⅲ区加工段5以外にはないため、前段階と同じく積極的に土地利用が行われた様子は窺えず、これに続く出雲3期（TK43併行期）も遺構・遺物が認められないことから、同様の状態にあったものと思われる。

大谷編年出雲4期（TK209併行期）～出雲6期（飛鳥Ⅱ併行期）になると、遺構・遺物量ともに増加する。前述の尾根西側斜面で検出した遺構と長廻横穴墓群がこれに該当し、長廻遺跡が最も盛行する時期である。当該期の明確な住居遺構は検出していないが、須恵器の蓋坏類や土師器の甕、移動式竈、土製支脚などが多く出土したH11Ⅱ区加工段01（出雲4期～5期）や、その斜面西側下方に位置するH12Ⅱ区加工段3（出雲5期～出雲6a期）、H12Ⅱ区中央部にある加工段04などが準拠する資料であろう。また、加工段04周辺の多くの土坑や柱穴群、同じ地区にあるSD08～11（いずれも出雲5期頃）周辺も確信はないが住居区域となっていた可能性が高い。

この時期になぜ長廻遺跡が盛行するのかを考える上で、周辺の丘陵斜面に所在する横穴墓群の存在が注目される。これまでにも何度か述べたとおり、長廻遺跡周辺には長廻横穴墓群（出雲5期～6期）や権現山横穴墓群（7世紀頃）が分布しており[109]、当遺跡でもH13Ⅳ区で横穴墓（出雲4期）1基を検出している。これらの横穴墓を築造するためにはある程度の期間が必要であり、作業の効率化を図るためには墓域の近隣地域に住居を定めた方が都合がよかったのではなかろうか。長廻遺跡はこの条件を満たす立地条件にあり、概ね周辺の横穴墓群の築造年代をカバーできる出雲4期（TK209併行期）～出雲6期（飛鳥Ⅱ併行期）頃まで存続することなどから、横穴墓を築造した人々が居住していた集落であった可能性が考えられる[110]。

出雲平野では、古墳時代後期中葉～後葉になると、神戸川水系を中心に今市大念寺古墳や上塩冶築山古墳、地蔵山古墳などの西部出雲地方を代表する首長墓が築かれ、終末期になると全国でも最大規模を誇る上塩冶横穴墓群などの横穴墓が盛行する[111]。これらのバックボーンとなる当該期集落跡の分布状況や立地などについては、出雲考古学研究会や田中義昭氏らによって既にまとめられているが[112]、近年、古志本郷遺跡や浅柄遺跡、壱丁田遺跡、角田遺跡、藤ヶ森遺跡などの発掘成果により、神戸川の両岸に拠点的な集落が成立・発展していく様子が明らかになってきた[113]。

一方、斐伊川水系でも、仏教山周辺に出西小丸古墳群や剣先横穴墓群、海の平横穴墓群、北山山

麓に上島古墳や中村1号墳、大寺2号墳などの後期古墳や横穴墓群が築かれる。これらを支えていた拠点的な集落については今のところ明らかになっていないが、遺物散布地の状況などから、おそらく神戸川水系と同様に斐伊川の自然堤防上に存したものと思われる。長廻遺跡はこれらの周りに派生した集落の一つであり、拠点的な集落と共に周辺の古墳や横穴墓の築造を支える役目を果たしていたのではないかと推測される。

次に、H13Ⅳ区横穴墓について触れておきたい。この横穴墓は軟質の凝灰質砂岩に穿たれており、縦長の平面プランを呈する。奥壁から徐々に幅広になって、袖部分は明確に表現されず、そこから次第にすぼまって玄門部へと続く。天井形式はアーチ形をしていたものと思われ、羨道と玄室内から大谷編年出雲4期（TK209併行期）に相当する須恵器が出土している。

出雲西部の横穴墓は、現在のところ、出雲4期のものが最も古いと考えられており[28]、同時期の類例としては、神戸川水系の上塩冶横穴墓群第34支群1号～6号横穴墓、地蔵堂横穴墓群第2支群（地蔵堂北横穴墓群）1号・2号横穴墓、地蔵堂横穴墓群第3支群1号横穴墓、祝廻横穴などがある[29]。これらは、ほとんどが軟質な岩盤に穿たれており、平面形は縦長で、袖部分が明確でないものもあり、天井形式はアーチ形を呈する。床面には周囲に溝を回らしたり、礫床や須恵器床を造るものもある。

H13Ⅳ区横穴墓には排水溝や礫床などはみられないものの、形態は出雲4期の普遍的な横穴墓の特徴を備えており、出土遺物の年代も調和的であることから、出雲西部では比較的古い時期の横穴墓であると考えられ[30]、斐伊川水系における横穴墓築造の起点の一つだったのではないだろうか。

(4) 奈良時代以降

奈良時代以降の遺構としては、H12Ⅲ区ＳＤ18、ＳＫ56、H12Ⅱ区ＳＫ14、H11Ⅰ区大岩周辺の祭祀遺構、Ⅱ区ＳＤ01、H12Ⅱ区ＳＫ01・02・04などがあり、奈良時代以降も断続的に利用されたことが窺えるが、遺構数はわずかである。古墳時代後期に盛行した長廻遺跡は、遺構の検出状況からみると、奈良時代以降急速に衰退していったものと思われる。

H12Ⅲ区ＳＤ18、ＳＫ56からは奈良時代の須恵器が出土しており、時期的にはＳＤ18の方がやや古い。ＳＤ18は7世紀末～8世紀初め頃の大型溝状遺構（長さ18.0m）であるが、両端とも自然に消滅する形で途切れており、周辺に関連する遺構も認められないため、性格がはっきりとわからない。遺構の概要でも述べたが、山城のような「堀切」的施設や地域を区画するために供された可能性を提案しておきたい。ＳＫ56は8世紀中葉の土壙墓と考えられ、当遺構をもって古代の遺構は途切れる。

奈良時代における出雲平野の様相は、天平5年（733年）に編纂された『出雲国風土記』によりほぼ窺い知ることできる[23]。当時の出雲平野は古代の行政区画の神門郡と出雲郡の一部からなり、中央政権の律令制が浸透していく中で、斐伊川・神戸川の旧自然堤防上の微高地を中心に集落が展開していったものと思われる。この時期の遺跡としては、神門郡家推定地である古志本郷遺跡、墨書土器が多数出土した青木遺跡、「高岸神門」などの記載がある木簡が出土した三田谷Ⅰ遺跡をはじめ、高浜Ⅱ遺跡、小山遺跡、藤ヶ森遺跡、天神遺跡、浅柄遺跡などがあり[32]、官的施設や集落跡として利用されたものと推察される。これらの遺跡の多くは古墳時代後期から継続するものである。

こうした動きと相反するように長廻遺跡はその役割を終わらせる。その理由は明らかでないが、

上記(3)の項で述べた集落の性格が妥当であるとすれば、古墳文化の終焉に伴い、横穴墓の築造が行われなくなり、集落を継続する意義を失ったのではないかと想像される。

その後、長廻遺跡では、12世紀代のH12Ⅱ区ＳＫ14と中世の土師質土器が若干認められる程度で、近世以降に農地などとして利用されるまで廃絶状態にあったものと推察される。H11Ⅰ区大岩周辺の祭祀遺構、Ⅱ区ＳＤ01、H12Ⅱ区ＳＫ01・02・04などは、この地が近世以降に再利用された後のものであろう。

2　権現山古墳について

権現山古墳は、丘陵付け根近くの尾根上に位置する方墳であり、墳丘は南北19m×東西17mを測る。墳丘及び主体部から古墳の年代を示す遺物が出土していないため、明確な築造年代は明らかでないが、松山編年夫敷中層式（初期須恵器）相当期のＳＫ59が墳丘の北東裾部を切っていることから、この時期よりも古いものと考えられる。ここでは、墳丘や主体部の立地・形態などを手懸かりに、権現山古墳の位置づけについて若干の検討をしておきたい。

墳丘　権現山古墳の特徴としては、墳丘が南北に２ｍばかり長い長方形を呈しており、墳丘は地山を削り出して造られ、外表には盛り土や葺き石が認められないことなどがあげられる。また、主体部は素掘りで、主軸の向きはＮ－18°－Ｅであった。

出雲地方の古墳時代前期の古墳には方形の墳丘をもつものが多いことや、方墳や前方後方墳などの方形原理の古墳が、弥生墓である四隅突出型墳丘墓の系譜を引き継ぐ在地的な墳形であることは既に指摘されているとおりである[25]。これに加えて、外表施設としての葺き石の類を備えない点が出雲地方の中小規模古墳共通の特徴であることも確認されている。

また、松山智弘氏の研究成果に拠れば[26]、四隅突出型墳丘墓は草田編年５期の中で終焉を迎え、草田編年６期段階（松山編年大木式・小谷１式）には、松江市社Ｂ１号墳や加茂町上井・砂１号墳などの方墳が出現し[26]、出雲においては松山編年小谷３式までは方墳ないし前方後方墳のみが築かれ、小谷３式末期～小谷４式にかけて小地域の首長墓は円墳へと変化し円丘原理へシフトするようである。

これらの様相から、権現山古墳は在地的な墳形を継承する長方形の墳丘を有し、且つ、外表施設に葺き石などをもたない新しい特徴も備えた、新旧要素の混在する古墳であるといえるであろう。

主体部構造　権現山古墳の主体部は長軸を南北方向にとり、墳頂部の南北中心線から西へ3.5mほどずれた位置に主軸を置く。規模・形態は、上端で南北4.6m×東西2.4m、深さ0.8m～1.35mを測る長方形の１段墓壙で、木棺の痕跡などは確認していない。

墳形が方墳で長軸が３ｍ以上の墓壙をもつ前期古墳の類例としては、松江市社Ｂ１号墳第１主体部（5.0m）・第３主体部（3.8m）、同２号墳第１主体部（3.3m）、八雲村小屋谷３号墳[25]（約４ｍ）、鹿島町奥才11号墳（5.35m）・同33号墳（６ｍ）・同35号墳[27]（4.4m）、加茂町上井・砂１号墳第１主体部（3.4m以上）・第２主体部（4.2m以上）、同３号墳（3.75m）、同４号墳（3.6m）、同５号墳第１主体部（4.55m）・第２主体部（3.3m）、同６号墳？（2.9m以上）、東出雲町古城山古墳[28]（約3.8m）、玉湯町布志名大谷１遺跡１号墳第１主体部（5.44m）・第２主体部（4.64m）・第４主体部（4.32m）・第５主体部[29]（3.47m）、宍道町上野１号墳第１主体部（8.1m）・第２主体部[30]（3.7m）、出雲市西谷７号墓第１主体部[31]（4.1m）などがある。これらの棺施設には、社Ｂ１号墳第１主体部

のように「木棺木槨」のものや布志名大谷1号墳第1主体部、上野1号墳第1主体部のように「粘土槨」をもつものもみられ、内部未調査の西谷7号墓を除いて、棺には「刳り抜き割竹形木棺」ないしは「箱形木棺」が用いられるようである。

権現山古墳の場合には、検出状況から素掘りの墓壙であったことを否定できないが、上記の類例などを考慮すると、木棺が納められていた可能性も想定できるのではないかと考えられる。

主体部上の石　墓壙上の北端には、長さ40cmと60cmばかりの石があり、墓壙を埋め戻した後に置かれたものと考えられる。墓壙埋め戻し後に礫や砥石・石杵などを「標石」として置く例は、山陰を中心とする弥生時代後期中葉～古墳時代前期の墳墓に認められ[52]、近隣の出雲市西谷3号墓や同7号墓第1主体部などでもみられる。礫を置く例の多くには「供献土器」の集積が確認でき、山雲地方の弥生時代後期の墳丘墓等で行われた墓上祭祀を古墳時代前期に引き継いだ行為と理解される。

権現山古墳では墓壙上に土器の集積等は認められないため、礫が墓上祭祀に伴うものかどうかは判断できないが、墓壙直上に置かれていたことは確かであるため、「墓標」的な役割を担っていたのではないかと考えられる。また、その仮定の上で、礫の遺かれた北側が墓壙の頭位であったものではないだろうか。

頭位方向　権現山古墳の主体部は、上記のとおり北側頭位と推定される。山雲平野で現在確認されている前期古墳の主軸方向は、大寺1号墳（前方後円墳）がN－3°－W、山地古墳（円墳）が第1・第2主体部ともにN－25°－E、弥生墓の可能性を残す三田谷1号墓がN－54°－E、西谷7号墳第1・第2主体部は内部未調査のため定かでないが、磁北からやや東側へ振れるようである[53]。

主体部の頭位方向の分析については、安来市門生黒谷Ⅲ遺跡（五反田1号墳）や安来市大成古墳、前述の松江市社日古墳などの調査報告書でも検討が行われているところであり[54]、いずれも埋葬頭位に意味を見いだそうとするものである。山雲平野周辺においては、前期古墳の類例があまりにも少なく、また時期差もあるため、上記の状況から頭位による優位性や地域単位の特性などを判断することはできないが、方向性としては北指向と捉えることができるかもしれない。

権現山古墳の位置づけ　これまでの検討の結果、下記の特徴があげられる。

①弥生墓である四隅突出型墳丘墓の系譜を引き継ぐ長方形墳である。

②墳形は地山を削り出して造られており、葺き石などの外表施設を有しない。

③主体部は素掘りの大型土壙であり、他の類例から木棺墓の可能性も考えられる。

④主体部直上の礫は「墓標」的な可能性があり、礫の位置から北頭位と考えられる。

⑤主体部長軸は南北方向であるが、階層的優位性や地域性を表すものかどうかは判断できない。

⑥遺物がないため詳細な築造年代は不明であるが、①～⑤の特徴を考えあわせると、方墳原理が残る松山編年小谷3式以前のものである可能性が強く、前方後円墳集成編年1～3期の範疇に入るものと推察される[55]。

上記の①、④は四隅突出型墳丘墓から引き継がれる要素で、②の外表施設を備えない点は出雲地方の中小規模古墳共通の要素であり、権現山古墳は弥生墓と前期古墳という両面の特徴を備えていると言える。この特徴を「四隅突出型墳丘墓から定型化古墳への過渡期のスタイル」とみるのか、「弥生墓と隔絶した定形化古墳のスタイル」とみるのかを判断するのは困難であるため、今後の類例の増加を待って再検討すべき課題としたい。

さて、これまでの類例で何度も扱った近接する西谷7号墓の時期については、松山智弘氏に拠れ

ば前方後円墳集成編年1期[56]、報告書では草田編年7期（松山編年では小谷2式相当）となっており[57]、前方後円墳集成編年1～2期の範疇におさまるものと思われる。西谷7号墓と権現山古墳の新旧関係は明らかでないが、墳形が長方形あり、外表施設が認められず、墓壙上から標石が確認される点など、権現山古墳と共通する要素を多くもっており、権現山古墳と位置的にも近いことから、何らかの関連性があったことが予測される。ただし、西谷7号墓の場合には、同丘陵上に中期古墳（16号墓）などが存し、丘陵上である程度の系譜が追えることから、権現山古墳とは別系譜の首長であった可能性も考慮しておく必要があるだろう。

なお、権現山古墳が都出比呂志氏の提唱する前方後円墳体制下でどの様な位置づけにあったのかは[58]、他の多くの事例と比較検討して判断せねばならず、また、検討資料に乏しいため、ここで触れることは避けたいが、権現山古墳を出雲平野における古墳形成期の一例として捉えることは可能であろう。

3　まとめ

最後に長廻遺跡と権現山古墳の関連について触れておきたい。長廻遺跡の存続期間は、おおよそ弥生時代中期後半～奈良時代までで、中世にも若干の利用があったようである。この間、竪穴住居集落が営まれる弥生時代後期～古墳時代前期（松本編年V－1様式と松山編年大木式（草田編年6期古段階相当）～小谷2式（草田編年7期相当））と、加工段や土坑・柱穴群が穿たれる古墳時代後期（大谷編年出雲4期～6期）の2時期にピークがあったものと考えられる。一方、権現山古墳は墳形やそのほかの状況から前方後円墳集成編年1～3期の範疇に入るものと考えられ、概ね松山編年大木式後半～小谷3式前半に比定される。ただし、今のところ出雲平野で松山編年大木式の土器が出土した古墳は認められないことから（方形周溝墓としては、三田谷1号墓から大木式の甕が出土している）、権現山古墳の上限を松山編年小谷1式相当期と考えてもよいかもしれない。したがって、長廻遺跡と権現山古墳の存続期間を比較すると、松山編年小谷1式～小谷2式という重複期を見て取ることができ、両遺跡が併存していた可能性も考えられる。この場合には、権現山古墳の築造に長廻集落の人々が関わったのかもしれないが、派生的位置づけの長廻集落が古墳を築造する力を有していたとは考えにくいため、長廻集落と縁故関係にあった拠点集落の首長墓と考えた方が妥当であろう。また、次段階の松山編年小谷3式以降も長廻遺跡は細々と継続するようであるので、小谷3式相当期に権現山古墳が築造されたとしても、被葬者はやはり長廻集落と関係のあった首長ではないかと思われる。

長廻遺跡ではこの他に、古墳時代後期前葉頃（大谷編年出雲2期）の古墳と考えられるH12Ⅲ区加工段5と古墳時代後期（大谷編年出雲4期）のH13Ⅳ区横穴墓を発見したが、これらが権現山古墳の被葬者の系譜を引くものであるかどうかは不明である。

以上、長廻遺跡と権現山古墳について簡単な整理を行ったが、今回の調査成果を主体とした個別の検討に終始したため、かなり恣意的な見解になっているものと思われる。本来であれば、もっと広い視野に立った広域的な比較検討や時代ごとの詳細な分析が必要であることを実感しているが、これについては今後の調査・研究に委ねることとする。

しかしながら、出雲平野では希な丘陵上の集落跡や前期古墳を発見したことは、集落及び古墳の形成過程を考える上で貴重な資料となるものであり、今後の類例の増加を待って、さらなる検討が加えられることを期待したい。

第5章　註

（1）島根県教育委員会　「長廻遺跡の調査」『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書XIII』 2001

（2）遺物では、H12Ⅱ区SD10、SK31から草田編年5期の土器が出土している。なお、本文中で「？」のつく遺構は、当該期と考えられるが、他の年代の遺物が混入する等の理由により断定できない意を表すものである。

（3）H11Ⅱ区加工段05は、前掲　註(1)文献で竪穴住居跡の可能性が示唆されており、H12Ⅱ区加工段1については田中義昭氏（島根県文化財保護審議会委員）から住居に利用した可能性があるという指導を得た。

（4）弥生時代の環濠集落については下記の文献を参考にした。

（参考文献）

ア　出雲市教育委員会　『市道本郷新宮線道路改良工事に伴う　古志本郷遺跡第6次発掘調査報告書』 1998

イ　出雲市教育委員会　『出雲市駅付近連続立体交差事業地内　天神遺跡第7次発掘調査報告書』 1997

ウ　出雲市教育委員会　『市道渡橋平野線道路改良工事に伴う　小山遺跡第2地点発掘調査報告書』 1998

エ　出雲考古学研究会　『古代の出雲を考える5　出雲平野の集落遺跡Ⅱ　－矢野遺跡とその周辺－』 1986

（5）出雲市教育委員会　『西谷墳墓群』 1999

（6）出雲市教育委員会　『遺跡が語る古代の出雲　－出雲平野の遺跡を中心として－』 1997

（7）古墳時代前期の集落動向については下記の文献を参考にした。

（参考文献）

ア　前掲　註(6)の文献に同じ

イ　出雲考古学研究会『古代の出雲を考える3　出雲平野の集落遺跡1』 1983

（8）弥生時代の高地にある集落については、安来平野周辺の弥生集落を中心に陽徳遺跡や門生黒谷Ⅲ遺跡などの報告書で検討が行われている。これらの集落はいわゆる「高地性集落」という概念で捉えられており、そのピークは草田編年1期（後期前葉）と草田編年4～5期（後期後葉～終末）の2時期にあるようである。出雲平野縁辺の丘陵部で集落が発見された例は当遺跡以外にないため、この概念に該当するものかどうかはさらなる類例の増加を待って検討すべきと考えるが、河川交通の要所に位置し、集落の存続期間が極めて短いことなどから、一時的な監視施設であったと評価することは可能であると思われる。

（参考文献）

ア　島根県教育委員会　「陽徳遺跡」『一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書11』 1995

イ　島根県教育委員会　「門生黒谷Ⅲ遺跡の調査」『一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書14』 1998

（9）出雲市教育委員会から提示いただいた『長廻遺跡発掘調査概報』2001　を参考とした。方形の竪穴住居跡からは松山編年大東式の完形壺が出土したほか、土器溜まりや加工段からも同時期の土器が見つかっている。

（10）出雲平野の古墳時代中期集落については、下記の文献を参考にした。

（参考文献）

ア　前掲　註(6)の文献に同じ

イ　田中義昭・西尾克己　「出雲平野における原始・古代集落の分布について」『山陰地域研究』第4号　島根大学山陰地域研究センター　1988

ウ　島根県教育委員会　『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書VI　古志本郷遺跡Ⅰ』 1999

エ　島根県教育委員会　『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書XI　古志本郷遺跡Ⅱ』 2001

オ　出雲市教育委員会　『市道山陰本線北沿線設置予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書　天神遺跡（第10次発掘調査）』 2002

カ　島根県教育委員会　『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ　二田谷Ⅰ遺跡』 1999

キ　出雲市教育委員会　『西山雲駅南土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　浅柄遺跡』 2000

ク　出雲市教育委員会　『新内藤川広域基幹河川改修事業地内　井原遺跡発掘調査報告書』 2002

ケ　出雲市教育委員会　『出雲市中野町所在　中野西遺跡　出雲市北部第二土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書－』 2002

コ　出雲市教育委員会　『中野美保遺跡Ⅰ・『荻杵Ⅱ遺跡Ⅰ『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書第11集』 2001

サ　菅原Ⅱ・菅原Ⅲ遺跡は出雲市湖岸町に所在する集落跡で、平成14年度に島根県教育庁埋蔵文化財調査センターが調査しており、調査担当者の久保田氏より教示を得た。

(11) 前掲　註(1)の文献に同じ

(12) 天神原古墳は出雲市下古志町に所在し、盛り上の大部分が消失し基底部のみが残る推定径約33mの円墳である。遺物として円筒埴輪や須恵器の了杯蓋が確認されている。古墳時代後期前葉に位置づけられており、加工段５と同じかやや古いと思われる。なお、天神原古墳及び古墳の編年については下記の文献を参考にした。

（参考文献）

ア　島根県教育委員会　『出雲・下塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』 1980

イ　松木岩雄・大谷晃二　『出雲・石見』『全国古墳編年集成』雄山閣出版　1995

(13) 権現山横穴墓群については、前掲　註(12)の参考文献ア「元権現山横穴群」の項を参考にしており、横穴墓群の年代はこの報告書の記載に拠るものである。

(14) このことを考える上で状況証拠から推論したが、横穴墓築造に要する工具類などの物的証拠が見つかっていないことや、推論が妥当であるとしても横穴墓を造るためだけの集落であったのかという問題点が残る。

(15) 出雲平野の後期古墳及び横穴墓については下記の文献を参考にした。

（参考文献）

ア　前掲　註(12)の参考文献アに同じ

イ　山陰考古学研究会　『第24回山陰考古学研究集会　山陰の横穴式石室　－地域性と編年の再検討－』 1996

ウ　山陰横穴墓研究会　『第７回山陰横穴墓調査検討会　－その型式・変遷・地域性－』 1997

エ　平田市役所　『下古墳』『市制施行四〇周年記念　平田市大辞典』 2000

オ　平田市教育委員会生涯学習課　『中村１号墳現地説明会資料』 2002

(16) 前掲　註(7)参考文献イや前掲　註(10)参考文献イで、出雲平野の集落動向については詳しくまとめられており、神戸川両岸の自然堤防上に当該期の遺跡が多数分布し、集落の成立・発展と古墳・横穴墓群の築造が密接に関連していることが指摘されている。

(17) 近年の発掘成果については下記の文献を参考にした。

（参考文献）

ア　前掲　註(10)の参考文献エに同じ

イ　前掲　註(10)の参考文献キに同じ

ウ　山雲市教育委員会　『出雲市駅前自転線街路事業地内　壱丁田遺跡発掘調査報告書』 1998

エ　出雲市教育委員会　『角田遺跡』『山雲市埋蔵文化財調査報告書』第５集　1995

オ　出雲市教育委員会　『ＪＲ山陰本線・私鉄一畑電鉄連続立体交差事業地内　姫ヶ森遺跡（１地点・Ⅱ地点）発掘調査報告書』 1998

(18) 大谷晃二・松山智弘　『横穴墓の形式と評価』『田中義昭先生退官記念文集　地域に根ざして』田中義昭先生退官記念事業会　1999

(19) 下記の文献を参考にした。

（参考文献）

ア　出雲市教育委員会　『上塩冶横穴墓群第34支群発掘調査報告書』　1998

イ　出雲市教育委員会　『地蔵堂横穴墓群発掘調査報告書　　下古志地区一般農道整備事業埋蔵文化財発掘調査報告書　』　1994

ウ　前掲　註(12)の参考文献ア「祝嗣横穴」

(20) H13IV区横穴墓から出土した須恵器の蓋坏類は、大谷編年の型式分類A 6型が大半であり、上塩冶横穴墓群第34支群や地蔵堂横穴墓群の出土遺物よりもやや新しいと考えられるため、これらの横穴墓群に次ぐ時期のものと思われる。

(21) 加藤義成　『修訂出雲国風土記参究』今井書店　1981

(22) 前掲　註(17)にあげた参考文献のほか、下記の文献を参考にした。

（参考文献）

ア　出雲市教育委員会　『高浜地区ふるさと農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　高浜Ⅱ遺跡』　1999

イ　島根県教育庁埋蔵文化財調査センター　『青木遺跡現地説明会資料』　2002

ウ　出雲市教育委員会　『平成12年度　四絡幼稚園改築事業に伴う小山遺跡第3地点発掘調査報告書（第4次発掘調査）』　2002

(23) 下記の文献を参考にした。

（参考文献）

ア　都出比呂志編　「古墳が造られた時代」『古代史復元6　古墳時代の王と民衆』講談社　1989

イ　島根県教育委員会・朝日新聞社　『方墳の世界』『古代出雲文化展　　神々の国　悠久の遺産　』　1997

ウ　島根県教育委員会　『社日古墳　　一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12－』　2000

(24) 松山智弘　「上器から見た出雲における前期古墳」『第30回山陰考古学研究集会資料集』山陰考古学研究集会　2002

(25) 下記の文献を参考にした。

（参考文献）

ア　前掲　註(23)参考文献ウに同じ

イ　島根県教育委員会　「土井・砂遺跡」『中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12』　2001

(26) 八雲村教育委員会　「小屋谷古墳群」『御崎谷遺跡・小屋谷古墳群』　1981

(27) 鹿島町教育委員会　『奥才古墳群』　1985

(28) 東出雲町　『東出雲町誌』　1978

(29) 島根県教育委員会　『布志名大谷Ⅰ遺跡（1号墳）　一般国道松江道路（連絡部）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1』　2001

(30) 島根県教育委員会　　上野1号墳・墳輪棺群」『上野遺跡・竹ノ崎遺跡　中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書9』　2001

(31) 出雲市教育委員会　『西谷墳墓群　－平成10年度調査報告書－』　2000

(32) 下記の文献を参考にした。

（参考文献）

ア　金城町教育委員会　「3、総括」『波佐　《島根県那賀郡金城町波佐地区における考古学的調査》』　1994

イ　前掲　註(23)参考文献ウ「社日古墳群の位置づけとその評価」

(33) 眼位については報告者の記述に従い、特に触れていないものについては床面レベル、棺構などから判断した。なお本書では、三田谷1号墳について、前掲　註(31)文献の分類に従い小谷1式相当期に位置づけたが、調査報告書では弥生時代後期中葉の方形周溝墓として扱われていることから、慎重な検討が必要なものと考えられる。

（参考文献）

ア　前掲　註(12)参考文献ア「大寺古墳群」

イ　出雲市教育委員会　『山地古墳発掘調査報告書』 1986

ウ　島根県教育委員会　『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ　三田谷Ⅰ遺跡（Vol.1）』 1999

エ　前掲　註(31)文献に同じ

(34) 下記の文献を参考にした。

（参考文献）

ア　前掲　註(8)参考文献イ「出雲における五反田1号墳の位置づけとその評価」

イ　島根大学考古学研究室・安来市教育委員会　「島根県安来市大成古墳第4・5次発掘調査報告書　『荒島古墳群発掘調査報告書』 1999

ウ　前掲　註(23)参考文献ウに同じ

(35) 近藤義郎編『前方後円墳集成　中国・四国編』山川出版　1991

(36) 前掲　註(24)文献に同じ

(37) 前掲　註(31)文献に同じ

(38) 前掲　註(23)参考文献アに同じ

第２表　長廻遺跡出土遺物観察表（土器類）

図版番号	掲載番号	調査区	出土地点	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	手法の特徴 外	内	備考
15	1	II	SI01	土師器	甕	35.0	6.0		ヨコナデ	ヨコナデ	
15	2	II	SI01	土師器	甕か壺	29.0	4.5		調整不明	調整不明	
15	3	II	SI01	弥生土器	甕	12.0	3.1		ヨコナデ・凹線文	調整不明	
15	4	II	SI01	土師器	鼓形器台		3.4		ナデ	ナデ・ヘラ削り	
15	5	II	SI01	弥生土器	底部		8.0		ハケ目・その他調整不明	ヘラ削り	
15	6	II	SI01	弥生土器	底部		6.4	9.0	ハケ目・ナデ・その他調整不明	ヘラ削り	
18	1	II	SI02	弥生土器	壺		9.0		ハケ目・刺突文	ハケ目・しぼり痕	
18	2	II	SI02	土師器	高坏	20.0	4.7		調整不明	調整不明	
18	3	II	SI02	土師器	注口土器		8.0		ナデ	しぼり痕	
18	4	II	SI02	土師器	甕		2.5		調整不明	調整不明	
18	5	II	SI02	土師器	鼓形器台		2.2		調整不明	調整不明	
18	6	II	SI02	土師器	甑形土器	10.8	64.2	36.5	ハケ目・その他調整不明	調整不明	
22	1	II	加工段1	弥生土器	甕	13.9	3.0		ヨコナデ・凹線文	ヨコナデ・ヘラ削り	
22	2	II	加工段1	弥生土器	高台状底部		2.0	5.8	ヨコナデ	ナデ	
22	3	II	加工段2	土師器	甕	11.0	4.2		ヨコナデ・その他調整不明	ハケ目・ヘラ削り	
22	4	II	加工段2	土師器	甕		4.2		調整不明	ヨコナデ・ヘラ削り	
22	5	II	加工段2	土師器	甕	15.8	3.2		ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラ削り	
24	1	II	加工段3	須恵器	坏身	10.2	3.9		ヘラ起こし後ナデ・回転ヘラ削り・回転ナデ	回転ナデ・ナデ	
24	2	II	加工段3	須恵器	坏身	8.2	2.3		回転ナデ	回転ナデ	
24	3	II	加工段3	土師器	甕	14.6	4.8		調整不明	調整不明	
24	4	II	加工段3	土師器	甕	15.7	24.5		ハケ目・ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラ削り	黒斑・スス付着
24	5	II	加工段3	土師器	坏	約8.4	7.3		ナデ・その他調整不明	ヘラ削り後ナデ	外面黒斑
24	6	II	加工段3	土師器	坏	10.8	6.5		ナデ	ナデ・ヘラ削り	
24	7	II	加工段3	土師器	ミニチュア土器	12.0	12.2		ハケ目・ナデ	ナデ・ヘラ削り	
24	8	II	加工段3	土師器	低脚坏		1.7	6.2	調整不明	調整不明	
24	9	II	SK13	須恵器	坏身	9.2	3.8		ヘラ起こし後ナデ・回転ナデ	回転ナデ・ナデ	
24	10	II	SK13	土師器	甕	16.6	7.3		ハケ目後ナデ・ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラ削り	
24	11	II	SK13	土師器	鉢形土器	12.6	10.4		調整不明	ヨコナデ・ヘラ削り	
26	1	II	加工段4	須恵器	坏蓋	12.8	4.2		ヘラ起こし後ナデ・回転ナデ	回転ナデ・ナデ	
26	2	II	加工段4	須恵器	坏蓋	12.2	3.9		ヘラ起こし後ナデ・回転ナデ	回転ナデ・ナデ	
26	3	II	加工段4	須恵器	坏蓋	14.2	3.5		ヘラ起こし後ナデ・回転ナデ	ナデ・回転ナデ	
26	4	II	加工段4	須恵器	坏蓋	12.0	3.8		ヘラ起こし後ナデ・回転ヘラ削り・回転ナデ	回転ナデ・ナデ	
26	5	II	加工段4	須恵器	坏蓋	12.2	3.5		回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	
26	6	II	加工段4	須恵器	坏蓋	13.2	2.9		回転ナデ	回転ナデ	
26	7	II	加工段4	須恵器	坏蓋	12.6	2.7		回転ナデ	回転ナデ	
26	8	II	加工段4	須恵器	坏身	12.2	3.9		ヘラ起こし後ナデ・回転ヘラ削り・回転ナデ・ヘラ記号	回転ナデ・ナデ	
26	9	II	加工段4	須恵器	坏身	10.6	3.3		ヘラ起こし後ナデ・回転ヘラ削り・回転ナデ	回転ナデ・ナデ	
26	10	II	加工段4	須恵器	坏身	11.4	2.3		回転ナデ	回転ナデ	
26	11	II	加工段4	須恵器	直口壺		6.5		回転ナデ・回転ヘラ削り	回転ナデ	
26	12	II	加工段4	須恵器	蓋付椀？		2.9	7.8	回転ナデ	回転ナデ	
26	13	II	加工段4	須恵器	高坏	13.4	10.3	10.8	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	
26	14	II	加工段4	土師器	甕	17.6	6.5		調整不明	ヨコナデ・ヘラ削り	
26	15	II	加工段4	土師器	甕	20.8	6.4		調整不明	ヨコナデ・ヘラ削り	
26	16	II	加工段4	土師器	甕	16.6	7.0		ヨコナデ・その他調整不明	ヨコナデ・ヘラ削り	
26	17	II	加工段4	土師器	甕	23.2	4.8		ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラ削り	
26	18	II	加工段4	土師器	甕	11.8	4.6		調整不明	ヨコナデ・ヘラ削り	
26	19	II	加工段4	土師器	小型器台		3.5		ハケ目・その他調整不明	ハケ目・しぼり痕	
26	20	II	加工段4	土師器	把手		6.0		ナデ・ヘラ削り		
26	21	II	加工段4	土師器	把手		4.1		ナデ・ヘラ削り		
36	1	II	SD04	土師器	甕		2.0		調整不明	調整不明	
36	2	II	SD05	土師器	直口壺	9.3	13.3		ハケ目・その他調整不明	ヨコナデ・ヘラ削り・指頭圧痕	内外赤色顔料塗布
36	3	II	SD08	土師器	低脚坏		2.6		ナデ	ナデ	
36	5	II	SD09	須恵器	坏身	11.8	3.6		ヘラ起こし後ナデ・回転ナデ	回転ナデ・ナデ	
36	6	II	SD09	須恵器	高坏	14.4	9.6	9.0	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	
36	7	II	SD09	土師質土器	高台付坏	12.4	7.3		調整不明	ナデ・ヘラ削り	
36	8	II	SD09	土師器	甕	16.4	5.0		調整不明	ヘラ削り	
36	9	II	SD10	弥生土器	甕	15.2	5.2		ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラ削り	
42	1	II	SK06	土師器	甕		17.1		ハケ目	ヘラ削り・指頭圧痕	
46	1	II	SK01	磁器	碗		4.4	9.6	施釉・蛇の目凹形高台・藍色の染付	施釉	肥前系
46	2	II	SK01	陶胎染付	碗		2.5		施釉	施釉	肥前系
46	3	II	SK12	土師器	土製支脚		8.2		ナデ	ヘラ削り	
46	4	II	SK12	須恵器	長頸壺		9.3	5.7	回転ナデ・回転ヘラ削り・ヘラ記号	回転ナデ・ナデ	
46	5	II	SK14	土師質土器	坏		4.0	6.0	調整不明	調整不明	

図版番号	掲載番号	調査区	出土地点	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	手法の特徴 外	内	備考
46	7	Ⅱ	SK29	弥生土器	甕	14.2	2.0		ヨコナデ・ナデ・凹線文	ナデ	
46	8	Ⅱ	SK30	土師器	壺		5.4		調整不明	調整不明	
46	9	Ⅱ	SK31	土師器	壺		4.4		調整不明	調整不明	
46	10	Ⅱ	SK31	弥生土器	甕	15.6	3.0		調整不明	調整不明	
46	11	Ⅱ	SK31	土師器	壺	31.0	4.2		ヨコナデ	ヨコナデ	
46	12	Ⅱ	SK31	弥生土器	甕	21.0	3.8		調整不明	調整不明	
46	13	Ⅱ	SK35	弥生土器	甕	22.0	2.8		凹線文・その他調整不明	調整不明	
46	14	Ⅱ	SK35	弥生土器	甕		4.2		調整不明	調整不明	
46	15	Ⅱ	SK46	土師器	鼓形器台		3.7		調整不明	調整不明	
46	16	Ⅱ	SK47	土師器	高坏		5.4		調整不明	ヘラ削り・その他調整不明	
46	17	Ⅱ	SK50	須恵器	高坏	16.0	3.6		回転ナデ	回転ナデ	
52	1	Ⅲ	加工段5	弥生土器	甕	32.0	4.2		貼付突帯文・その他調整不明	調整不明	
52	2	Ⅲ	加工段5	弥生土器	甕	27.5	10.8		ヨコナデ・凹線文・その他調整不明	ハケ目・ヨコナデ・ヘラ削り・指頭圧痕	
52	3	Ⅲ	加工段5	弥生土器	甕	28.0	9.6		ハケ目・ヨコナデ・凹線文	ナデ・指頭圧痕・その他調整不明	
52	4	Ⅲ	加工段5	弥生土器	甕	25.0	3.8		ヨコナデ・凹線文・貼付突帯文	ヨコナデ・ヘラ削り	
52	5	Ⅲ	加工段5	弥生土器	甕	21.0	5.4		ヨコナデ・凹線文・その他調整不明	ヨコナデ・ヘラ削り	
52	6	Ⅲ	加工段5	弥生土器	甕	19.8	4.4		ヨコナデ・凹線文	ヨコナデ・ヘラ削り	
52	7	Ⅲ	加工段5	弥生土器	甕	20.5	1.9		ヨコナデ・凹線文	ヨコナデ	
52	8	Ⅲ	加工段5	弥生土器	甕		3.4		凹線文・その他調整不明	調整不明	
52	9	Ⅲ	加工段5	弥生土器	底部		2.4	5.4	調整不明	ヘラ削り・ナデ	
52	10	Ⅲ	加工段5	弥生土器	底部		2.0	5.7	ハケ目・ナデ	ヘラ削り	
52	11	Ⅲ	加工段5	弥生土器	底部		2.6	8.2	ハケ目・ヘラ削り	ヘラ削り	
52	12	Ⅲ	加工段5	弥生土器	底部		6.0	5.5	ハケ目・ヨコナデ・ナデ・指頭圧痕	ナデ・ヘラ削り	
52	13	Ⅲ	加工段5	弥生土器	底部		5.1	8.0	ハケ目・ヨコナデ	ヘラ削り	
52	14	Ⅲ	加工段5	弥生土器	壺		10.9		ハケ目・ヘラ描沈線文・刺突文・綾杉文・凹線文	ハケ目・指頭圧痕	
52	15	Ⅲ	加工段5	弥生土器	鉢		4.5		ハケ目・押引き刺突文・沈線文	ヘラ削り	
52	16	Ⅲ	加工段5	弥生土器	鉢	27.6	3.4		ヨコナデ・凹線文	ヨコナデ	
53	1	Ⅲ	加工段5	須恵器	坏身	11.6	4.1		回転ナデ・回転ヘラ削り	回転ナデ・ナデ	
53	2	Ⅲ	加工段5	土師器	坏	12.2	4.3		ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・ヘラ削り	内外赤色顔料塗布
53	3	Ⅲ	加工段5	土師器	坏	14.8	6.1		ヨコナデ・その他調整不明	ヨコナデ・ナデ	内外赤色顔料塗布
53	4	Ⅲ	加工段5	土師器	高坏	19.0	14.2		ハケ目・ヨコナデ・ナデ・指頭圧痕	ヨコナデ・ナデ・ヘラ削り	内外赤色顔料塗布
53	5	Ⅲ	加工段5	土師器	高坏	19.0	14.2		ハケ目後ナデ・指頭圧痕・その他調整不明	ヨコナデ・ナデ・ヘラ削り	内外赤色顔料塗布
53	6	Ⅲ	加工段5	土師器	高坏	20.8	7.3		ハケ目・ナデ・その他調整不明	ヨコナデ・ナデ・ヘラ削り	内外赤色顔料塗布
53	7	Ⅲ	加工段5	土師器	坏	15.6	5.9		ヨコナデ・ナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・暗文	内外赤色顔料塗布
53	10	Ⅲ	加工段5	弥生土器	把手		8.0		ヘラ削り		
53	11	Ⅲ	加工段5	弥生土器	高台状底部		2.1	6.8	ヨコナデ・その他調整不明	ナデ・ヘラ削り	
57	1	Ⅲ	SD18	弥生土器	甕	16.6	2.8		ヨコナデ・凹線文	ヘラ削り・その他調整不明	
57	2	Ⅲ	SD18	弥生土器	甕	16.2	4.1		調整不明	ヨコナデ・ヘラ削り	
57	3	Ⅲ	SD18	弥生土器	底部		3.1	5.6	調整不明	ヘラ削り	
57	4	Ⅲ	SD18	須恵器	坏蓋		1.5		輪状つまみ・回転ナデ・ナデ	ナデ	
57	5	Ⅲ	SD18	須恵器	坏蓋	12.4	1.5		回転ナデ	回転ナデ	
57	6	Ⅲ	SD19	土師器	坏	11.4	4.6		ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・ナデ	内外赤色顔料塗布
57	7	Ⅲ	SD19	土師器	坏	13.2	4.3		ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・その他調整不明	内外赤色顔料塗布
57	8	Ⅲ	SD19	土師器	坏	12.4	4.9		調整不明	ヨコナデ・ナデ	内外赤色顔料塗布
57	9	Ⅲ	SD19	土師器	坏	11.6	5.4		ヨコナデ・ヘラ削り	ヨコナデ・その他調整不明	内外赤色顔料塗布
57	10	Ⅲ	SD19	土師器	坏	12.5	5.4		調整不明	調整不明	
57	11	Ⅲ	SD20	土師器	甕	17.2	11.5		ハケ目・その他調整不明	ヨコナデ・ヘラ削り	
57	12	Ⅲ	SD20	弥生土器	甕	20.8	3.8		ヨコナデ・凹線文	ヨコナデ・ヘラ削り	
57	13	Ⅲ	SD20	弥生土器	甕		3.4		ヨコナデ・凹線文	ヨコナデ・ヘラ削り	
58	1	Ⅲ	SK55	土師器	鼓形器台	22.0	13.6	19.4	ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラ削り	
58	2	Ⅲ	SK55	土師器	高坏	14.8	7.7		調整不明	調整不明	
58	3	Ⅲ	SK55	土師器	高坏	20.6	7.1		ハケ目・ヨコナデ・その他調整不明	調整不明	
58	4	Ⅲ	SK55	土師器	高坏	17.8	4.0		調整不明	調整不明	
58	5	Ⅲ	SK55	土師器	高坏	21.6	5.3		調整不明	調整不明	
59	1	Ⅲ	SK56	須恵器	坏	14.1	4.5	8.2	回転ナデ・回転ヘラ削り	回転ナデ・回転ヘラ削り	
59	2	Ⅲ	SK56	須恵器	坏	15.2	3.4		回転ナデ	回転ナデ	
60	1	Ⅲ	SX02	弥生土器	甕	13.6	5.0		ハケ目・ヨコナデ・刺突文・凹線文	ヨコナデ・ハケ目	
60	2	Ⅲ	SX02	土師質土器	坏	11.2	3.6	5.2	回転糸切り・その他調整不明	ナデ・その他調整不明	

図版番号	掲載番号	調査区	出土地点	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	手法の特徴 外	内	備考
60	3	Ⅲ	SX02	弥生土器	蓋形土器	6.4	6.4	17.6	調整不明	調整不明	
60	4	Ⅲ	SX02	弥生土器	底部		2.6	5.3	ハケ目・ナデ	ナデ・ヘラ削り	
66	1	Ⅳ	1号横穴墓	須恵器	坏蓋	13.1	4.3		ヘラ起こし後ナデ・回転ナデ	回転ナデ・ナデ	
66	2	Ⅳ	1号横穴墓	須恵器	坏身	16.9	4.0		粗い回転ヘラ削り・回転ナデ	回転ナデ・ナデ	
66	3	Ⅳ	1号横穴墓	須恵器	坏蓋	12.0	3.9		回転ナデ・回転ヘラ削り・ヘラ記号	回転ナデ・ナデ	
66	4	Ⅳ	1号横穴墓	須恵器	坏身	17.0	3.7		ヘラ起こし後ナデ・回転ナデ	回転ナデ・ナデ	
66	5	Ⅳ	1号横穴墓	須恵器	坏蓋	13.0	4.7		ヘラ起こし後ナデ・回転ヘラ削り・回転ナデ	回転ナデ・ナデ	
66	6	Ⅳ	1号横穴墓	須恵器	坏身	10.8	4.0		回転ナデ・回転ヘラ削り	回転ナデ・ナデ	
66	7	Ⅳ	1号横穴墓	須恵器	坏蓋	12.4	4.0		回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	
66	8	Ⅳ	1号横穴墓	須恵器	坏身	10.8	3.8		回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	
66	9	Ⅳ	1号横穴墓	須恵器	広口壺	7.7	8.5		回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	内外一部自然釉
70	1	Ⅳ	SD22	弥生土器	甕	17.8	5.0		ヨコナデ・凹線文・その他調整不明	ハケ目・ヨコナデ	
70	2	Ⅳ	SD22	弥生土器	底部		2.4	5.0	ナデ	調整不明	
70	3	Ⅳ	SD22	弥生土器	高台状底部		4.6	6.8	ナデ・ヘラ削り	ナデ	
70	4	Ⅳ	SD22	弥生土器	高坏	23.0	8.0		ヨコナデ・ヘラミガキ・凹線文	ヘラミガキ・その他調整不明	
70	5	Ⅳ	SD23	縄文土器	深鉢		3.0		ナデ・貼付突帯・キザミ目文	ナデ	
70	6	Ⅳ	SD23	弥生土器	甕	17.8	3.7		凹線文・その他調整不明	調整不明	
70	7	Ⅳ	SD23	弥生土器	甕	14.4	4.4		調整不明	調整不明	
70	8	Ⅳ	SD23	弥生土器	甕	21.2	5.6		調整不明	調整不明	
70	9	Ⅳ	SD23	弥生土器	甕	17.2	1.2		凹線文?・その他調整不明	調整不明	
70	10	Ⅳ	SD23	弥生土器	甕	26.0	3.2		ヨコナデ・凹線文	調整不明	
70	11	Ⅳ	SD23	弥生土器	甕	14.8	1.7		ヨコナデ・凹線文	調整不明	
70	12	Ⅳ	SD23	弥生土器	鉢	12.8	2.7		凹線文	ナデ	
70	13	Ⅳ	SD23	弥生土器	高坏	20.6	4.4		ヘラミガキ・凹線文	調整不明	
70	14	Ⅳ	SD23	弥生土器	把手		8.5		ヘラ削り・その他調整不明		
70	15	Ⅳ	SD23	弥生土器	底部		2.8	5.8	ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラ削り	
70	16	Ⅳ	SD23	弥生土器	底部		2.4	5.0	ナデ	ナデ	
70	17	Ⅳ	SD23	弥生土器	底部		3.5	4.6	調整不明	ナデ	
70	18	Ⅳ	SD23	弥生土器	底部		2.2	3.2	ナデ	調整不明	
72	1	Ⅳ	SK59	土師器	壺	19.8	32.2		ハケ目	ナデ・ヘラ削り・指頭圧痕	
74	1	Ⅳ	SK67	土師器	甕	9.8	8.0		調整不明	ナデ・ヘラ削り	内外赤色顔料塗布
75	1	Ⅳ	SK64	弥生土器	底部		2.4	5.7	調整不明	調整不明	
75	2	Ⅳ	SK66	土師器	小型丸底壺	9.0	6.0		ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ・ヘラ削り	
75	3	Ⅳ	焼土坑1	土師器	直口壺	10.0	4.0		ヨコナデ	ヨコナデ	内外赤色顔料塗布

第3表　長廻遺跡出土遺物観察表（石・土・金属製品ほか）

図版番号	掲載番号	調査区	出土地点	種別	器種	重さ(g)	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	手法の特徴	備考
26	22	Ⅱ	加工段4	黒曜石	石鏃	3.6	2.1	1.8	0.3		
36	4	Ⅱ	SD09	土製品	土錘	14.39		3.0		ナデ	
46	6	Ⅱ	SK19	黒曜石	剥片	8.2	3.5	1.6	1.0		
53	8	Ⅲ	加工段5	鉄製品	長頸鏃		鏃身部残存長2.5	頸部残存長3.3	0.2~0.3	逆刺無茎式台形関被	
53	9	Ⅲ	加工段5	土製品	土錘	22.47		4.6		沈線・その他調整不明	
66	10	Ⅳ	1号横穴墓	石製品	紡錘車	31.82		2.7	4.2	綾杉文	凝灰岩製
66	11	Ⅳ	1号横穴墓	石製品	紡錘車	27.81		2.2	5.0	調整不明	凝灰岩製
66	12	Ⅳ	1号横穴墓	耳環	銀環	8.5	2.2	2.4	0.45		
71	1	Ⅳ	SD22	黒曜石	石鏃	2.0	3.95	1.9	0.4		
71	2	Ⅳ	SD22	黒曜石	石鏃	0.8	2.6	1.65	0.35		
71	3	Ⅳ	SD23	黒曜石	石鏃	0.8	1.6	2.1	0.3		
71	4	Ⅳ	SD23	黒曜石	石鏃	0.8	1.85	1.7	0.4		
71	5	Ⅳ	SD23	黒曜石	石鏃	0.4	2.0	1.2	0.3		
71	6	Ⅳ	SD23	黒曜石	石鏃	0.6	1.65	1.65	0.3		
71	7	Ⅳ	SD23	黒曜石	石鏃	0.9	2.05	1.4	0.3		
71	8	Ⅳ	SD23	サヌカイト	石鏃	1.2	2.5	2.1	0.4		
71	9	Ⅳ	SD24	安山岩	石鏃	0.6	1.75	1.75	0.25		
71	10	Ⅳ	SD22	黒曜石	石核?	9.3	3.7	4.2	0.9		
71	11	Ⅳ	SD23	黒曜石	楔形石器	2.1	2.85	1.6	0.8		
71	12	Ⅳ	SD23	黒曜石	剥片	3.6	3.2	2.8	0.45		
71	13	Ⅳ	SD23	黒曜石	剥片	1.8	2.6	2.95	0.25		
75	4	Ⅳ	SK60	凝灰岩	石鏃	0.6	1.55	1.8	0.3		珪化した流紋岩の可能性もある
75	5	Ⅳ	SK61	黒曜石	石鏃	0.2	1.35	1.05	0.25		
75	6	Ⅳ	SK61	黒曜石	微細剥離のある剥片	4.0	3.17	2.9	0.4		

写 真 図 版

Ⅱ区
調査前風景（西より）

Ⅲ区
調査前風景（北より）

Ⅳ区・権現山古墳
調査前風景（北より）